
仮面ライダーハスター

弥太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーハスター

【Nコード】

N6944L

【作者名】

弥太

【あらすじ】

『仮面ライダー』と呼ばれる3人のヒーロー
『グール』と呼ばれる無数の怪物達

3つの決意と無数の欲望。全ては誰かの遊びの一つ。

偶然と必然、喜びと悲しみが入り交じり、苦悩し歓喜ながら戦う3人の物語。

零話 夢（前書き）

オリジナル仮面ライダーの小説です。

オリジナル仮面ライダーを認めない方、昭和ライダーのようなカッコよさを求める方にはお勧めできません。

初めての執筆なのでおかしな文章があるかもしれませんが、発見したらどうか御指摘下さい。

それでは始まりです。

零話 夢

街灯も無く暗闇に染まった真夜中の路地裏。その暗闇の中を歩く白い影と黒い影。そこには人など居ない。人ではなく、白い人の姿をした何かと、複数の黒い野獣の姿をした大勢の何か。その白い方は黒い奴等の前に立ち、何かのポーズをとっている。

「グルッ！グルルウ！！」

「かかってこい！怪人ども！！」

たくさんの黒い奴等に囲まれた白い人型の何か。そいつは黒い奴等を怪人達と呼んでいる。

特撮ヒーロー風に言えば、悪の怪人達と、悪を倒す正義のヒーローと言えそうな出で立ちである。

その時、白いヒーローを囲んでいた怪人達が一斉に襲い掛かった。白いヒーローは、本当にテレビで観てきたスーパーヒーローの様に複数の怪人相手に1人で勇敢に立ち向かっていく。

なぜ戦っているのかは解らない。なぜこんな者が存在するのも解らない。俺はそいつをただ見ているしか無かった。

「ふんっ、とどめだ！！」

「ぐう!!」

怪人が最後の一人になった。白いヒーローはその怪人に向かって走り出す……

……その瞬間、急に視界が暗くなり、景色は真っ暗な部屋の中に変わってしまった。

そこには二人の青年が居るだけだった。

——僕の駒は揃いました。僕はこの駒で勝負しましょう——

白い服を着た青年がチェス盤の駒をいじりながら話している。

——面白いじゃないか、私から奪った駒まで使うとは……——

黒いスーツを着た青年は白い青年に対して答える。

二人が何の話をしているかなど全く解らない。その意味を理解しようとしている内に今度は視界が明るくなり、2人の姿も光で薄れ、その内に遠ざかって行く。その眩しさで瞑っていた目を開いてみると……

「……ぶはっ！！」

目が覚めた。

「夢か……」

一話 現実

9月8日

午前10時 アパートの一室

みさわ
三沢 そうつた
颯太

全く意味の解らない夢だった。おかしい夢は今までに幾らでも見たことは有ったが、今日の夢は格別目覚めが悪い夢だった。

「何だよあの意味不なヒーローは……………」

俺は特撮ヒーローは好きだ。属に言うヒーローオタクだ。仕事が忙しくても、仕事を辞めてプーターローになった時も、22歳でフリターになった今でも放送しているものは毎週欠かさず観ている。しかし、さっきの夢に出てきたヒーローは見たことがない。お世辞にもカッコいいと言えるほどの物ではなかった。

変な夢を見ることはしょっちゅうだし、いつもだったら直ぐに忘れてしまうだろう。しかし、あの白い超人と青年達の言った言葉だけが頭の中をぐるぐる廻っている。まるで俺に何かを伝えるかのよう。

そんな中二病みたいなことを考えながら顔を洗っていると、重大なことに気がついた。

「……………今日、バイト入ってんじゃない……………」

今日は同期の友達が休みをとったため、俺の貴重な休みが潰され

てしまったのだ。用事があると言っていたが、どうせ彼女とデートでもしているのだろう。

「しかたねえか……」

あくびをしながらそう呟き、現実を見つめながら朝食、いや昼食の用意を始めた。と言っても、お湯を沸かしてカップ麺にお湯を注ぐだけだ。

「……くっそお……」

決して仕事が嫌いなわけではない。休みを潰してまで働くのが億劫なのだ。しかし、落ち込んでいる暇はない。食べ終わったカップ麺のゴミを捨て、洗面所でゆっくり歯を磨く。適当に口をゆすいで一通り朝食は終わった。

もう一度布団に寝そべり時計を見してみる。今は10時20分頃だ。バイトは13時からだからまだまだ時間がある。しかし二度寝できる程の時間では無い。

「散歩でもしてくっかな……」

とるあえず何もせずに家に居るよりは良いだろう。そうと決まれば、着ていたスウェットから適当な服に着替え、外へと歩いていった。

5分、10分ほど経つだろうか。フラフラと歩いて、家の近くの公園に来てみた。滑り台やブランコで子供達が楽しそうに遊んでいる。

「気楽でいいなあ、ガキンちょは……」

そんなことをボヤキながらベンチに座り一息つく。散歩と言っても、毎回この公園のベンチに座って、遊んでるガキンちょを見て帰るというルートだ。

別に子供が好きな訳ではないし、知り合いの子供が居るわけでもない。それでも俺は公園で暇を潰そうとすると人間観察を初めてしまふようだ。

ガキンちょ達はどうかやらサッカーをやっているようだ。人数は明らかに足りず、5対5位の人数のようだ。俺はスポーツはそこまで好きではないが、こう言うユルい遊びみたいなスポーツは好きだった。だから高校時代は、オタクばかりの文化部にしながら、休みは運動部の友達と良く遊んだりした。今はそんな友達とも連絡は取らなくなり、孤独なフリーターまっしぐらである。

そんなことを思い出しながら、俺は目でボールを追いかける。すると、視界の隅に見覚えのある女性を通った。別に嫌いな訳ではないが、俺は慌て目を背けた。やめろ、来るな、どうか気付かないでくれ。

「三沢く〜ん？こんなところでボーツとしてないでさあ、うちの店でゆつくりしていったらあ？」

「マ……マスター………」

気づかれた。彼女は近くの喫茶店『THE FOOL』のマスター「葉山 未智」で、今はおそらく買い出しの途中である。その喫茶店『THE FOOL』こそ俺のバイト先である。

「それは働けってことですか？」

「フッフ、解ってるなら説明は要らないわね。」

「俺は定時から働きたいのですが……」

「さて、そろそろお客さんが集まる時間だから、一緒に働いて欲しいんだけどな」

「聞いちゃいねえ……まあ仕方ないか……」

なぜか俺を含め店員は彼女には逆らえない。マスターだからという事だけではなく、そんな雰囲気を出しているからだ。そして今日も『これはいつもより稼げるチャンスだ！』と自分に言い聞かせ、いつもより早く働きはじめなければならない。

『ピロリロリ〜ピロリロリ〜ン』

俺は言い訳することを諦め、店に向かおうとしていた、その時だった。友達から電話がかかって来た。

『もしもし、颯ちゃん？ごめんね、今日のバイト休んじゃって。』

電話の相手は今日バイトを休み、俺の休みを削った張本人「佐久間 秀二」だ。すまないと思うなら最初から休まないで働いて欲しいところだが。

「気にすんな、何のようだ？」

『お詫びと言っちゃなんだけどさ、この後暇に成っちゃったから飯

でも食いに行かない？」

「うーん、でもお前から廻された仕事が……」

今は11時少し前だ。先ほどカップ麺を食ったばかりのうえ、仕事は廻されているので、乗るか乗らないかなり迷う。

『案外根に持つ奴だな、この際お前も休んじゃえば？』

「いや、今日の前にマスター居るし……」

『それは休み難いな……でも、一時まで暇なら、飯ぐらい付き合ってくれよ。』

「仕方ない、仕事から逃げる口実に付き合ってやる。」

何度も言うが、自分は決して仕事が嫌いなわけではない、しかし労働時間が伸ばされるのは好きではない。特に客が集まりそうな時間から始まるとなると尚更だ。

『さっすが颯ちゃん、そう来なくっちゃ！じゃあ俺はこの前と同じ所で待ってるから、じゃね。』

解った、と返事をする前に切られてしまった。それでも内容は理解できたから大丈夫だ。

「じゃあ、自分は急用ができましたので……」

「何が急用よ、聴こえてたわよ。佐久間君とご飯食べに行くんでしょ。」

「……い、1時までには帰って来ます。」

「当然よ。て言うか、たまには私も誘いなさいよ!」

「こ、今度誘いますから、許して下さい。」

先ほどの救いの電話は全て聴かれていたようだ。そして何故か、誘ってもらえなかったことに腹をたてているらしい。正直マスターは美人の部類に入るため、食事に誘うことなど恐れ多くて自分には出来ない。

「ふん、絶対だからね。」

「はい、そ、それじゃあ自分はこれで。」

そう軽く挨拶をして俺は待ち合わせ場所へ、マスターは店の方へと歩いて行った。

佐久間はこの前と同じ所としか言わなかった。基本的にあいつと外食に行かないため、そこ以外の所に一緒に食べに行った覚えが無い。違ったら違ったでその時電話すればいいだろう。そう考えながらラーメン屋へと歩みを進めて行く。

そのラーメン屋は大通りから少し離れた所にある。先ほどの公園も大通りに近い訳では無いが、その公園よりも更に遠いで有ろう。しかも、ここからラーメン屋へ行く為の道順はよく知らない。誰も通る人は居ないが恐らくこの道だろうと、細い道に入ってみる。すると、その道の真ん中には何やら見慣れぬ黒い物体が落ちてい

た。俺は不思議に思い、その見慣れぬ物体を拾い上げた。球体で砲丸の様に見えるが、それほど重くはない。そのまま落としてみても、ボールの様には跳ね返らず、その場で少しバウンドするだけだった。

「……なにこれ？」

砲丸でもボールでもない黒い球体。本当に何だか解らない。しかし、そのまま捨てるのもつまらないと思い、佐久間に見せるために持って行こうと考えた。

「……流石の佐久間も正体は見破れんだろう。」

フフフ、と佐久間の驚く顔を思い浮かべ軽くにやける。そして、その黒い球体を持ったままラーメン屋の方へと歩いて行く。

すると、しばらくも歩かないうちに、今度は何やら怪しげな形の人影が正面に見えた。その人影は良く見ると、ただのクマ着ぐるみだった。その着ぐるみは、おぼつかない足取りで近付いて来た。

「え、こつち来たけど……？」

とても奇妙な光景である。こんな目立たない所で店の宣伝づもしているのだろうか。そんな事を考ながら、その着ぐるみを見つめていると、着ぐるみの方は俺の手の黒い球体を見つめている事に気がついた。

「……づいに……みづ……げだ……！！」

この球体を指差して喋り出した。声がこもっているせいで聞き取り辛かったが、この球体を探しているということは、これも商売道具の一つなのだろうか。

「それを……ごつちへ………」

やはりそうだった。きつとあの着ぐるみさんは、この商売道具を探していたのだろう。少し名残惜しみながらも、俺は着ぐるみさんに黒い球体を渡そうとした。
その時

『渡すな。早くそいつから離れろ。』

何処からか声が聞こえた。振り替えると、白いローブをまとった男が立っていた。渡すなど言うことは、あのクマさんの営業の邪魔をしているのだろうか？
クマさんはその声を聞くなり、愛らしい姿をわなわなと震えさせ、雄叫びを上げた。

「グオアアア！邪魔をずるなああ！！」

営業妨害だからといって、そこまで怒るものなのか？などと能天気な事を考えながら見ていたが、全く違った。
その雄叫びと共にクマの着ぐるみが弾け飛び、中からクマの姿をかたどった様な怪物が現れた。

「ば、化け物！？」

『何度も言わせるな。早くそいつから離れろ。』

ローブの男はその怪物に臆することなく俺と怪物の間に立ち入り、俺の手から黒い球体を引いたくって、俺の事を後ろへ突き飛ばす。そして、手に握られていたはずの球体は自動的に変形してゆき、その形は杖へと変化した。ローブの男はその杖で怪物を殴りつける。

しかし、怪物は少したじろぐ程度で、そこまでのダメージにはなっていない。

『く、この力も衰えてきたか……』

「グアアアア!!」

それどころか、攻撃したせいで怪物の怒りが更に増してしまった。

「い、いったい何なんだ、こいつら!？」

『貴様、早く逃げ……ガアア!!』

ローブの男は俺に構っているすきに、怪物の強烈なパンチを喰らっていた。ローブの男は俺よりも更に後ろに吹っ飛んでいつてしまった。

「お、おい!大丈夫かよあんた!？」

俺は急いでローブの男に駆け寄った。俺がサツさと逃げればこんなことには成らなかったのに。今更になって自分の無力さを後悔する。ローブの男は顔さえ見えないが、相当なダメージを負っている様に見える。

「お、おい!しっかりしろ!!」

俺はこのままでは不味いと思い、ローブの男を背負い、走って逃げた。

『貴様…何故逃げない……』

「怪我人放っておけるかよ。そんなことよりアンタは一体何者なんだ？」

『ちつ…私の名前は『ハスター』だ。あの怪物…『ゲール』達を倒すために戦っている。』

「グ、ゲール？あいつ何者なんだよ？」

『詳しいことは知らない方が良く。知る必要もない。』

「何だよそれ……」

あの怪物は『ゲール』という名前らしい。何者かなんて聞いたのは自分だが、教えてくれそうもないし、今は逃げる事が先だ。

『俺は戦う。さっさと逃げろ！』

「だから、怪我人放っておけるかよ！」

『そんなこと言ってる場合か！？』

臆病でバカのくせに正義感だけ先走って何時も痛い目に会う。ヒーローに憧れるバカな子供と同じ。俺の悪い癖だ。

「グルアアア！！」

「げっ！もう追い付かれた！！」

やっぱり逃げておけば良かった。そう後悔するのは何時も追い込まれた後だ。

『グウ……あまり気は進まないが仕方ない。貴様の体少し借りるぞ！』

「へ？」

もうダメかな。そう思ったとき、俺が背負っていた筈のハスターは急に立ち上がり、持っていた杖が黒い球体へと戻った。そして、ハスターが黒い球体に吸い込まれていった。

「え？ なっ……！？」

『そこにしっかりと立っている！ はあ！！』

黒い球体に言われたままに立っていると、黒い球体が光輝きだした。その光に怪物も驚き、後ずさって行く。黒い球体はアメーバの様になって俺の腰に巻き付き、大きなバツクルのベルト、まるで仮面ライダーの付けているベルトへと変わった。

「な、なんだこれ！？」

『貴様の記憶の中の『武具』のイメージとリンクした形だ。どの様に使うかは知らんが不思議な形だな。』

「武具って言ってもまんま仮面ライダーのベルトじゃねえか！？」

『仮面ライダーと言うのか……いや、そんなことより、こんなことに貴様を巻き込んだことは申し訳ないと思っている。これは貴様を守る為の最良の手段だ……』

「最良の手段……？」

『貴様がさっさと逃げればこのような判断をしなくてすんだのだから……』

「どう言うことだよ？このベルトをどうすれば……」

その言葉を呟いて、俺が今まで憧れて来たヒーローの姿を思い出した。まさかこれで変身しろとも言っのか？力の主のハスターも使いが解らないのに……

戸惑っている間に、怪物は凄スピードで爪を降り下ろす。

「グオオオオオ！！」

「うわああ！！！」

あの怪物から放たれたクローを俺は間一髪で避けた。当たったら死ぬ。確実に。

逃げるのが最良だと思ったが、先程怪物が此方までやって来たときのスピードを考えるとどうやら逃げ切れそうもない。となると、この場を切り抜ける手段はただ一つ……

『戦う覚悟が出来たら、このベルトに気を集中させてくれ。何か使いが解るかもしれん。解らなくとも貴様のイメージ次第で上手く行くはずだ。』

やっぱり戦うしか乗り切る道は無いようだ。と言っても、ケンカはそんなに強い訳でも無ければ、ケンカが好きな訳でもない。そんな俺が誰かと殺し合うなんて想像も付かない。

「どうすんだよ…気を集中させるって……」

俺は少しあの怪物から少し距離をとり、言われた通りにベルト、お腹の辺りに気を集中させてみる。すると、うつすらとベルトが緑色に輝き出した。

その後は俺のイメージ次第だとハスターは言った。具体的にはどうすれば良いか解らないが、取り敢えず見よう見まねでライダーの変身ポーズをとってみる。

左腕は肘を曲げ少し後ろに引き、右腕は力強く左斜め前に伸ばす。そして後はある一言を叫ぶだけだ。

「変…身……！！」

その言葉を発すると、ベルトから黒いスーツが形成され、頭以外の全身を覆って行く。更にそのスーツの上から胸部、腕、脚に白を基調とした金と青のラインが入ったアーマーが形成されてゆく。頭には2つの複眼と三本の角が着いた重厚な白いマスクが形成された。

『今、私の中の他世界の『戦士の記憶』がお前のイメージとリンクした。このベルトにはリンクしたイメージを鎧のように形成する力が有るようだな。』

「なんだか良く解んないけど成功なのか……！？」

『結果的には成功だろう。奴もお待ちかねのようだ。』

自分の体の変化に戸惑いながらあの声に言われた怪物を見る。グールもこちらの変身に驚いている。しかし、それでも奴は向かってくる。

「やってやろうじゃねえか!!」

そうして、向かって来たグールに思い切りパンチを食らわす。

「ゲエア!？」

『想像以上の力だな…』

パンチを食らったグールは軽く吹き飛ぶ。強い、これなら勝てる。そう確信した。

そして、もう一度グールに渾身のパンチを放つ。しかし、相手も同じ攻撃を食らうほど愚かではない。グールはそのパンチを両手で受け止め、俺を弾き返す。

「うおおっ!」

『そんながむしやらなパンチでは勝てんぞ。』

ハスターの言葉は少し癪にさわるが、実際のところはその通りだった。飛ばされたダケなのに結構痛い。今の痛みでやっと現実に戻された様な気分だ。

「今になってようやく恐くなってきたぜ…」

『恐れるな、力では勝っているはずだ。相手の攻撃を良く見れば倒せる。』

「勝手に巻き込んだくせに、言ってくれるな……」

『だからさっさと逃げろと言っただろうが。』

ハスターのアドバイスに軽く悪態をついたが、本気で言っている訳ではない。そんな事を言っている間にもグールは襲って来る。

「グオオオオ!!」

『奴の手を良く見てろ。降り下ろされたら直ぐその手を掴め。』

「急に言われて出来るもんじゃねえだろそ……れっ!!」

ハスターに文句を言っている内にその手は降り下ろされた。掴むことは無理だったが、俺はとっさに両腕のガントレットで受け止めた。

「グガア!!」

「な……ぐへあ!？」

止めたまでは良かったが、その後奴は瞬時に間合いをとり、ノーガードの俺の腹へと突っ込んできた。

『さすがに掴んで投げるには無理があつたか……』

「ゲホッゲホッ……お前そんなこと考えてたのかよ!? 結果的に俺ボロボロだし……」

2発しか攻撃を喰らっていないが、結構厳しくなってきた。ハスターも言っていたがもう余裕はない。

「くっそ……どうすりゃ良いんだよ!」

『焦るな、次にやつが向かって来た時で決める。投げ技が無理なら、そのまま奴の腹に思い切り蹴りを食らわしてやれ!』

そう言うのと、ベルトがまた緑色に光始め、俺の右脚に緑色の光があつまった。これをきめると言うことなのか。

「グルアアア!!」

『来たぞ。タイミングを見誤るな。』

奴が体勢を立て直し、こちらへ突進してくる。このキックを外せばこの装甲を着けていようが恐らく無事では済まない。

俺はキックのため右脚を軽く後ろに引く。奴は俺を引き裂くために左腕を振り上げる。正直滅茶苦茶怖い。しかし、左腕を振り上げたことで奴の腹は右から蹴り易くなった。奴の爪が降り下るされる前に、奴は俺の蹴りがとどく範囲内に入ってくれた。

『今だ!!』

「でやああ!!」

「グオアアア!!」

俺の回し蹴りが決まった。奴は遠くまで吹き飛び爆発した。パンチ一発に蹴り一発。こう見ると以外と呆気ないものだった。

『あの回し蹴りの力も予想以上だな……』

「今回がラッキーだったのかもな。おかげで助かったけど……」

『そんなことより、中々いい格闘センスをしているな。誰かに教わったのか?』

「こんなこと誰かに教われるかよ……」

安心したのと同時に変身が解ける。ハスターは黒い球体に戻り、俺は道端だと言うのにその場に倒れ込んでしまった。

「つつかれた……」

『迷惑をかけて済まなかったな。』

「いって別に、こうしなきゃどのみち死んでたし。」

どちらかといえば、勝手に首を突っ込んだ俺が悪いんだ。と言いたかったが疲れて声もでない。戦っている時のハスターへの不満なんてバカらしくなってきた。

『この場所にずっと留まるわけには行かない、ここでさらばだ。』

「じゃあな……」

ハスターはそのまま急いで何処かへ飛んで行ってしまった。もう少し話しもしたかったが仕方ないだろう。

俺も立ち上がるうとするが、からだが動かない。

「情けねえな……」

日頃の運動不足が祟ったのだろう。そう思いながら俺は何とか近く

の塀に寄りかかる。昼間でも人があまり通らないから大丈夫だろう
と考え、そのまま眠りについてしまった。

今の時刻は13時00分

喫茶店『THE FOOL』

葉山「三沢くん遅い…」

とあるラーメン屋の外

佐久間「颯ちゃん来ないな…」

当の本人は寝ていると知らずに『三沢颯太』が来るのを待つ2人が
いるのはまた別の話となる。

一話 現実（後書き）

仮面ライダーハスター

ハスターが三沢のイメージとリンクしてベルトに変化し、更に三沢のイメージと他世界で戦うヒーローがリンクし変身した姿。基本フォームは零話の白いヒーローとリンクした姿（何故かはまだ不明）。

二話 組織

9月8日

14時10分 都内某所

かんだ
よしたか
神田 孝高

昼間の賑やかな街中を大きなトレーラーが走り抜ける。俺はそのトレーラーの運転手をしている。出来るだけ人通りの少ない道を通っているつもりだが、なかなか目的地にたどり着かない。

目的地は大通りから外れたところに在る廃工場だ。そんな所に大きなトレーラーで向かうと言うのも大変だが、早く目的地にたどり着かなければならない。何しろ人命が懸かっている。そのためにトレーラーの中には沢山の人間が待機している。

しかし、人命救助のための人間が居るわけではない。トレーラーの中に待機しているのは、戦闘訓練を受けた武装兵隊、それらをサポートするための沢山のモニターと大きなコンピューター、それを管理するや管理者が乗っている。

彼らは『WISE』と呼ばれる組織の一員で、『グール』と呼ばれる未確認生命体と戦っている。彼らは自衛隊、警察、消防など様々な方面から集められた優れた人材だ。

運転手の俺も当然その組織の一員だ。俺もある程度は戦闘訓練を受けており、武装兵隊になるはずだったが、今は隊長に頼まれてこのトレーラーの運転手として登乗している。敵にやられた兵隊を救助できる人が必要だからだ。レスキュー上がりの自分にとってはそれほど苦には成らない仕事だ。

14時30分 廃墟

大通りから離れ、このトレーラーがギリギリ通れる位の細い道を通って行くと、現場に到着した。

グールは3体、そこに溜まっていた不良がターゲットとなった様だ。

「グルウウウ……」

「何だこいつら！？ヒーロー番組の撮影かよ！」

「カメラ何処ですか！？はっはっはっはっは！」

この不良達は完全に撮影だと思っている。残念ながら撮影などではない。実際に起こっている事実だ。それを解らせるために神田は警告を出す。

『その少年達、直ちに避難しなさい！これは撮影などでは無い！繰り返す、その少年達、直ちに避難しなさい！！』

トレーラーのスピーカーから不良少年達に警告を出す。その間にトレーラーの中に居る連中は出撃を始めた。最初に武装兵隊が出撃し、中では管理者が指示を出しながら待機している。そして、武装兵隊の中心から軽装備の3人が前に出る。

「おい、そのガキ共、早く逃げろ！」

3人の内の1人『村雲 仁』が叫んだ。

「なに言っただアイツ等！？バツカじゃねーのか！？雄也、あの着ぐるみ共ちよつと遊んできてやれ！！」

「太田さん、俺という正義の味方があいつらぶつ飛ばして来ますよ！」

神田や仁の警告も虚しく、雄也と呼ばれた少年がふざけて一体のグールに向かって行く。

仁が止めに入ろうとするが間に合わなかった。少年が拳を振りかざす、しかしその拳が届くことはなかった。その拳より速くグールが少年の腹を刺したからだ。その不良少年はその場に倒れ、動かなくなつた。

「うっ、うわあっ！！」

「に、逃げろー！！」

流石に不良達も状況を把握したらしく、刺された雄也と言う少年を置き去りにして、そこから逃げていった。

「また……守りきれなかった……」

悔しそうに3人の内の1人『山雨 春菜』が呟く。たとえ不良であつても、人を守れなかったことが悔しいのだろう。

「ふん、取り逃がしたか……」

先ほど少年を突き刺したグールが、逃げ出した少年達を見て呟く。

良く見ると、そいつ達は三体とも蜂のような姿をしている。仮にビーグルと名付けよう。少年を刺したビーグルはその中でも喋れる知能を持っているようだ。その体にはおぞましい装飾が付いている。恐らくそいつがリーダーなのだろう。

「貴方達が私達の野望の邪魔をすると言うのなら、私が直々に相手をしてしまおう…先ほど逃がした分殺し足り無いのでね…」

今度は、此方を睨み付ける。先ほどは悔しく無さそうに見えたのだが、今は任務の邪魔をされた怒りがその声から伝わってくる

「…お前達の野望は俺達が潰す！もう誰も殺させねえ…！」

先ほどのグールの言葉に怯むことなく、3人の内のリーダー『晴崎 潤』が2人の前に出てきた。

「ふん…その判断を下したこと…後悔するなよ…」

そう言つと、蜂のグールは右手を不良を刺した時の様な針の形にし、戦闘体勢になった。それを見て武装兵隊も対グール用の銃を構える。そして、晴崎が手を挙げて一斉射撃の合図を出し、一帯に激しい銃声が鳴り響く。

「グエアアアア…！」

「ふっ…痒いな。貴様等の本気はその程度か!？」

ビーグル2体に対しては効いているようだ。しかし、リーダーグールは何事も無かったかのような顔をしている。

「……………行くぞ！仁、春菜！！」

「「おうっ！！」」

晴崎が2人に向かって叫んだ。仁と春菜がそれに答え、3人が横一列に並び立ち、武装兵隊が銃を伏せて下がる。そして3人は小さなスライド式の携帯電話『メテオフォン』を目の前に構える。

「「『聖空変身』！！」」

《SUMMON METEO ENERGY》

3人はそう叫んで、メテオフォンのディスプレイの『change』と書かれた所にタッチする。

そして、左手に着けているブレスレットにメテオフォンをセットし、左手を天に向かって思い切り突き出す。

すると、ブレスから鳴る電子音と共に、天空から晴崎には赤、春菜には青、仁には黄色の光の輪が3人の体を包み込む。その光の輪が、メテオスーツと呼ばれる強化スーツとなって3人の体に定着していく。そして最後に頭の部分にマスクを形成し、赤のスーツには太陽の、青のスーツには雨の、黄色のスーツには雷の紋章が胸に刻まれ、3人が『変身』を完了する。

「暗きを照らす太陽！

晴天皇、レッドテイル！！」

「汚れを流す雨！

雨天妃、ブルーキュレ！！」

「悪しきを砕く雷！

轟天后、イエローートル!!」

「『空から降りし聖義^{セイギ}の光!

聖空戦隊 セイントスカイ!!』」

特殊な強化スーツの装着が完了すると、3人はポーズと共にそれぞれのスーティDを名乗り、大きな声で部隊名、『セイントスカイ』の名前を名乗る。この名乗りは部隊の士気を上げるものであり、無駄にカッコつけている訳では無い。

「フフフフ…随分と面白い反逆者だ…少しは楽しませてくれそうだな!!」

リーダー格のグールは3人を見て笑い始める。

『今回の相手は強力すぎます。相手を撤退させる事を優先させて下さい。』

管理者の『広木 真由』からの作戦と指示の通信が入る。

「楽しむだど!!?ふざけんじゃねえ!!『トールハンマー』!!」

「命を奪うことが楽しいわけない!!『キューレバレット』!!」

《SUMMON MIOLLNIR》

《SUMMON BARRET》

作戦の指示が聞こえたのかどうかも解らない内に、仁と春菜はメ

テオフォンのディスプレイの剣の絵が書かれた部分と『3・4・6』の番号を押す。すると、仁の手に大きなハンマー、春菜の手には細身の銃が形成される。

「うらあ！」

「はああ！」

「ふん、やれえ！」

2人はそのままリーダーのグールに向かって攻撃を仕掛けていった。しかし、リーダーグールの命令で出てきたビーグールにその攻撃は阻まれてしまう。

「「グルアアアア！」」

「鬱陶しいな、先にこいつらから片付けるぞ！」

「わかってるわよ！」

そういつて2人はビーグールに向かって武器を構える。そして、晴崎は1人リーダーグールと向き合っている。

「うおおおお！『エクスカリバー』！！！」

《SUMMON EXCALIBUR》

晴崎はそう叫びながら2人と同じように専用の武器を召喚する。そしてそのままリーダーグールへと斬りかかる。

「脆弱だな……ふんっ！！！」

「な、うわあああ！」

勢い良く斬りかかっていったが、リーダーグールはその剣を針状の腕で受け止め、そのまま晴崎を弾き飛ばした。その間にも武装兵隊がマシンガンを射ち続けるが、効いている気配はない。

一方の仁と春菜はビーグールに対しては優勢に立っていた。

「うおお！チャージ・ヴォルテックス！！」

《CHARGE VORTEX》

仁はその掛け声と共にメテオフォンのディスプレイの、雷の絵が書かれたボタンを押す。すると、そのプレスから黄色い雷がハンマーへと伝って行く。

「うおらあああ！！！」

そのままビーグールへとハンマーを降り下ろす。各々の必殺技も雑魚相手なら相当なダメージになる……筈だった。

「それが貴様の精一杯ですか……」

「な、何だと！？」

先ほどまでレッドテイルと戦っていたはずのリーダーグールのもう片腕の針が伸び、軽々と受け止めて見せたのだ。

『力の差が大きすぎます！このままでは危険です！！』

圧倒的な力に全員は絶望していた。しかし、晴崎達はまだ諦めてはいなかった。

「諦めんじゃねえ！勝負はこれからだろ！？それに、ここで退いてこいつらを野放しには出来ねえよ！！」

『今回は相手を撤退させることが最優先です！』

「それくらい俺も解ってる！」

「立ち上がってくれたところ申し訳ない。残念ながら横の2人はこれで終いだ、はあっ！！」

「「うわああああ！！」」

晴崎が立ち上がったその時だった。リーダーグールが針状の腕で2体のビーグールと戦っていた仁と春奈を串刺しにしたのだ。

「仁！春奈あ！！」

「ふん、思ったより楽しめませんでしたね…貴方もそろそろ終わりです…」

「う、うわああああ！！」

『レッドテイル！！早く撤退して下さい！！晴崎隊長！？』

武装兵隊達もトレーラーへ撤退を始めている。しかし、晴崎は動けなくなつた2人を見て、シヨックで通信に答える事もなくその場に立ち尽くしている。

「1匹たりとも逃がすな！追え！！」

「グルアアアア！！」

リーダーグールが指示を出すと、ビーグールが武装兵隊を目掛けて突進してゆく。その衝撃によって沢山の兵が倒れ、トレーラーも横転してしまった。

14時50分 トレーラー内

神田 孝高

トレーラーから必死に外へ抜け出し様子を見る。トレーラーも特殊強化が施されているが、荷台部分は先ほどの衝撃の影響で形が少し崩れてしまった。全員先ほどの攻撃で大きなダメージを受けている。今は動く事のできる自分がトレーラーの中に入る隊員達を助けに行くしかないようだ。

「みなさん大丈夫ですか！？平気なら返事してください！！」

「か…神田君…？」

荷台の中に入る、すると倒れている広木さんを発見した。大きな傷もなく意識もしっかりしている。あとは他の隊員達を荷台から運び出さなければ……

「ぐほあ！！」

隊員達を運び出そうとしている時だった。レッドテイルがリー

ダーゲールによってこちらまで飛ばされてきた。衝撃で変身は解け、地面には折られた剣が刺さっている。晴崎さんは倒れたまま動かない。

「晴崎さん！！大丈夫ですか！？」

広木さんが急いで駆け寄る。息はしているがとても平気には見えない。最悪の状況だ。よりもよって後方支援の俺達と怪我人達だけとなった。このまま全滅してしまうことだけは避けなければならない。

「くっそぉ……」

「しづといな…貴様も串刺しにしてやれば良かったかな？」

「ぐ…ぐぁ！！この…程度で…！！」

しかし、奴等を相手に逃げ切る自信はない。なんとしてでも生き残らなくてはならない。しかし、晴崎さんはもうダメージで動くことすらままならない。

「もう立てませんか…興が冷めた。お前達、相手してやれ。」

そう言つてリーダーゲールは振り替えて歩いて行った。情けないが正直助かったと思った。

しかし、奴は倒れているブルーキュレとイエローートル、先ほど串刺しにされた少年の体を掴んだ。

「し、しまった…！！」

「3匹か…まあ、今回は邪魔者を2匹消せただけでも良しとするか

……」

「ま……て……！」

晴崎さんが必死に起き上がろうとするが、その間にリーダーグールは3人を連れて何処かへ消えてしまった。しかし、ここにはまだ2体のビーグールが残っている。

「と、とにかく今は避難を……！」

俺はそう言って晴崎さんの肩をかつぎ、広木さんと一緒に工場の中に隠れた。

「か……神田……」

「な、何ですか……？」

突然晴崎さんに名前を呼ばれ驚いた。

「おまえの……出番だ……」

そう言って晴崎さんは俺に変身ブレスを手渡した。

「こんな筈じゃ……無かったんだけどな……」

「もういいです！喋らないで下さい……！」

痛々しくてとても見てはいられなかった。

「広木さん……早く新しいメテオスーツを……」

「…わかったわ…」

そう言つて広木さんは上着のポケットに入っていた小型の携帯…メテオフォンを取り出した。

「…これは今回の作戦の後に話す筈だったんだけどね…落ち着いて良く聞いて。」

「は、はい…」

状況があまり把握できず、生返事で答える。すると、先ほど取り出したメテオフォンを俺に手渡した。

「貴方にはこれから第4のメテオスーツ『デイン』を着用してもらいます。」

「えっ…えええええ！？」

予想外の展開だった。自分があの3人と同じようにメテオスーツを着用する？

「で、でもいきなり何で…！？」

「いきなりじゃない…本当は最初から決まっていた事なの…デインを製作した時から…」

最初から決まっていた？何故？何で自分が選ばれたんだ？自分の頭は軽くパニックになっていた。

「この程度であたふたしないで下さい…貴方を最初にトレーラーの

運転手にしたのは、こんな状況でも冷静に、客観的に物事を見れるように戦いを傍観させていたの。」

「だからって、何でそんな回りくどいことを!？」

「良いから先ずは聞いて。もう時間が無いから装着の説明をするわよ。」

最初から全ては決められて、見えないところで訓練までさせられていたらしい。確かに冷静に考えれば、この状況では下手に逃げ回るより助けが来るまでの時間稼ぎをした方が得策だ。

「…解りました。」

「いいわね。基本操作は他の3つと同じで、ブレスを左手に付けてメテオフォンの画面の『change』をタッチして。」

言われた通りの手順を進める。正直不安でいっぱいだが、今更引き返せはしない。

「後はメテオフォンをブレスに…きゃあ!！」

「グルアアア!！」

説明の途中だった。ビーグルがここを嗅ぎ付けてやって来た。

「ブレスにはめたら、天にかざして叫ぶのよ!！」

メテオフォンをブレスにはめる。広木さんは自分の後ろに隠れた。説明が無くとも叫ぶ言葉は解っている。今まで戦いを見てきたから

だ。あの3人は左腕を天に向かって伸ばしこう叫んでいた。

「聖空…変身!!」

《SUMMON METEO ENERGY》

その言葉を放つと空から赤い光の輪が降りてきた。レッドテールと同じに見えるが、胸部にも装甲が付き、頭に至ると自分では解らないが、メテオフォンに表示された姿を見る限り3人のマスクとは違い、角が真横から後方に伸びており、バイザーの奥に複眼が2つ付いてる。そして、胸部に装甲がついたため、胸に付く筈の風の紋章は腰のベルト部分に現れ、装甲の装着が完了すると自動的に一本の槍が左腕に形成される。これで準備完了の様だ。2体のビーグールも驚いているように見える。3人の様な名乗り文句は言えないが、それが無くても十分やる気が沸いてくる。

「神田君…本当にごめんなさい…」

15時00分 廃工場の中

広木 真由

「聖空…変身!!」

《SUMMON METEO ENERGY》

私は嘘をついた。『…これは今回の作戦の後に話す筈だったんだけどね』と私は言った。それは嘘だ。本当は、第4のメテオスーツの装着はしてはいけないからだ。

第4のメテオスーツは、3人の装着者と全ての武装兵隊がピンチの時に初めて隊長の指示で使用が許可される。

その時の装着者は、その現場の中で一番負傷の少ない隊員となる。今は正にその状態だ。

しかし、神田君が装着者に選ばれたのはあながち嘘ではない。

どの状況においても一番負傷の少ない隊員はトレーラーで待機している『神田 孝高』君。つまり、彼はデインの装着者に選ばれたと言うより、必然的にそうなるしかなかったのだ。

この事は晴崎隊長と私しか知らない。その理由は、そんな状態に陥ることはごく希なうえ、そんな状態でも使いたく無い程危険な力だった為、皆には知らせなかった。

「神田君…本当にごめんなさい…」

私達の無責任な判断のせいでこんな事になってしまった。謝って済む問題では無いが、謝るしか出来なかった。

「謝らないで下さい…今はとにかく避難を！」

「…解ったわ…無茶はしなように…」

私としたことが、今やるべき事を忘れていた。今は何も知らない神田君に情けをかけるのではない、神田に戦闘の指示をしなければならぬのだ。

そう思い、私は晴崎君を肩に担ぎ柱の影に隠れた。

「こ、この槍を使えってことか…うおおー!!」

そう言つて神田君は槍を振り下ろす。がむしゃらだが、力強く相手を斬りつける。しかし相手は2体、いくら強力な力のデインでも戦闘経験の浅い神田君では厳しい筈だ。しかし、

「グルアア!!」

「はああ!!」

神田君は槍を巧みに操り、2人相手に攻撃の隙を与えない。棒術の経験でもあったのだろうか。そう安心していたが、

「ガルウウ!!」

「しまった! 槍が!!」

片方のビーグルを攻撃している間にもう片方が槍を掴み取り上げた。しかし、こんなときこそ、この槍『グングニル』の本当の力の見せ処だ。

「神田君、左手をその槍にかざして!!」

「えっ!? わ、解りました!」

言われた通りに神田君は左手を槍にかざす。すると槍がグールの手から消え、手に再構成された。

「グ、グア!」

「も、戻ってきた!」

これこそ投げて戻ってくると言われる神話上の武器『グングニルの槍』を模した能力だ。

「これが…ディンの力…」

「神田君、次で決めるわよ!!」

神田君はこの力に驚いている様だが、本当の力はこの程度ではない。

「メテオフォンのディスプレイを見て、風の紋章の所をタッチするのよ!」

「こ、これが…」

《CHARGE WIND》

神田君が紋章をタッチすると同時に、フォンから電子音が流れる。すると、両手に持った槍へ紅い風が渦を巻き始めた。

「う、ぐああああ!!」

あまりの強力な力を制御できず、神田君まで吹き飛ばされてしまいそうだ。すると、

「神田…力を…その風を受け入れるんだ…!!」

隣にいた晴崎隊長が神田君に叫んだ。

「力を…受け入れる…う…うおお!!」

神田君が槍を天に掲げて雄叫ぶ。すると、槍を被っていた紅い風が槍の先に集まり、槍の先に小さな、しかし密度の高い紅い竜巻が出来ていた。

「今よ!その力…『紅き風神』の力を見せてあげなさい!!」

「「グルアアアア!!」」

「うおおお!!」

2体のグールも怯まず向かって来るが無駄だった。神田君はその槍を横に一薙ぎしただけだった。その一薙ぎで、2体のグールは木っ端微塵に吹き飛んでいった。

「「ウグアアアアア!!」」

「…かつ…た…?」

神田君はそのまま立ち尽くしていた。ここまでの力とは思わなかったのだろう。

「そう、やったのよ。神田君が勝ったのよ。」

「良かった…た…」

「か、神田君!?!」

そのまま変身は解除され、神田君は前に倒れた。相当体に負担がかかったのだろう。

「だ、大丈夫? 神田君!?!」

「全く…変身したダケなのに…情けねえ運転手だな…」

「晴崎隊長は黙って下さい!!!こんなに負担が掛かるから封印して

たんでしょう!？」

「ハハ…俺も情けない隊長だな…」

「…隊長も神田君の肩もってあげて下さいよ。」

「ひどっ!？俺も怪我人なのに…」

冗談のように晴崎隊長は笑う。大切な仲間が2人も敵にさらわれたと言っのに。暗くならないように必死に笑ってくれているのだろう。

「本部からの応援が来るまでの辛抱です。皆のいるトレーラーの所まで行きましょう。」

「隊員達も皆無事だろうか…?」

そんな心配をしている内に、本部から隊員専用の救急車がやって来た。これで私もやっと休める…と、神田君をトレーラーに寄り掛からせると、私も疲れ果ててトレーラーに寄り掛かり倒れてしまった…

19時30分 神田 孝高

WISE本部の病院

目の前には天井、自分の体の下はベッド、横を見ると丸い頭のゲール…

「うわっ!ゲール!!俺を改造人間にするか!？」

「違うわよ、よっぽど疲れてるわね…」

広木さんの声が聴こえる。グールをよくみれば見覚えのあるオッサン

「ん…院長先生…？」

「人をグール呼ばわりするとは…寿命より早く死にたいのかね神田君？」

「すいません、神田君も相当ショックだったみたいで…」

ショック？そういえば、いったい何で俺はこの病院に居るのだろうか…

「いくらトレーニングをさせたからと言って、いきなり『あのスーツ』を着せるからだ…」

あのスーツ？思い返してみても心当たりは……あつた。

「俺はあのメテオスーツを…」

「そうよ。貴方が正式に『ディン』の装着者に選ばれたのよ。」

やっぱりそうだ。しかし、あの2体を倒してからの記憶がない。

「そつだ…皆は？晴崎隊長はどうなったんですか！？」

慌て院長先生に問いかけた。グールを倒しても、皆が居なければ話にならない。

「心配すんな。俺ならここに居る。」

自分の後方から返ってきた返事は院長先生のものではなかった。自分の後方、つまり隣のベッドのカーテンが開くと、右腕にギブスを着けた晴崎隊長がいた。

「隊長！てか滅茶苦茶心配な状態じゃ無いですか！？」

「エクスカリバーと一緒にやられちゃったみたいで…腕一本なら安いもんさ…」

「まったく…何が『腕一本なら』だ…身体中傷だらけの癖に！」

「あだあつ！！！」

冗談のように言う晴崎隊長だったが、目の奥は笑ってはいない。連れて行かれた2人の事を思っているのだろうか。しかし、そんな微妙な空気は、院長先生に頭を叩かれた隊長自信の間抜けな声によって見事に壊された。

「何するんですか！？」

「腕一本なら安いもんなだろう？」

そう言っただけで院長先生は隊長を叩いたその腕を隊長に見せつける。

「『腕一本で殴られるなら』とは言ってますが！？」

「晴崎隊長、いつまでもふざけてないで、神田君にこれからの方針を教えてあげないと…」

「そうだ、これからの方針だったな…」

広木さんにそう言われてふざけていた晴崎隊長が真剣な顔になる。

「武装兵隊の皆も大半が負傷した…W I S Eの中でもセイントスカイの勢力は微々たるものとなってしまった…」と、言うわけでセイントスカイは事実上解散して、俺と広木さんとお前で独立した新しい部隊を作る事になった。」

「う、うええええ！？」

想定外の事実だった。セイントスカイはW I S E唯一の戦闘部隊だ。その部隊の代わりをたった3人でこなせと言うのか？

「そして、お前はトレーラーの運転手から専用バイクでの単独行動となる。戦えない俺達は本部でお前に指示を送るだけになっちまった…」

「そ、そんな…」

戦うのは実質1人のようだ。確かにあの力なら十分渡り合えるが、いったい自分の身がいつ滅びるか解ったものではない。

「つまり、新しい部隊名は直接神田君の行動名となるの。だから私達はデインのスーツのコンセプトから貴方の正式な行動名、新しい部隊名を決めさせてもらいました。」

俺は人命と共に大きな名前も背負わなければならないらしい。自分にとってこのプレッシャーは重すぎる。

「『紅き風神デイン』改め、今日からその名は…『仮面ライダーデイン』だ。」

「…仮面…ライダー？あの有名特撮シリーズの？」

想定外だった。いや、誰がそんな名前を予想しただろうか。

「ああ、今までが戦隊っぽかったから、バイクの戦士仮面ライダーならしっくり来るかと思っただけ。気に入らなかったか？」

「い、いえ。堅苦しい名前よりは自分にぴったりだと思います。」

取り敢えずそれらしいことを言っただけで誤魔化す。沢山の命を背負う事に成るであろう名前がよりにもよって国民的ヒーローと同じ名前になる。更に自分にプレッシャーがのしかかった。

「まあ、そう堅苦しくならぬことね。実際に戦うのは1人だけでも、支えてくれる人は沢山居るんだから。」

「そういうことだ。今日1日安静にしていれば明日からトレーニング位はできる。私の許す範囲でな。だからもう今日は休みなさい。」
広木さんと院長先生は笑顔でそう言っただけで病室を去っていった。少しからだが軽くなったような気がした。

「支えてくれる人が…」

「そうだ。俺だって皆が支えてくれたから、今まで隊長として…レッドティールとして戦って来れたんだ…俺たちがいることを忘れんじゃねえぞ。」

そう言って晴崎隊長もカーテンを閉めた。皆疲れた自分に気を使ってくれているのだ。

急激に変わった自分の立場と環境。それに加えて自分にやって来るプレッシャー。普通だったら誰でも鬱に成ってしまうだろう。

しかし、自分には更に大きな重圧がのし掛かろうと自分を信じて支えてくれる人たちがいる。その支えてくれる人のためにも明日から頑張っていく。神田孝高として、『仮面ライダーディン』として…

二話 組織（後書き）

仮面ライダーディン

『WISE』により作られた『メテオスーツ』とよばれる強化スーツ。テイル、キューレ、トールの3つとは違い、1人で倒すことを目的とされたため他の3つより負荷が大きい。

メテオフォン

『メテオスーツ』を呼び寄せるための携帯電話型変身ツール。スーツの種類によってフォンは変わるが、プレスは3つ共通（今は装着者ごとさらわれたため現存するプレスは1つ）。

三話 自身

20時40分 コンビニ

孤山 こやま 雅飛 まさひ

「ありがとうございました」

その声と共に僕は店から出ていく。さっき店で買ったコーヒーの缶を開け一口飲む。そして、駐車場の端に停めて置いたビックスクーターに股がり、缶をドリンクホルダーにしまう。

この黒いビックスクーターに乗っているせいでヤンキーやチャンピラに間違えられたりする。しかし僕はヤンキー等ではない。このバイクだって好きで乗っているわけではない。

僕の正体はフライグール、『グールの巣窟』と呼ばれるグールのアジトから逃げ出してきた。

このバイクは巣窟から盗んできた物だ。

だから今は、グール達に見つからないように人間だった頃の姿をしている。本当はバイクも捨てたかったが、今も移動手段に使っている。

僕のように人間の頃の姿を保てるグールは数少ないようで、人の姿をしていれば見つかることは少ない。

グールと言うのは、もとよりグールの巣窟の長『マザー・バアル』と呼ばれる一体の怪物だけだった。彼女は子孫を増やすために人の死体を基に、グールと呼ばれる彼女の子供を作った。大体のグール

はグールによってさらわれた人や、殺された人がマザー・バアルの手でグールにされてしまう。そして、ほとんどの人はグールに成ったときマザー・バアルに忠誠を誓う。そのグールの中でも、人並みの知能を持っていたり、人の姿に戻れる者は上級のグールとして高い地位を貰える。

しかし僕は違う。僕が人の姿に戻れるのはグールとしての力が弱い失敗作だからだ。簡単に言えば、僕はほとんど人間のままグールとして蘇らされたのだ。だから幸い殺された辺りの記憶意外は覚えている。

だからマザー・バアルに忠誠など誓わない。そして僕は逃げてたのだ。もう一度人間として生きるために…グールと言う忌まわしい存在から逃げるために…

「…そろそろ行こうかな。」

缶コーヒーを飲み終え、フルフェイスのヘルメットを被り、バイクにキーを差し込む。一応大型二輪の免許は持っているので、乗ること自体は違反ではない。

黒いボディーに真っ赤なホイール、2本出しのマフラーと、シートの後ろにはドクロのエンブレム。派手と言うほど派手ではないが、僕にはこれでも派手に見える。

キーをオンにしてセルでエンジンをかける。スクーターなのでスロットルを回せば直ぐに発進する。今までハーレーに乗っていた自分にとってはギアチェンが無いのは少し退屈だが、楽と言えば楽だ。

とりあえずは宿を探すことにしよう。いつ連れて行かれたかは覚えていないが、組織から逃げ出してきたのが2週間前で、今まで住んでいたアパートにたどり着いたのがだいたい4日前だ。

そのときには今まで居た部屋は僕の部屋で無くなっており、僕の荷物も無くなっていた。辛うじて通帳と印鑑だけは大家さんが預かってくれていたが、もともと貯蓄も少ない。

そして一昨日、今まで働いていた職場にも行ってみたが、当然の如くクビになっていた。

逃げて来てから今までも野宿生活だったが、これで僕はもうしばらく野宿生活を続けなければならなかった。

幸いこのバイクは驚くほど燃費が良いようで、おそらく排気量は600?ほどで、その割には燃料計と走行距離をみるかぎり、1メモリ1リットルとすると、リットルあたり90〜100?以上は走っている。あり得ない性能の良さにただただ驚くばかりだ。

まあ、何にしても、ガソリン代だけでも浮いてくれて非常に助かる。いや、燃料がガソリンかどうかすら疑問である。

信号が青になり、バイクを発進させようとする。

…すると、歩道に物凄いスピードで走る何かが見えた。

「キャアアア!」

「ウワアアア!」

その何かが走ると共に悲鳴が聞こえてきた。その何かは一瞬止まり、僕に手招きをしてきた。止まった瞬間に見たその何かの姿はまさしく…

「グール…!!」

僕の居場所がバレてしまったのか。

僕はスクーターで無理矢理アクセルターンし対向車線に移り、そのままスクーターを発進させそのグールから逃げるように走って行った。

「グールウウ…（良いのか？お前が逃げればこの2人の命は無いぞ…？）」

逃げてきたにもかかわらずそのグールが僕の真横に並んで来た。そして、僕にグール同士が使うテレパシーのような言葉を使い話しかけてくる。良く見るとチーターのような顔をしているそのグール手には2人の人間、僕が逃げれば死ぬ…？考えている内にまたチーターグールは走り出す。

「いやあああ！誰かああ！！」

「た、助けてくれええ！！」

拐われた2人の声が聞こえる。見殺しにするのは絶対に嫌だ。僕と同じようにグールにされるのは許せない。しかし、僕の力ではどんなグールにも勝てる気はしない。

『ならば答えは簡単だ…我が貴殿に力を貸せば良いのだ…』

弱気な事を考えている内に頭の中に声が聞こえてきた。さっきのチーターグールのテレパシーよりもはっきりと。そして、その声が聞こえると同時にバイクが勝手にスピードを上げ、チーターグールを追い始めた。

「何なんだよ！お前はいつたい！？」

見当もつかない相手にたいして、大声で質問する。いつたい誰がバイクを動かしているのか。

『我名は「ゼビオン」…主よ、しっかり我に掴まっている…』

そうテレパシーが伝わって来たかと思えば、このバイクが更にスピードを上げた。すっかり我に掴まっている？俺は今バイクに掴まっている形になっている。まさかこのバイクが…？

そう考えていたらいつの間にかバイクはチーターグールにどんどん近づいてくる。

すると、チーターグールが急に横へ飛び、狭い路地に入ってしまった。

「不味い！曲がりきれない！！」

『案ずるな…』

急な方向の変化に僕は焦った。しかし、バイクが勝手にブレーキングドリフトで無理矢理後輪を滑らせ、直角に曲がりその路地に入る。

「グラアア！（おもしれえ、もっとスピード上げてやるぜ！）」

追い付いて来たかと思ったが、チーターグールは更にスピードを上げて走り出す。それに合わせて

バイクも更に加速していく。スピードメーターはとくに2000？ノhを越えている。

「やっぱり…お前がゼビオンなのか…？」

僕はこのバイクに語りかけてみる。すると、バイクのライトがカチカチと返事をするようにライトを点滅させてきた。このバイクがゼビオンで間違いないようだ。

そして、細い路地からチーターグールが抜け出し、林の中に入ってしまった。ゼビオンは林道をもとめせず走り続ける。

そして、チーターグールが急に止まり、ゼビオンはそれを追い越して道を塞ぐ形で停車した。

「グルウウ…（貴様が大人しく巣窟に戻ればコイツらを離してやつても良いぜ…）」

「なに…？」

今度はグールが僕を馬鹿にしたような表情でテレパシーを送って来た。やはり僕の追っ手だったようだ。僕が帰ればこの人達は助かるらしい…グールのする事だから本当かどうかは解らないが、抵抗する力の無い僕には要求をのむしか…

『主よ、その要求をのむ必要はない…』

「でも、僕には力が…」

「グルアア！（なにうだうだしてやがる！）」

迷っているうちにチーターグールが、抱えていた人を投げ捨て僕の胸ぐらを掴んできた。不味い…口では連れ戻す様な事を言っていたが、僕を連れ戻すと言うより、消す事を優先している様だ…

「仕方…ないか…であっ！」

僕はチーターグールの腹を蹴り、その手から離れる。そして、ヘルメットをバイク…ゼビオンのシートの上に置く。そして、チーターグールに対峙し。

「…うおおお！！」

そう叫ぶと、僕の体が火花を放ち、全身に軽い装甲の付いたライダースーツになる。顔は人のままにも見えるが、頬に黒い雷模様が浮き出ており、首にはドクロマークの付いた赤いスカーフが巻かれている。これが僕の本当の姿、フライグールへと変貌する。

「グラアア！！（やっとやる気になったか！！）」

「別に戦う気はない…生身のままだと防ぎきれないからな…」

さっきも言ったが、僕には抵抗する力が無い。若干口調が強気に変わり、戦いたそうにも見えるがそんな事はない。これがグールとしての本能であり、力に関係無く少々性格が荒くなっているだけだ。
「グルウウウ…！！（そのうち戦いたくなって来るぜ…！！）」

そう言つて、チーターグールが抱えていたもう一人を捨て、瞬時に僕の腹へボディブローを放ってきた。当然のごとく僕は防ぎきれず、吹き飛ばされる。幸い、奴の攻撃は早いだけでそこまで重い一撃では無かった。しかし、グールに戻っていなければ確実に仕留められていただろう。

…グールに戻るのは嫌だったが、戻っておいて良かったとも思う。

「ガルアアア！（まだまだ行くぞ！）」

立ち上がってチーターグールを睨むとまた奴がパンチを放って来た。僕はやはり避けきれずに僕の胸に拳がぶつかり、吹き飛ばされる。

「ぐあっ…!!」

「グアアア！（予想以上に弱いな、お前！）」

倒れている僕を見てグールはそう言い放った。

「う、うわあああ…」

この状況を見て、さらわれた人達もすっかり怯えている。例え力が敵わなくとも、どうにかこの人たちだけでも守らなければ…

『言っただであろっ…我が貴殿に力を貸すと…』

ゼビオンがまた話しかけてきた。そうだ、いまいち不安だがゼビオンが力を貸してくれば、守りきれるかもしれない。

「くっ…ゼビオン、僕に力をかしせ!!」

「グアアアアア!!（ごちゃごちゃ何言っただやがる!!）」

僕がそう叫ぶと、またチーターグールが襲い掛かってきた。すると、止まっていたはずの僕のビックスクーターが自動で走り出し、後輪を滑らせながらチーターグールにダイレクトアタックを決めた。

「グエアア!!」

「ひ、ひいいい!!」

チーターグールの悲痛な声が聞こえた。さらわれた2人は腰を抜かしたまま動けずにそれを見ている。

『早くあのグールを倒さなければ、その者の命が危うい…助けたいのであれば奴を早く倒すのだ…』

ゼビオンの声が聞こえた。それと共に足元にさっきまで被っていたヘルメットが転がってきた。だが、そのヘルメットは先程とかなり形が変わっていた。シールドの代わりに赤い複眼の用なパーツ、2本の触角、額にはゼビオンにつけられたものと同じドクロのエンブレムが付いている。これがゼビオンの貸してくれた力と言うことだろうか。

「これを被れってか…？」

「グルアアア！！（なめた真似しやがって！！）」

そのヘルメットを拾い上げる。かぶるかどうか戸惑っているうちにチーターグールが、怒りを増して襲ってくる。迷っている隙は無いようだ。

僕は直ぐ様そのヘルメットの…いや、マスクの顎のパーツを外し、ヘルメットを被る。そして、もう一度顎のパーツをつけなおす。すると、2つの複眼が赤く光り、ベルトの中央に赤い風車の付いた黒い大きなバックルが出現する。そして、今までに感じたことの無い大きな力を感じた。

「ガアアア！！」

「はああ！！！」

チーターグールが拳を振り上げガムシヤラに突っ込んでくる。いつもなら動きが見えずに避けるどころか防御も出来なかった。しかし、今は奴の動きがはっきりと見える。僕はその拳を避け、奴の後ろにまわる。そして、奴の背中にキックを放つ。

「グオオ！？（バカな！？）」

「まだまだ行くぞ！！」

僕はその勢いのまま奴の腹にボディブローを放つ。

「グホアア！！」

『これこそが我らの本来の力、『ベルゼビオ』の力だ…』

「ベルゼビオ…？本来の力って何なんだよ？」

チーターグールが吹き飛び、ゼビオンが感動したような声で話しかけてきた。

『私は貴殿の力の一部から作られた…言わば分身だ。我と貴殿のフライグールの力が一つになるとき、本来の『フライグール』…ベルゼブ』となるのだ…』

「ベルゼビオ…グール…僕が巣窟から逃げるとき、君を見つけたのは…」

『そつだ…我と貴殿は出会って出て出会ったのだ。』

「グルウウ…（何をぐちゃぐちゃと…）」

チーターグールが起き上がり、ふらつきながら歩いて来る。

『主よ…次で決めるぞ…』

「…わかった。」

僕がそう返事をする、右腕から機械的なガントレットが出現し、そこから肘から指先までを覆い隠すようにガトリングが形成される。

「ガラアアア！！」

チーターグールは自慢のスピードでこちらに迫ってくる。先程ガムシヤラに向かつて来たときよりも断然速い。奴は直ぐに距離を詰め、素早い拳が振り下ろされる。

しかし、その動きも僕、いや僕たちには見えている。僕はガトリングでその拳を防ぐ。そして、ガトリングで押し返し、少し距離を離す。

「でりやあああ！！」

「ギ…グギヤアアア！！」

僕はそのまま引き金を引く。このリボルバー式のガトリングから、独特の連続した激しい銃声と、ガトリングから飛び出して地に落ちる薬莢の金属音が鳴り響く。チーターグールの断末魔の叫び声はその音にかきけされて行く。

「ガ…グガガ…（そんな…バカなあ…）」

弾が切れ、銃撃が終わるとやっとそのグールの声が聞こえてきた。体の装飾はボロボロになり、立とうとしても膝立ちがやっとの状態だ。

「…僕は君を憎んでいる訳ではないし、こんな戦いをするつもりも無かった…でも、君を許して野放しにする事は出来ない…」

「ガアアア！！（黙れえ！！）」

僕はチーターグールに向かって走り出す。そして、止めを刺すために拳に力を込め、まっすぐグールの顔面めがけて拳を繰り出す。スピード自慢のチーターでも、あのダメージでは、動けない。

「うおおお！！！」

「ギャアアアア！！！」

僕の拳が直撃し、爆発するチーターグール。

…僕は被害に逢った人を助けると共に、同族を殺してしまったのだ。普通の人間に戻ったつもりだったが、こんな恐ろしい力を使ってしまったのだ。

『気に病むな主よ…貴殿が守りたいものは守れたのだ…』

ゼビオンがそう頭に語りかけてくる。そうだ。僕は守れたのだ、あの二人を。僕は急いで捕らわれていた2人に近づく。

「大丈夫ですか！？」

「う…ああ…」

2人はまだ怯えている様子だった。立てないようだったので、その2人に手を差し伸べようとする。しかし、

「さ…さわるなあ!!」

予想外の言葉だった。その内の一人の中年男性は腰を抜かしたまま後退る。改めて自分の手を見ると、チーターグールを殴ったときの返り血で真っ赤に染められていた。

「う、うわあああ!」

中年男性はそのままどうにか立ち上がり、おぼつかない足取りで逃げていった。

礼を言われるために守った訳ではない。しかし、僕はいつたい何のためにあの人を守ったのだろうか？自分と同じ思いをさせたくないから？一度死ねば、グールになればそんな思い忘れてしまうのに彼はこれから先グールに怯えて生きて生きていくのだろうか。グールにしてやった方が彼にとっては幸せだったのだろうか？

『それは違うぞ…主よ…』

「あ…あの…」

ゼビオンにそう否定されると、今度はもう一人の女性が怯えながら声をかけてきた。

「あ…りがとう…」

これも予想外の言葉だった。さっきの中年男性とは違い、自ら礼を言ってきたのだから。

「…僕が怖くないの？」

「凄く怖い、けど…助けてくれたんだって思ったから…」

彼女は怯えながらも僕に笑いかけてくれた。僕はヘルメットを外し、人間の姿に戻る。そして、彼女に手を差し伸べる。

「僕の方こそ…有り難う…」

「えっ…？」

「君たちを守った理由を覚えてくれたから…」

彼女は教えてくれたのだ。僕はきつと笑顔を見るために守ったのだ。グールになったら本当の笑顔なんてなれない。僕と同じ思い…笑顔になれない悲しい思いをさせたくないからなんだ。

『そう言うことだ。きっとあの男も人間として生きていれば、笑顔になれるだろう…』

ゼビオンもそう悟ったようだ。彼女は僕の手を取り立ち上がる。そして、メットインに入っていたもう一つのヘルメットを手渡す。

「送ってくれるの…？」

「1人じゃ危ないし…これぐらいしか僕には出来ないから…」

そう言つて僕はバイクに乗り込む。彼女は僕の後ろに座り、僕にしがみつく。

キーを差し込み、キーをオンにする。すると、さっきまで半分位だった燃料計が満タンになっている。

『我はグールの魂を糧に走っている…驚く事ではない…』

ゼビオンのハイブリッドさに驚きながらセルでエンジンをかけ、バイクを発進させる。

バイクに乗った怪物の裏切り者…仮面ライダー…そのフレーズが頭の中に浮かんできた。僕はそんな大層な者では無いが、昔テレビで見たあのヒーローも人知れず人を守るために戦っていた…

仮面ライダーベルゼビオ…悪い気はしないかな…これからも僕は人間を…笑顔を守るために戦いを続けよう。

ひっそりとそんなことを考えながら僕はバイクのスロットルを回し、スピードを上げた。

三話 自身（後書き）

仮面ライダーベルゼビオ

グールの巣窟で産み出された蠅^{ハエ}を元に作られたグール。生物的な外見と、機械的な武器が特徴。

何故フライグールとゼビオンの2つに力が分けられたかは不明。

ゼビオン

フライグールと力を分けたバイク。自分の意思で走行可能。
イメージはYAMAHAの『T-MAX』

ターンエンド

真つ暗な部屋の中、そこには二人の青年がテーブルを囲み、椅子に座っているだけだった。

「僕の駒は揃いました。僕はこの駒で勝負しましょう…」

白い服を着た青年がチェス盤の白いポーンと黒いポーンの駒をいじりながら話している。

「面白いじゃないか、私から奪った駒まで使うとは…」

黒いスーツを着た青年は白い青年に対して答える。

「おや、チェスではルール違反でしたか…」

「いや、元より『私の駒』と言うより、『私の駒』の『駒』だからな…違反でないとしておこう…」

黒いスーツの男は黒いクイーンの駒をいじりながら答える。

「…それでは…僕達はしばらく見ている事にしましょう…」

「ああ…これからこの駒達がどう動くか…」

黒い青年は椅子に深く寄りかかる。白い青年は前のめりになり、肘

を着き頭を両手で抱えるように支える。

「…もともとチェスでは無かったか…これは…」

そう白い青年は呟く。すると2人は音もなく、その場から姿を消す。
何も知らずに動かされたチェス駒達を置き去りにして…

ターンエンド（後書き）

今回でプロローグは終了です。

次回から物語は進み始めます。これからハスターの真の力、ディンの真の使命、ベルゼビオの真の存在意義が明かされて行きます。

月1回の激遅更新ですが、これからもお付き合い宜しくお願い致します。

四話 出会（前書き）

投稿が遅れて申し訳ありません… つかこんな話の続きを待っている人など本当に居るのでしょうか…

と、暗い話はここまでにして、本編の説明です。ここからは、3人の視点から話が進んでいきます。予定としては3話構成で一つのお話を作っていくつもりです。

それでは第4話始まります。

四話 出会

9月11日

17時00分 喫茶店『THE FOOL』

三沢 颯太

今日は土曜日。今日こそは待ちに待った休み…の筈だった…

「じゃあ、あのテーブルにアイスコーヒー持っていてね。」

「…はい…」

今日の休みも見事に潰れてしまった。その理由は数日前に遡る…

9月8日

21時40分 何処かの塀

―…ザワザワ…ザワザワ…―

…人が…集まってる…何…してんだろ…？

虚ろな目を開きながら考える。人が集まってる。しかも俺の回りに俺は座っている。塀に寄りかかって。

……何で塀に寄りかかって座ってんだ？

考えているうちに答えが出てきた。俺はとてつもなく眠くて塀に寄りかかって眠ったんだ。

何故眠ってたか…思い出さたくない所まで思い出した。

変な怪物に襲われて、成り行きで変な仮面ライダーみたいなものになったんだ…。

頭は未だボーツとする。最早あんなこと只の夢だったのだろうか…

「…警察呼ぶ？…救急車？…ただの浮浪者だろ…」

ヤバイ、そんな事より騒ぎが大きく成る前に何とか逃げないと…

「だ、大丈夫ですから、心配しないで…」

そう言い残して俺は早々にその場を立ち去る。今まで警察とか呼ばれなくて良かったと思う。

辺りはすっかり暗く成っている。て言うか、滅茶苦茶腹減った。10時頃にカップ麺を食べたダケだから仕方な…

思い出した。不味い、佐久間と飯食いに行く約束してたんだ…今はもうすぐ18時、何時もならバイトはとくに終わって、家でゆっくりしてる時間…

更にヤバイ事を思い出した…。1時からバイトが入っているんだ。非常に不味い、今から急いで行っても確実にマスターに怒られる。怒られるだけで済めば良いのだが…

佐久間は今度飯をおごってやれば済むかも知れないが、マスターだけはどうにもならない。しかも、目の前で『1時にはちゃんと来る』とか言っちゃったし…

何か連絡が来ていないか確かめるべく携帯を取り出す。すると、佐久間から午後4時頃に留守電が入っていた。

『どうしたの、颯ちゃん？俺は一人でラーメン食い終わっちゃったよ！！』

『つか、マスターから『三沢くんそっちに居ない？』って連絡があったんだけどさ、なに？バイトまですっぱかしちゃってんの？マスター相当心配してたから後でちゃんと連絡しときな』

と言う内容だった。あのマスターが俺を心配…一応連絡してみるか…そのまま携帯でマスターに電話をかけてみる。

『プルルルル…プルルルル…』

あら、三沢くん！どうしたの？何も言わずにバイト休むなんて…』

つながった。本当に心配してくれていたようだ。

『すみません、何も連絡出来な…』

『ホント、無断で休むなんて三沢くんらしくないわ』

三沢くんは無断でバイトなんか休めないヘタレ君だものね』

『…はい？』

『だから、いつか『か・な・ら・ず』この埋め合わせはしてくれるわよね、三沢くん！？』

『…はい、今週の週末に…』

『良かったわ。まあ三沢くんが無事で何よりよ。そして明日の仕

事は休まないでね♪それじゃあ♪
ツー…ツー…」

心配もしてくれてたけど、どっちかつーと怒り1000倍って感じだった…携帯越しに一瞬殺気を感じた。反論したら完璧に自殺行為だし、反論した所で『ライダーになって戦ってました』なんて言えないし…

と、言うわけで9月11日現在に至る。

「お待たせいたしました。アイスコーヒーになります。」

「アリガトね、颯ちゃん。」

そう言つて、俺はお客さんにアイスコーヒーを渡す。今の時間帯は何時も女性客が多い。しかも皆常連客だから皆俺の名前を覚えている。

「颯ちゃん、このカプチーノもおねがい」

そんな女性客に混じって佐久間が俺にカプチーノを渡す。

「…自分で運べや…つーか、ちゃん付けやめれ。」

「最近颯ちゃん冷たい…ラーメン食いに行く約束破るし、ラーメン食いに行く約束破るし…」

「そんなに一人で食うラーメンが不味かったか…」

悪いとは思ったが、口調がウザイからやっぱりムカつく。

「いいか颯太、お詫びと思ってこのカプチーノを運んで来るのだ！
」

「お詫びを人に強要するな…」

仕方ない、そう割りきって俺はカプチーノを言われた席へと運ぶ。

「お待たせいたしました、カプチーノになります。」

その席には1人の男性客がいた。この時間には珍しい男性客だな…
そう思いながら俺はカプチーノを渡した。

9月11日

17時10分 喫茶店『THE FOOL』

神田 孝高

「お待たせいたしました、カプチーノになります。」

先ほど頼んだカプチーノが届いた。自分は昨日WISEの病院から退院し、数日振りに仕事に戻った。まあ、実際は仕事と言っても、今度から自分の…デインの専用バイクとなる『スレイプニル』の走行練習をするだけだ。

今はその合間に偶然見つけた喫茶店にちょっと寄ってみたところだ。美味しいコーヒーを出すのかどうかは判らないが、雰囲気の良いさに釣られて入ってみた。

さっそく一口そのコーヒーを飲んでみる…

…はつきり言つてとても美味い。自分はコーヒーに五月蠅いわけではないが、このコーヒーは自分の飲んだ中でもかなり美味しい方の部類に入と思う。

そうして自分がこのコーヒーを味わっていると、一組の男女が自分の近くに座ってきた。

…あの男、どこかで見たことが有るような気がする…まあ、気のせいかな。

関係ない人だが、近くにカップルなんかが居るとわりと気まずい。。店に置いてあった本を読みながらそんな事を考えていると、そのカップルから奇妙な会話が聴こえてきた。

「…私を拐った怪物…いつたい何者だったの？」

人拐いの怪物だと…？いつたいなんの話を…まさか…

「…あいつの名前はグール…それ以上は話せない…」

グール…やはりそうだった。

「その話…詳しく聞かせてくれ！」

本を読むのを止め、事情を聞く事にした。盗み聞きは良くない事だが、組織として調べなければならないこともある。

「…ちよつと君…って、あれ…神田君…？」

その男から返ってきた言葉は意外なものだった。

「何で俺の名前…あれ、孤山？」

見たことがあると思ったら、あいつは高校時代の同級生、孤山雅飛だ。

9月11日

17時00分 喫茶店『THE FOOL』駐車場

孤山 雅飛

喫茶店『THE FOOL』…この駐車場は店のわりには少し狭い所だった。ここに来た理由は、3日前にベルゼビオとして初めて同胞を殺めた日…その日助けた女の子ともう一度会うためだ。

僕はその日、あの女の子を家の近くまで送っていった。恐らく彼女は普通の気の弱い女子高生、そんな子が一人でグールの不安と戦うのは心細いだろう。

そんな寂しさからか、別れ際に彼女は

『もう一度会いたい…今度の土曜日の5時に『THE FOOL』
つていう喫茶店で待ってます』

と言った。

…これ以上あの子を捲き込むのは嫌だが、約束を破るわけにもいかない。だから僕はここに来た。

僕の愛車…ゼビオンから降り、メットを外す。すると見覚えのある女の子が歩いてきた…あの子だ。

「ごめんなさい、待ちましたか!？」

「いや、来たばかりだよ。」

本当は狭い駐車場にバイクを止めるのに結構時間を使っていたのだが。

「早く中に入ろう、えつと…」

「理恵、戸張理恵とはりりえです。貴方は？」

「孤山 雅飛、宜しくね。」

やっと互いの名前を知ることが出来た。て言うか、何故僕は宜しく等と言ってしまったのだろう。あまり関係を持ちたくないのに…

16時50分 喫茶店『THE FOOL』店内

2人で揃って中に入る。カップルみたいに見えるかもしれないが、気にしない。適当な所に座り、メニュー表を見る。ここは無難にアイスコーヒーかな…

そんなことを考えていると、いきなり彼女が仕掛けてきた。

「…私を拐った怪物…いったい何者だったの？」

いきなり核心から迫ってきた。彼女を捲き込むのは絶対に嫌だ。しかし、あまり秘密にし過ぎるのも怪しまれる…

「…あいつの名前はグール…それ以上は話せない…」

このくらいは教えてもセーフだろう。といっても、名前しか教えていないのだから、
ところが、

「その話…詳しく聞かせてくれ！」

意外な所から声がかかった。その名前を言ったとたんに先程席を立った男性がこちらに向かって来る。焦って何か言葉を返そうとするが、

「…ちよつと君…って、あれ…神田君…？」

何か言葉を返そうとするが、気づいてしまった…この男は多分高校時代の同級生の神田孝高だ。

「何で俺の名前…あれ、孤山？」

やっぱりそうだ。成人式の同窓会以来だ…自分達はもう22歳、あれからもう2、3年も経つらしい。

「そうだよ。なんだか懐かしいね…」

「ああ…お前も元気そうで何よりだ…」

丁度いい…理恵ちゃんには悪いが、思い出話を口実にグールの話から話をそらして…

「ところで…何故お前らがグールを知っているんだ？」

「そ、それは…」

…駄目だった。良く考えたら出会った理由もグールの話からだと言うことを忘れていた。話をそらすのはおそらく無理だ。だからと言って、僕がグールだからなんて事は流石に言えない。

「アイツラがそう名乗っていたから…まあ、後は死に物狂いで逃げたから覚えてないけど…」

適当な事を言っただけで誤魔化してみる。実際は自分をグールなんて名乗れる輩はそう多くは居ない。そんな奴と出会ったら生きて帰るのはまず無理だ。

「そうか…大変だったな…」

「あ、あの…」

理恵ちゃんも口を開いた。

「結局グールの目的って何なんですか…？何で人を襲うんですか？」

不味い、僕からは『グールの目的は、人間をグールにして種族を殖やすことだ』なんてとても言えない…

「すまん…それは自分にも解らない…」

良かった、神田くんも知らなかった…

いや、おかしい。普通だったらグールの目的どころか存在すら知っている筈がないのだ。

「神田くんこそ…何でグールを知っているの…？」

今度は僕のほうから質問してみる。

「自分は…グールに対抗するための組織に所属している…それだけだ。」

「…はい？」

僕は思わず間抜けな声で聞き返した。組織の人間？組織っていうと冷酷に目的を始末するだけみたいなイメージしかつかない…映画や漫画の見すぎだろうか？

「まあ、とりあえずグールについては深く追及しないことだ…そのうち組織の奴らに身柄を取り押さえられてしまいかもしれない…」

「そんな…」

実際組織はそう言つものらしい。特に僕なんかは気を付けなければならない。

「…それじゃあ、これっきりで忘れる事にするよ…」

そうは言つたが、理恵ちゃんも僕も忘れることは出来ないだろう。彼女はグールに捕まり超高速で振り回されたのだ。

僕は組織に追われようと、これからも人間として生きるため、グールの身体で戦っていくつもりなのだから…

「忘れてくれると助かる…邪魔して済まなかったな、お二人さん♪」

そうからかうように言って、神田くんはレジに向かって歩き出す。

「い、いえ、別にそんな…／／／」

理恵ちゃんは照れながら慌てて否定する。まあ、はたから見ればそう言う関係に見えるのは仕方ないだろう。

「あの…」

そう考えていると、後ろから別の男が話しかけてきた。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

…そういえばまだコーヒーを貰っていなかった。

「ア、アイスコーヒーで…理恵ちゃんは？」

「か、きら、ら、キャラメルマキアートで…／／／」

「クツ…フフフ…」

未だ照れてる。どんだけうぶなんだよ…そう思って僕はちょっとだけ笑った。

17時20分

三沢 颯太

かなり熱く話し合っているな…そう考えながら注文を聞きに来た。俺は彼らの話を聞いて驚愕した。

彼らもグールを知っている…こんなに近くにグールを知るものたち

が居るとは思わなかった。いや、もはやグールなど架空の物で、悪い夢だと思っていた。

「あの…」

話が終わったりそんな雰囲気になってきた。もう遅いかもしれないが、一応注文を聞く。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「ア、アイスコーヒーで…理恵ちゃんは？」

「か、きら、ら、キャラメルマキアートで…／／／」

「クツ…フフフ…」

さつきまでグールや、その組織とやらに恐怖していたかと思えば、からかわれて顔を真っ赤にして、もう喋ることすらままならなくなっている。女なんてそんなもんか…くそうっ…イチヤイチヤしやがって…

彼女居ない歴5年、俺は妬みを心の奥にしまいこみ、アイスコーヒーとキャラメルマキアートの注文をマスターへ報告すべくカウンタ―へ戻っていった。

18時00分 公道

神田 孝高

あの喫茶店から出て30〜40分は経つたろうか。自分は未だこのバイク『スレイプニル』の練習走行をしている。フルカウル型のバイクで、真つ赤なタンクの脇に黒い字で『WISE』と書かれているのが特徴的だ。

操作性は普通の1000?のバイクと同じと言われたが、自分は未だ600?位までしか乗ったことはなかった。その上トラックの操作性とも全く違うので、今はちゃんと乗れているように見えても、今日の朝は未だうまくギアも繋げず、発車すらままならなかった。

『もしもし、神田君聞こえる?』

ヘルメットの中の通信機に広木さんから通信が入る。

「はい、聞こえてます。」

『練習中申し訳ないけど、早速グールが出現したわ…』

「っ!?!場所は何処ですか?」

『それはナビに送っておいたわ…くれぐれも無理しないように…』

「…わかりました。」

予想外な展開だ。メーター類の下に付けられたナビを見てみる。バイクなので片手でナビの操作はできないが、見ることは出来る。グールが出現した場所には赤い印が出るようになっていた。その場所はどうやら現在地から3?程の所ようだ。

18時20分 噴水のある広場

神田 孝高

ナビによるとこの辺にグールが出現したようだ。

「グフオオオ!!」

「う、うわああ!!」

居た。噴水の周りで暴れている。馬のような顔をしているので、おそらくホースグールとでも名付けられるだろう。自分はバイクから降り、プレスとメテオフォンを構える。

「聖空変身!!」

《SUMMON METEO ENERGY》

その掛け声と共にメテオフォンの『change』をタッチし、プレスにセットする。光の輪が出現し、スーツを形成して変身が完了する。

「グフオオ!!」

「はあああ!!」

ホースグールが戸惑っている間にグングニルで斬りつける。

「グヒュウ!!……グフオオアア!!」

「なっ!?!…ぐああ!!」

結構効いたように見えたが、奴は攻撃を受けたとたんに怒りだし、此方に向かって突進してきた。自分は避けきれずに吹き飛ばされてしまった。

ほとんど助走無しでつつこんで来たにも関わらず、そのスピードとパワーは凄まじいものだ。

「グホオオオオ!!」

「ゲホツ…尋常じゃないな、そのパワー…」

ホースグールはその場で天に向かって咆哮をあげる。それが怒りなのか喜びなのかはもう解らない。

『手強いわね…チャージしたグングニルでも迂闊には近づけないわ…』

デインのマスクの複眼の右目は見た映像を本部の広木さん達へ送信するようになっていた。その映像を元に広木さんは作戦を立てて居るのだが、やはり基本は現場に居る自分の判断が重要になる。

「それなら…これでどう…だっ!!」

その声と共に思い切りグングニルの槍をホースグールへ投げつける。槍は真っ直ぐホースグールへ突き刺さる。

「グ、グフオオオ!!?グフオオオ!!」

今度は先程より激しく怒り始めた。また突進して来るようだったが、今度は転がりながら何とか避ける。

『なるほど…それなら距離をとれるから効果的だな…』

一緒に映像を見ていると思われる晴崎さんのぼやきがきこえる。

「このまま地道に削っていきますよ！はああ！！」

そう言つて左手をかざし、ホースグールに刺さったグングニルを自分の手に再構成させ、もう一度ホースグールへ思い切り投げつける。

「ブホオオオ！！」

相手は進歩が無いようで、またそのグングニルの槍をその体で受け止める。

『…そろそろチャージして決めても良いんじゃないか？』

晴崎さんがそう呟く。自分もそう思つて左手をかざす。槍を再構成させ、メテオフォンに手をかけたその時だった。

「ギユホオオオオオオ！！」

けたたましい銃声…ガトリング独特の連続した銃声とリボルバーの回転する音が響き、ホースグールを撃ち抜いて行く。

『なっ！？いったい誰が！？』

「わ、解りません！でも、取り敢えずチャンスみたいです！！」

《CHARGE WIND》

メテオフォンの画面をタッチし、風をグングニルの槍に集中する。

「うおおお!!」

自分は、銃撃を受けてふらついているホースグールへと走って行く。そして、チャージしたグングニルの槍を思い切り振り下ろす。

「グフオオオアアアア!!」

ホースグールは避けることも出来ずに、そのまま斬撃を食らい爆発する。そしてガトリングが放たれた方を見てみる。そこには黒い仮面に紅いスカーフ、そして大きなベルトを着けた何かが居た。

「お前も…グール!？」

18時00分 喫茶店『THE FOOL』駐車場

孤山 雅飛

いろいろと話し込んでいたら、もう6時になっていた。

「今日はありがとうございました。スゴく楽しかったです!」

「うん、僕も楽しかった。こっちこそありがとう。」

あまり仲良く成りすぎない方がいい…そう思いながらも理恵ちゃんとまた会いたいと思う。それが本当は理恵ちゃんにとって悪いことだと知っていてもだ。

「良かったらアドレスか携帯番号を…」

「…ゴメン、今携帯無くしちゃって…」

本当は浮浪者生活になってしまったため、今は携帯を使用停止にしているのだ。恥ずかしいから、そうは言えなかったが。

「…そう…ですか…」

嫌われていると思われただろうか。でも、そう思われてる位で丁度いい。

「今日も…送っていいかな？」

「…はい…」

ヘルメットを取りだし、理恵ちゃんに渡す。そのまま2人でゼビオンに乗り込み、キーを回しエンジンをかける。

「…行くよ！」

「…はい！」

スロットルを回しバイクを発進させる。ゼビオンの意思が無いときは自分で運転をすることになる。

理恵ちゃんの家場所はこの前の一件で覚えている。そんなに遠くは無いので、直ぐに着くだろう。

そう思っていた矢先だった。噴水の有る公園の近くを走っていると、

「グフオオオ！！（裏切り者のハエと女は何処だぁ！！）」

グールの咆哮とテレパシーが聞こえた。裏切り者のハエは僕のことだろうが、女は理恵ちゃんのことを言っているのだろうか。取り敢えずバイクを止め、ヘルメットのシールドを上げる。

「今の鳴き声…」

「ああ、グールの声だ…」

今回はおそらく、人間を捕まえて巣窟へ持ち帰るよりも、僕の抹殺が優先事項なのだろう。だったら何故理恵ちゃんを狙うのか…。

『主よ…恐らく奴らは、グールと深く関わった人間を恐れている…そこにいる女も生かしてはおきたくないのだろう…』

「そう言うことが…」

確かに存在を知られてしまい神田君のような組織の人間も動き出している。存在を知られるのを恐れるのは当然だ…。

「グホオオオオー!! (人間ごときが邪魔すんじゃないやねえ!!)」

「ゲホッ…尋常じゃないな、そのパワー…」

グールがまた雄叫びを上げる。その方を見ると、グールの他に紅い騎士の様な装甲を纏った何かが居た。

「もしかして…あれが組織の人間…?」

「す…凄い…」

押されているようだったが、只の人間がグールに立ち向かって行くということに驚きを隠せない。

槍を投げながら必死に交戦している様だが、ただ見ている訳にもい

かない。

「ブホオオオ！！（こうなったら先にテメーを殺す！！）」

不味い。奴はまだ何か力を隠しているかも知れない。槍投げ戦法だけでは決まらないかも知れない。

「ゼビオン、行くぞ…変身！！」

『承知した…！！』

ゼビオンから降り、僕は体をフライグールのものに戻す。それと同時にゼビオンの力でヘルメットを変化させ、腰に大きなベルトを出現させ、変身を完了する。

「理恵ちゃんはバイクの影に隠れてて！！」

「は、はい！」

そう言っ僕はグールの方へ走り出し、右手のガントレットからにガトリングを出現させる。

「バレてないな…ここからなら…いける！！」

ガトリングを構え、グールへと標準を合わせる。そして、引き金を引き、銃弾を発射させる。

「ギユホオオオオオ!!」

全弾命中したようだ。グールは悲鳴を上げ苦しんでいる。
… 本当はそんな声は聞きたくないのだが。

《CHARGE WIND》

「うおお!!」

動けないことをチャンスと見て、騎士は槍に紅い風を纏わせ、思い切り振り下ろす。

「グフオオオアアア!!」

ホースグールは避けることも出来ずに、そのまま斬撃を食らい爆発する。

すると、紅い戦士は不思議そうな目でこちらを見て呟く。

「お前も…グール!？」

四話 出会（後書き）

スレイプニル

デインの専用バイク。外装は特殊加工が施された強化カウルがつけられている。メーター類の下にはグールを追うためのナビ（グールサーチャー）が取り付けられている。エンジンは、生身でも安定した走りが出るように、ベース車は『KAWASAKI-Z1000』の物をそのまま使用。

《投稿が遅れた言い訳》

・学校が忙しかった

・一月前には書き上がった居たが弥太はその次の話の書き貯めが出来るまで投稿しなくなかった（なので次の話はもう書き上がった居ますが、更に次の話が書き上がるまでまた投稿が遅れます）

《言い訳終了》

と、言うことで第5話は第6話の編集が終わるまで投稿出来ません。本当に申し訳ありません。ここからはまた毎月更新に戻れればと思います。

それではまた次回でお会いしましょう。

五話 重甲

9月11日

??時??分 グールの巣窟 第5層
ビーグール（リーダー）

ここはグールしか入れ無い秘密の巣窟。この巣窟は地下7層構造になっており、最下層がマザーのいる層、そこから上は階級の高い順に下から並んでいる。私の居る第5層はマザーを除き上から二つ目の階級のグール達が居る場所だ。

どの層も幾つかの大きな部屋に分けられているが、この層からは少し大きな個人の部屋と中央の大きな部屋が与えられる。私はその大きな部屋で1人針の素振りを行っている。それは3日前の事を思い出したからだ。

私は人間共を甘く見すぎていた。そのせいで部下を2匹失ってしまった。私が居なくなつた後に2匹のグールを一度に倒せるほどの猛者が出現したと聞いた。

私はその部下を悼んでいるから、その人間に腹をたてている訳ではない。私が2匹のグールを一度に倒せるほどの猛者を見逃していたと言ふことに私は腹をたてているのだ。

「まあまあ、そうカッコしなさんな…もう3日も前の事ですぞ？」

下の層から誰かが上がってきた。

「ベルフェゴール殿…何か御用でも…？」

話し掛けてきた誰かとはゴートグール、通称ベルフェゴールだ。ベルフェゴールとは怠惰を司る高位の悪魔。そのヤル気の無い話し方と、山羊の様な姿からその異名が付いた最上位グールの1人である。

「用という程の用では有りませんが…そろそろ潰しておきませんか？あのハエ男と…紅い騎士殿を…」

「言われなくともそのつもりです…」

ハエ男とはフライグール、紅い騎士とは恐らく私の部下を倒した猛者の事であろう。

「はっはっは…そいつは失敬。ならば、貴方の飼っているグールの力をお借りしたい。二手に別れて貴奴等を追い詰めようと思ひましてね…」

「それなら貴方の飼っているグールだけでも…」

「それがですねえ…貴方の手下のグールが倒された日に、私の飼っているグールも2匹倒されてしまいました…私も弾切れなんですよ…」

「フライグール…ベルゼビオが2匹ものグールを？」

「いえいえ…もう一体厄介なのがありまして…貴方の手下さんにはその厄介者を倒していただきたいのですよ…」

「その厄介者については良くは解りませんが…まあ、良いでしょう。」

直々に紅い騎士と戦えないのが残念だが、ベルフェゴール殿は私より上位にいる。最上位のグールに齒向かえばその場で喰いちぎられても不思議ではない。まあ、ベルフェゴール殿はそこまでの荒くれ者ではないが。

「はっはっは…それは良かった…貴方の事だから直々に倒しに行くとも言いなさるかと思ったが…」

読まれていた。まあいい、この場は私が折れた方が良さそうだ。

「まあ、そうと決まれば後は部下に任せてゆつくり休めますかな…近頃自分から外に出ていく事が億劫でな…」

近頃とは言うが、私の見てきた限り今までこのお方が外に出たところを一度も見たことがない。

…怠惰の悪魔…何もかもが『面倒くさい』ですまされるから恐ろしいものだ。

「さて、私はこの辺で失礼するとしましょう…手下のグールには私のところに来るように言っておいてください。」

「…承知いたしました…」

厄介者が…いったいどれ程のものは解らんが、1つだけ解ることがある…それは

「…用という程の用では有りません…か…」

ベルフェゴール殿は軽々しくそう言ったが、実際は結構重要な用事

だと言っことだ。

重要と言えば、私にはもう一つやらなければならない事があったのだ。

「コイツを技術屋にわたしておくか…」

それは拾ってきた二匹から取ってきた謎の機械。コイツに変身するための重要な秘密が隠されているはずだ。しかし、

「はあ…素直に引き受けてくれるだろうか…」

技術屋は虫のグールが嫌いらしい…

私も話したことは少ないが、その度に嫌な顔をされる。重要な物なだけに部下に任せるわけにもいかない。

「仕方ないか…」

敵の秘密を知るためだ。腹をくくって技術屋の所に行く事にしよう。そう決めて、私は技術屋のもとへ向かう。

9月11日

18時40分 帰り道

三沢 颯太

今日のバイトも1日大変だった。マスターにこき使われるし、佐久間はうるさいし…何よりグールの存在を改めて知らされてしまっ

たし…

俺の身の回りにグールの存在を知っている輩がそんなに居ると思わなかった。未だに信じ切れない所は幾つか有るが、信じる他に無いようだ。

今まであんな怪物見たことも聞いたことも無い。あの時出会ったのが偶然だったのだろうか。いや、あんなのを見かけることはもう無いだろう。

今はまだ9月、7時前でも辺りはまだ明るく、少し暑い。こんな平和な帰り道だ。いつもと変わらない日常。あんな怪物が居る非現実とは一旦忘れて、ゆっくりと帰路を楽しもう。

そんな事を考えながら帰り道を歩いていると、前方から妙な黒い影が迫ってくる。どうせどっかの冴えないオッサンか誰かだろう…そう思っていた…

「ゲシュルルル…」

「…マジ…かよ…」

そう思ったかったが、目の前に堂々と立ったソイツはどうみても…
「グ…グール!？」

帰路を楽しめた時間数秒。いきなり襲ってきた非現実。
こうなると、もう先程のように会うことは無いなんて言えない。

大人しくしていても素通りさせてくれそうには無い。大きな二本の角を構えて、そのグール…恐らくクワガタ虫のグールはじつとこっ

ちを見ている。

「グク…ゲシユルル…」

「う…ああ…」

グールはそのまま此方へゆつくりと近づいてくる。俺は少しずつ後ずさるが、腰を抜かしその場に尻餅をつく。不味い、このままだとマジで殺られる。

「ゲシユウ…ゲアアアア!!」

グールは動きを一旦止め、その場で一呼吸置き二本の角に力を入れて突進してきた。

終わった…そう覚悟して目を瞑る…

『そう簡単に諦めてくれるな…』

「ゲシヤアアア!?!」

聞き覚えのある声と、グールの悲鳴が聞こえ目を開く。すると目の前にはグールではなく見覚えの有る白いローブが居た。

「ハ…スター?」

9月11日

18時40分 噴水公園

神田 孝高

「お前も…グール!？」

横からいきなり出てきた黒い何かに向かって呟く。

「僕は…確かにグールだ…しかし、少なくとも君の敵ではない…槍を下ろしてくれ…」

向こうはガトリングをしまつてそういった。確かに向こうから敵意は感じられない。しかし、信じてみても良いのだろうか…

『神田…槍をおろして撤退しろ…多分そいつ、半端無く強いぞ…』

「え!？は、はい…」

晴崎さんに言われて槍をおろす。確かにあのグールを一度の攻撃でダウンさせるほどの火力を持っているのだ。強いことには違いない。

「信じてくれて有り難う…」

目の前のベルゼビオと名乗ったグールは穏やかな口調でそう言った。

「…お前は何でグールを倒した？目的は何だ？」

撤退するまえに一つそこが気になった。何故人間を襲わず、グールと戦うのか不思議に思った。

「僕は…人間で居たいから…笑顔を護りたいから…」

予想外の答えだった。自分がその答えに啞然としている内にベルゼビオと名乗ったグールは走って何処かへ消えて行った。

「ちよっ…待つ…!？」

『深追いしなくて良いわ。いいからもう撤退して下さい。…それより、もう一カ所にもグールが出たわ…』

追いかけようとしたが、今度は広木さんから止められた。

「はい…わかり…ました。」

確かに深追いしても仕方がないかと、自分を納得させ変身を解除する。そのままバイクを止めた場所に戻り、エンジンをかけてバイクを前進させる。

しかし、さっきのグールは本当に人間で在りたいと思っているのだろうか。少なくとも今までのグールにそこまで高度な知識を持つものはこの前遭遇した蜂のグールのリーダーくらいしか居なかった。そもそもグールとはいったい何処から生まれて、何処へ向かおうとしているのだろうか。

そんな結果の出ない事を考えながら、ナビに出現したグールの場所に向かってバイクを走らせた。

9月11日

18時40分 噴水公園

孤山 雅飛

「ちよっ…待つ…!？」

赤い戦士に呼び止められるが、取り敢えず逃げる。理恵ちゃんのとが心配になったからだ。赤い戦士は呼びはしたが、追いかけては来ない。僕はメットを外しバイクに駆け寄る。

「り、理恵ちゃん!!」

「は、はい…」

理恵ちゃんはゼビオンのシートの静かに座っていた。

「無事で良かった…」

「えっ!? あっ、だ、大丈夫です!! 孤山さんこそ大丈夫ですか!？」

理恵ちゃんは彼女がまだグールに狙われている事を知らない。

理恵ちゃんは何のことだか解らないと言いたそうな顔になったが、

『大丈夫です』と笑顔で元気な返事してくれた。

「僕は大丈夫… もうすっかり遅くなっちゃったし、出発しようか!」

「…はい!」

そう返して僕はゼビオンに乗り込む。理恵ちゃんも返事をして座り直し、僕の体へしっかりと掴まる。すると、大人しかったゼビオンが自分でエンジンをスタートさせ、進み始めた。僕は慌て体制を立

て直し、ハンドルを握り直す。

『主よ…その女とはもう会わないつもりでいるようだが…主が護つてやらねば彼女は確実にグールに殺されるだろう…』

走っている最中にゼビオンからテレパシーが伝わる。

「（…解つてるよ…そんなこと…）」

『グール達と彼女を関わらせたく無いから会いたくないと考えるのは解る…しかし、本当に彼女の笑顔を護りたいのなら…』

「（…君は機械の癖に人の情が有るんだね…）」

『私は主と2つに別けられた身…この情は主が持っている情の筈だ…』

「（なら…何で僕らは2つに別けられたんだろう…）」

テレパシーで問いかけるが、返事は来ない。こんな会話をしている内に理恵ちゃんの家の近くに到着した。そこでゼビオンは止まり、エンジンをオフにした。

「今日は…有り難うございました…」

理恵ちゃん少しは悲しそうな顔でお礼をしてきた。

「良いつて、僕は…皆を守るのが仕事だから…」

「また…いつか会えますか…？」

理恵ちゃんは僕のそばに居たいと思っている。鈍い僕でもそれくらい解ってる。

「解らない… もう僕は君を巻き込みたく無いから…」

「そうですか…」

彼女はさつきより悲しそうな顔で返事をする。今の理恵ちゃんを傷つけて居るのはグールなんかじゃない、僕だ。そう考えたらもう会わないつもりでいた自分がバカらしくなった。

ゼビオンは彼女の側に居てグールから守るべきと言った。しかし、グール達と彼女を関わらせることで彼女は傷つくかもしれない。しかし、突き放す事で彼女は傷ついてしまう。しかも僕のせいだ。

…どちらかを選ぶんじゃない。選ぶまでもなく、どちらからも彼女を守ってあげられなければ彼女を守ることには成らないのだ。

「でも…」

「…？」

「危ないときはいつでも駆けつけるし… 暇な日はあの喫茶店で待ってるから…！」

「…はい、私も待ってます！」

「それじゃ… またね…」

「はい、さようなら！」

そういつて手を振ると、彼女は嬉しそうに手を振り替えてくれた。

「さて…行こうか、ゼビオン…」

そうゼビオンに語りかける。すると、ゼビオンのエンジンに再び火が灯り、ゆっくり発進していく。ここからは今夜の宿探しだ。
今日は何処で夜を明かしたら良いのだろうか…。

『主よ…』

「（なんだい…）」

ゼビオンからテレパシーが伝わる。

『やはり主には敵わないな…そう思ったただけだ…』

「（そんなことない…君にも僕の情が入っているんだろう？…それなら君だって同じ考え方が出来るんだよ…）」

『そうか…だが、それを言われるようでは…わたしは未熟者と言う事だろう…』

尊敬されるような事ではない。実際にゼビオンが僕の感情と同じだったと同じ考えに行き着く筈だ。それに未熟者だって仕方がない。僕らは2つに分けられた半人前なんだから…

「（…まあ、とりあえず…今夜はもう野宿でいいか…）」

走っているうちに、先ほどの噴水のある公園についた。他に良い所も無さそうだからこの近くで眠ることにしよう…

9月11日

19時00分 帰り道

三沢 颯太

「ハ…スター？」

『ふん…私の助けがなければお前も只の腑抜けだな…』

ハスターはロッドでグールを横薙ぎし、攻撃を退けたようだ。

「うるせえ…ちょっとつまづいただけだ…」

良く有りがちな強がり言ってみる。強がりなので当然腰は抜けたまま。

『そうか…まあ、何でも良い。今回も力を貸してもらっぞ…貴様のために…』

「な…なに？」

自分のために？俺の命を守るためってことか？考えている内にハスターが球体に吸い込まれ、ベルトに変化し俺の腹へ巻き付いてきた。

『良いからあの時のようにやってみろ』

「随分簡単に言っ…うおっ!!」

「ゲシャアアア!!」

悪態をつきながら立ち上がろうとしたが、グールが角を振り回しながら近づいてきた。

咄嗟に後ろに飛び退け、少し距離をとる。

『死にたくなかったら早くしろ…何と叫ぶんだっ たか…』

「ったく…『変身』…だろ…!!」

左腕を引き、右腕を斜め前に伸ばし、そう答える。

それと共に黒いスーツとアーマーが形成され、似非仮面ライダーへ変身する。

「ゲア…!?ゲアアアア!!」

変身したことで一瞬戸惑いを見せたが、また角を構え突進してくる。

『避けるな、角を掴め。そしたら力押しだ!!』

「また無茶な考え起こしやがって…!!」

「ゲオオオオ!!」

「がつ…ぐああ!!」

ハスターにしたがつて角を掴む。しかし、掴んだは良いが簡単に飛ばされてしまう。

『力押しだけでは無理か…速さと技で対抗するか…』

「だからそんなこと簡単に出来ね…ぐおっ!!」

「ゲアッ!ゲアッ!ゲアッ!」

ハスターに反応している間にグールは此方に接近し、角を降り下ろしてくる。転がり避けるが、向こうは連続で角を降りながら迫ってくる。

「…こつちにも何か武器とか無えのかよ!?!たとえば…相手がクワガタならカブトムシみてえなのとか!?!」

角を避けながらグールに無茶な注文をしてみる。しかし、流石のグールもばててきたようで、動きが止まった隙を見て俺はすぐさま後ろへ下がった。

『カブトムシ…成る程。今、貴様のイメージと他世界で戦う戦士がリンクした。』

「は…?…ってなんだこれ!?!」

ハスターはそう言うと、ベルトから黒い球体に戻り、カブトムシの形をした機械に変化する。そして俺の手元に浮かんできた。

『私には解らないが、きつとお前には使い方が解るだろう…』

「解るかよ!!こんな…あれ…いや、解ったかもしんねえ…」

解るわけ無いと思いながらハスターを掴む。すると、カブトムシの姿を模した機械的な青い戦士や、機械的で有りながら身軽な動きの赤い戦士のイメージが頭に入り込んでくる。見よう見まねで変身の真似を試みる。まず青い戦士はこう叫んでいた。

「…重甲！」

そして赤い戦士は

「変身！」

そう言つて、ベルトの中心にカブトムシ形の機械をはめ込んでいた。

俺もその動きを真似てカブトムシ形のハスターを腹の中心に持つてくる。

すると、そこから新しいベルトが形成されていく。それと共にアーマーとマスクも変化し、アーマーは赤い戦士のようなカブトムシの背中を模した形になるが、色は青い戦士のようなメタリックブルーへ変貌する。そしてマスクもメタリックブルーに染まり、大きな角が顎の下からせり上がり、変身が完了する。

「でき…た…」

『複数の戦士を合わせた姿に変わることも可能なようだな…』

「ゲシュウウ…」

今回ばかりはグールも少し距離を置いて警戒している。

「コイツなら行けそうだな…『ステインガーブレード』!!」

その声と共に右腕にカブトムシを模した大きなブレードが出現する。
これは青い戦士の持っていた武器だ。

「行くぞ…!!」

そう言ってブレードを構えグールへと走り出し、ステインガーブレードを降り下ろす。

「ゲシャアアア!!」

「ぬっ…うらああ!!」

向こうも角を振るい応戦する。俺は一度間合いを取り、もう一度ステインガーブレードで斬りかかる。

「ゲゲエ!!…ゲアアア!!」

『致命傷にはならないか…』

「まだ優勢って訳でもないしな…」

避けきれずになぎ倒されたグールだが、その攻撃はグールを怒らせるだけだった。

「くっそ…そうだ、クロックアップ!!」

《CLOCK・UP》

思い出したように左腰のスイッチを叩くと、音声と共に周りの時間

が止まる。いや、止まったのではない。

『超高速移動…こんなことまで出来るのか…』

これは赤い戦士の持っている機能だ。詳しくは解らないが、自分が超高速で動けるようになるため、相手が止まって見えるのだろう。

「取り敢えずやってみるか…!!」

俺は先ほど変わらず走って近づき、連続で斬りつける。自分の感覚では走って近づいて攻撃をしただけが、多分グールから見たら、いきなり見えなくなっていきなり斬られたようにしか感じないのだろう。

『予想以上の強さだな…』

「見事に速さと技はカバー出来…」

《CLOCK・OVER》

そう呟いた瞬間クロックアップが終了する。しかし、もう十分にダメージは与えた筈だ。グールはほぼ虫の息だ。

「ゲエ…ゲシュウ…」

『次で決められそうだな…』

「解ってるよ!!」

《1・2・3》

その返事と共にカブトムシ形のハスターに付いている3つのボタン

を押す。すると、他世界の戦士達のイメージと同様に、頭の中に必殺技の名前が流れ込んでくる。

「ライダー…ブレイク!!」

《RIDER BREAK》

その名を叫ぶと、緑の光がベルトから腕を経由し、スティンガーブレードへたまって行く。

「ゲシヤアアア!!」

グールも最後の力を振り絞り、此方へ突進して来る。俺はスティンガーブレードを構え、向こうが間合いに入って来るのを待つ。

『今だ!!』

「うらああ!!」

ハスターの掛け声と共にスティンガーブレードを袈裟懸けにふりおろし、グールを両断する。

「ゲアアアアアア!!」

断末魔の悲鳴と共にグールは爆発する。すると、ハスターが黒い球体に戻り、変身が解除される。

『終わったな…』

「つつかれたあ…」

俺の体から力が抜け、その場に座り込む。

『やはりただの腑抜けか…』

「うるせえ…簡単に倒してるように見えるかしんねえけど、滅茶苦茶疲れんだぞ…」

何とか立ち上がりハスターに文句をたれる。

「つーか、何でグールは俺んどこに来たんだ…？」

『多分私を狙つての事だろう。私に関わりのある人物と言えば貴様だけだからな…』

「つたく…傍迷惑な話だなあ…」

『このままでは貴様はグールに狙われ続ける運命になってしまうかもしれない…そこでだ、これから私と共にグールを倒す為に手を組んではくれないか…？』

「はあ…！？」

予想外の言葉に困惑する。これからってことはこんな戦いをずっと続けていかなければならないのか…？

『別にグールに襲われてグールとして生きていきたいのならば話しは別だが…』

「そ…それは確かに嫌…って、グールとして生きていくってどういう事だよ？」

『先ずはそこから説明しなければならぬようだな…先ずはグールが人を襲う理由何だが…』

「その話、自分にも詳しく聞かせてもらおう。」

ハスターが話を初めようとしたその時だった。フルフェイスのヘルメットを持った同い年位の男が話しかけてきた。

9月11日

19時20分 グール発生地点

神田 孝高

「ゲアアアアアアア！」

現場から爆発音が聞こえてバイクから降りる。すると、グールのも
のと思われる叫び声が聞こえる。慌てメットを外し現場に近づく。
しかし、そこに残っていたのは1人の青年と宙に浮く謎の球体だけ
だった。気づかれないようにその球体に近づく。すると会話をし
ている声が聞こえる。

『先ずは……説明しなければ……ようだな……はグールが人を襲う理
由……』

よく聞こえないが、あの青年の声ではない事は解った。いや、そん
な事より、謎の声と彼はグールの話をしている様だ。今まであった
グールの反応と青年が…というよりは黒い球体がどんな関係に有る

というのか。

「その話、自分にも詳しく聞かせてもらおう。」

五話 重甲（後書き）

今回はハスターの活躍回でした。

いかがでしたでしょうか？ハスターの真の力。『他世界』と書くと、ヒーロークロスラインの世界観のように聞こえますが、一応設定としてはディケイドの世界観のようになっています。

今回の変身の話については、能力的に見ても赤の戦士『カブト』は比較的分かりやすかったと思います。

青の戦士『ブルービート（ビーファイター）』は一応あの掛け声とスティンガーブレードで気づいてくれれば大変嬉しいです。

今回の話を読んで皆様が『パクリじゃん、気に食わねえ』と思うか『ちょwおまww』とか言って喜んでくださるか正直わかりませんがまだ不安です。

こんな不安な作品でよかったら引き続きお付き合い下さい。

それでは。

六話 決心（前書き）

大分遅くなってしまいました…

取り敢えず、颯太の決意編です。駄文ですが、暖かい目で見てやってください。

六話 決心

9月11日

??時??分 グールの巣窟 技術室
ビーグール

「また虫のグールか…この偉大な技術室に虫ケラがいたい何のようだ…?」

私は技術部の主任と話をしている。通称は『技術屋』役職も『主任』と呼ばれている上、姿だけでは何のグールか解らない姿をしている。

技術屋は授かった力が『技術開発』ダケであるため、虫や獣などの種族には何処にも属さず、技術開発にひたすら没頭している。

「今日は先日の戦士達から奪い取った戦利品を持って参りました…」

そして彼も最上位グールの一体であるため、自分の場合敬語を使わねばならない…

「ふん…虫ケラにしては良くやったな…」

技術屋は虫のグールが本当に嫌いらしい…それは、ベルゼブが裏切った事件も関係しているのだろうか。

「そうだ…この機械の使用者の身体は何処へ…?」

「はい、それなら既にマザー・バアルの力でグールへと転生させる準備をしております…何の種族のグールに転生したとしても、必ず

技術屋殿の元に配属されるように手配はしておきました…」

「ふん…当然だ…虫のグールも儂のご機嫌取りに必死のようだな…」
バレていたか。しかし、こうでもして機嫌をとらなければ虫の種族のグールの地位も下がる一方だ。認めたくは無いが虫の最上位グールは今のところベルゼブのみ。それが裏切者へ変わった事で既に虫の種族のグールの地位は下の下に堕ちた。それが技術屋にまで嫌われたら何も残らない。

「全く…虫のグールは姑息だから好かん…あの女といいベルゼブといい皆姑息なやつらばかりだった…」

やはり技術屋の虫嫌いの原因はベルゼブ共にあったようだ。あの女とは恐らく『リリス』、私も詳しくは知らないが、恐らく虫の種族の問題児だったグールの事だろう。

「私が居ると不愉快になられるようなら、私はこれで失礼させていただきます…」

「ふん、とつとと出ていけ…他にも実験しなければ成らんことがあるからな…」

そう言つて技術屋は部屋の奥へ入ってしまった。私も技術室から出てもとの部屋へと歩みを進める。

今日の仕事は先ほど送り出したグールの報告を待つのみか…

しかし、正直な所あのクワガタのグールにはあまり期待をしていない。ベルフェゴール殿の警戒するような厄介者だ。それを下級グールのみで倒せるようなら世話は無い。

取り敢えず今のところはマザー・バアルに渡す屍を稼ぐことを考えるとするか…

9月11日

19時20分 帰り道

三沢 颯太

何か不思議な青年が話しかけてきた。昼間お客さんが言ってた組織の人間…と言うより最早、昼間のお客さんだ。
向こうは自分が店員だと未だ気付いて居ないようだ。

『まあ良いだろう…ついでに教えてやる。知って損するような事ばかりだろうがな…』

「…」

『…先ずグールが人間を襲う理由は一つ、人間の死体をグールとして転生させる事だ。』

「なっ…!!」

「あんなのが元々人間だったってことか…」

『そうだ。奴等の手に掛かって人の死体はグールとして新たな命を受ける。グールの親玉の忠実な子分として…』

「そんな…」

グールの正体を知り俺は絶望した。アレが元は同じ人間だとは到底思えない。青年も納得行かないような顔でハスターを見つめる。

「…いや、俺は人を守るために戦うグールを見た…どう見てもグールの親玉とか言う奴に従っているようには見えなかったぞ…」

青年は真剣な表情でハスターに問いかけた。流石は組織と言うだけはある…グールの話しとなると目付きが陰しくなる。

『そいつはきつとグールにとっての失敗作か何かだろう…もしくは知能を使うグールが何か企んでいるか…だが、今はそんな事はどうでもいい、ここからが本題だ…三沢颯太、私と組んでグール共を倒してはくれないか…』

青年の質問を軽くあしらひ、ハスターは俺への質問に戻る。すると、

「グールと戦うだと！一般人を巻き込むつもりか！？」

青年が口をはさんできた。

『確かにコイツは1人の一般人だ…しかし、グールに狙われたコイツを護るのにはこの方法が一番だ…』

「市民の保護は組織が全力で…」

『はっきりと言う、私から見れば貴様等のような人間こそ目障りだ。貴様等はわざわざグールの種を蒔きちらしているようなものだ。』

」

「なんだと…!？」

ハスターは青年の言葉を遮りそう言った。実際、保護とか言われて付きまとわれるのも嫌だが、ハスターちよつと言い過ぎな気はする。しかし、俺からは何とも言えない。

『颯太、答えを聞こう…これから私と共にグールと戦ってくれるか…？』

「…自分は君を巻き込む訳には…」
「もう少し…考えさせてくれ…」

青年の言葉を遮ってそう言った。もう二回もハスターに助けられ…というか、戦わされたが、未だ完全に信じることが出来ない。だからと言って信じないまま死にたくはない。

「…次に俺の目の前にまたグールが出たときだ…その時にどうするか決める…」

『良いだろう…』

そう答えるとハスターは上空へ飛び上がり、何処かへ飛んでいってしまった。

「君は…あの球体はいつたい何者なんだ…？」

青年が俺に質問してくる。

「俺は三沢颯太。ハスターについては正直な話、俺にも解んない…」
実際ハスターについては謎が多く、まだ何も解らない。きっと聞いても俺達には教えてはくれないだろう。

「君たちにはグールと関わらないでいてほしい…」

確かに本当は俺には関係ない。関わってはいけないことなんだ。しかし、二度も自分の前に現れたら関係無いと言って忘れる事は流石に出来ない。

そう考えているうちに青年は停めてあったバイクの方へ歩き出した。

「俺も…帰るか…」

そう呟いて俺も家へと向かって歩きはじめた。

9月12日

08時00分 自宅

三沢 颯太

今日は日曜日。やっと俺にも休みが来た。なのになぜこんな時間に起きているのか…その理由は一つ。

『仮面ライダーオーブ！！このあとすぐ！！』

仮面ライダーを見るためだ。俺は毎週欠かさずこのスーパーヒーロータイムを見ている。これは新しいライダーの第2話見逃すわけにはいかない。

『ほう…これが貴様の言う仮面ライダーか…』

背後から声が聞こえた。慌て振り返るとそこには黒い球体…

「ハ…ハスター！？」

『貴様が次にいつグールと出会うか解らないからな…うっかりグールの反応に気付かずお前に死なれても困るからな…』

俺を守ることが先なのかグールを倒すことが先なのか解らないがまあいい…解ることは一つ、

「でてけ」

『貴様は死んでもいいのか？』

「この野郎…ぶっ飛ばす！！」

黒い球体目掛けてパンチを繰り出す。しかし、

『きかな…』

素早く背後に回られ、白いロープの姿の時いつも使っている杖の形になり、頭を叩かれる。

「いだあ!？」

『全く…お前は仮面ライダーとやらが好きなのに、仮面ライダーに成って戦いたいとは思わんのか?』

「うるせえ…俺はガキじゃねえんだ、戦いなんて疲れるダケだろ…」

ハスターの言葉に頭を擦りながら答える。

「良いから静かにしろ、今日はオーブの新しいフォーム出るみたいなんだから!」

『フォーム…?』

そう言つて2人(?)でTVを見ていると

『映一!これを使え!!』

『よし、わかった!!《ワシ、カマキリ、イナゴ!!》』

そう言つて主人公『火田 映一』はベルトに込められた水晶『オークリスタル』を入れ換え、形態を変える。

「出た、フォームチェンジ…」

『あれがフォームチェンジか…ならば颯太、我々の昨日の変化もフォームチェンジなのか…』

「まあ、そうだろうな…」

『名前は何にする？名前があつたほうが解りやすいだろう。』

「名前なんて決めるか！！何でまた俺が戦うのが前提なんだよ！？」

『何でと言われても…もうすぐグールが近づいてくるからな…』

「ハア！？」

ハスターは軽々しくグールの存在を俺に告げた。

9月12日

8時15分 WISE本部

神田 孝高

今日は日曜日。しかし、今の自分に休みなどない。そう覚悟して自分は晴崎さん達が居る研究室に入る。

ここ奥には自分の使っているメテオスーツのパワーの源となる巨大な鉱石『ユグドラシル』が嚴重に置かれている。だから本当は易々と入れる場所ではないのだ。

しかし…

『映一、これを使え！！』

『よし、わかった！！《ワシ、カマキリ、イナゴ！！》』

「いや、何気に新ライダー面白いね、そう思わない？真由ちゃん？」

「そんなに気に入ったなら新しいシステムはオーブの造形のオマージユにでもしてみますか？」

「晴崎さんも広木さんも何してんすか！？」

「こんなにも緩い状態は初めて見た。てか、晴崎さんも広木さんもこんなに軽い人だったのか？」

「新しい仮面ライダーを見て勉強しているんだよ、勉強！」

「そう言う名義で今は仮面ライダーを観賞しています。」

「2人ともだらけてる場合じゃないでしょう！」

昨日のことも有ってか、自分は今ピリピリしている。

「で、話って何よ？」

そうだ。自分は昨日のことで話があるからここへ来たのだ。

「はい…実は…」

自分は、昨日の夜の黒い球体の話を全て2人に打ち明けた。

「グールの元は人間ねえ…そう考えると昨日の人助けグールは人間の心が強いって事かな…」

「そうとは限りません…その黒い球体と言うものがいった通り、何らかの作戦かもしれません。取り敢えず、グールの元が本当に人間ならグールの生態や弱点の開明もはかどりそうですね…」

「2人とも…そんな状態で話し込むの止めてくれますか？」

2人ともテレビの画面を見ながら返事をする。

「その黒い球体つてのも気になるな…」

「その時出会った男は『ハスター』と呼んでいまし…!!」

ハスターという名前を出したその時だった。部屋の奥の無菌カプセルに入っていた『ユグドラシル』が翠色に輝き出した。

「な、なんだこれ!? 『ピッ』真由ちゃん、急いで解析して!!」

「は、はい!!」

広木さんは急いでパソコンに向かい、晴崎さんは慌ててテレビのリモコンに手を伸ばし、電源を切る…のかと思いきや、レコーダーの録画ボタンを押した。

「…ぬかりないですね…晴崎さん…」

「そんなことより、神田も手伝っ『ピーッ!ピーッ!』…ううええ!?!」

急な警報でさすがの晴崎さんも驚いている。この音はグール出現の警報だ。

「神田君、グールの位置情報はナビに自動で転送してある筈だから！急いで出勤して！！」

自分は急いでヘルメットの準備をし、駐車場へと向かう。

駐車場には以前まで自分が使用していたトレーラーが置いてある。数日前の事件で駆動系は完全にいかれている。全体的に外装も傷ついてしまったが、今は晴崎さんの希望で、荷台部分と傷だけを修理し、自分のバイクの車庫になっている。

荷台のハッチを開き、自分の専用バイク『スレイプニル』のキーを回し、ナビに電源を入れる。出現ポイントを確認してみると、昨日のポイントの近くにいます。

「神田孝高、『仮面ライダーデイン』出勤します！！」

その掛け声により、タイヤに掛かっていたロックが外れ、荷台からコンクリートの地面へとスロープが降りる。それを確認するとスタンドを外し、バイクに跨がる。そのままゆっくりスロープをたどって地面に降り、セルモーターのボタンを押して、エンジンをスタートさせる。暖機運転をしている暇もないので、そのままギアを入れて発進する。

「ハスターって言葉に反応したよな…ユグドラシル…」

そう呟きながらバイクを進めていると一般道に合流する。

「三沢颯太…ついでに調べてみるか…」

昨日の青年を思い出しながら、自分はグールのもとへバイクを走らせた。

9月12日

8時20分 噴水のある公園

孤山 雅飛

今日は日曜日。こんな時間に公園にいるのなんて僕ぐらいだろう。何故こんな所に居るのかと言うと、ゼビオンがグールの気配を察知したからだ。幸い昨日はこの周辺で野宿していたから良かったものの…いや、実際は野宿自体は良くない事なのだが。

『主よ…昨日からこの周辺ばかりにグールが出現する…妙だと思われぬか…?』

「グール達が僕と理恵ちゃんを狙ってるからじゃないの…?」

『いや、それなら昨日のホースグールの様に直接我らに接触しようと企んでくる筈だ…しかし、奴らは何か別の目的の為に動いているようにも見える…』

「目的…? いったい何が?」

『わからん…だからこそこの付近にいるグールを探さねばならんだが…次第に気配が薄れていく…これでは探しようがない…』

「そうか…ん? 何だあのバイク…」

脇の道からこちらへスポーツタイプの真っ赤なバイクが向かって来

る。そして、公園の入り口でバイクを止め、こちらへ歩いてくる。警察では無さそうだが、このままだと多分僕は不審者扱いされる。何とかやり過ごす方法は…

「おい、」

バイクから降りてきた青年がメットを外しながら歩いてくる…が、その青年は何か見覚えが…

「か、神田君!？」

「昨日ぶりだな、孤山。」

神田君であつた。いったいこんなところに何のようだろうか。

「きよ、今日はどうしたの?」

「ああ、いまは工作中だ…お前こそこんな所で何してんだ?」

「うゝん、朝の散歩って感じかな…仕事っていうとやっぱりグールのこと…?」

『僕はフラフラしながらグール探してるよ』なんて言ったら確実に怪しまれる…取り敢えずグールの情報を探すのも兼ねて話を反らす。

「そうだ…あんまりお前にグールの話をするのは嫌だが、この辺でグールの反応が有ったらしい…」

「そうなんだ…でも、怪しいやつとか、おかしい所は見かけなかったし…」

強いて言えば怪しいのはこの僕だろうか…

「そうか…それなら良かった。だが…一刻も早く居場所を突き止めねば…」

「そつ…そつだね…」

昔の友として、そしてグールの居場所を知るため『それなら僕も手伝うよ』と言いかけた。

しかし、昔から堅物な神田君のことだ、『一般人のお前を巻き込む訳にはいかない!』とか言うだろう。そう思つて慌てて言葉を濁す。

「ああ…だけど意外だな…お節介なお前の事だから『それなら僕も手伝うよ!』とか言つて来るかと思つたが…」

こちらの考えをもだいたい読まれていたようだ。そう考えると、やはり僕らは仲が良いのかもしれない。

「だが、やはり一般人を巻き込むわけにはいかん。今日は大人しく家に帰ってくれ…」

「う…うん。そうすることにするよ…」

取り敢えず彼の前では帰るという事にして、駐車しておいたゼビオンに跨がる。実際はしばらくの間この公園が家になるかもしれないのだが…

「ああ…邪魔して悪かった。気を付けて帰れよ…」

彼もバイクに跨がり、再びグールを探しに行ってしまった。

『主…我らも、もう一度一から探し直すか…』

「うん…有力な情報は得られなかったし…」

ヘルメットを被りハンドルを握ると、ゼビオンが動き始める。

『主よ…今回のグールはもしかしたら…』

「うん。姿と気配を消せるグールだと思う…」

『しかし、これ程まで綺麗に気配を消せるグールが…』

僕たちは今回のグールの特徴を推理してみた。気配を消せるグール…イメージとしてはカメレオンとかトカゲ系のグールが今回の敵かもしれない。

「ゼビオンでも苦戦するくらい綺麗に気配を消せるくらいだから…上位グールかも…」

『その可能性も大き…主よ、あれはいつたい…？』

ゼビオンが急ブレーキをかけて止まる。突然だったため僕は思い切り前にのめり込んでしまう。痛い、メーターにぶつかった。

「一体何が…」

と、道の脇を見てみると奇妙な円筒状の何かが落ちていた。

『あそこから気が発生しているようだな…』

ゼビオンから降り、その円筒状の何かを拾い上げる。すると、

『気が強大に成った…恐らくソイツを持ったグールによって発生される気が変わるようだな…』

「気を発生させる装置…要は『オトリ』ってことだね…そして、前の持ち主は僕より気が微弱ってことになるのかな…？」

『その可能性は有るな…今回は『技術屋』の仕業か…』

僕はその円筒状の装置を思い切り地面に叩きつける。

『技術屋』…彼はグールの付属の装備を開発する、正体は良く知らないが名前の通り技術専門のグールだ。もしかしたらこのバイク…ゼビオンを作ったのも彼かもしれない。

だが、僕はアイツが嫌いだ。何故かと聞かれると不思議なことに自分でも良く解らない。しかし、技術屋と言っ言葉が僕を苛立たせた。

「だとしたら…本体は何処に…ゼビオン、探しに行こう。」

『…』

僕はゼビオンにもう一度跨がり、スロットルをひねる。

この匣は組織の探知機かゼビオンにしか効果はない。人間には探知出来ないし、探知する意味もない。

こんな姑息な手で僕らをここにおびき寄せていったい何をする気だというのか…

『全く気を感じない…もしかするとあの匣を置いて本体は逃げたと言う可能性もある…』

「僕らを狙う以外に別の目的って…技術屋の実験ってことか…」

『もしかしたら遠くにグールが潜んでいる可能性もあるが、今回は退くべきだ…』

「でもっ…」

『主、探す宛もないのにどうやって探すつもりだ？…もう一度言う、今回は退くべきだ…』

「…わかった…そうするよ…」

初めてだろうか、少し強くゼビオンに指摘された。しかし、そのおかげで僕も冷静に考える事が出来た。

確かに今の僕らにはどうしようもない問題だ。隠れた相手に対して成す術が無い。

「取り敢えず…僕らはしばらくこの辺で相手の出方を待ってみようか…」

『ああ…それが良いだろう…』

そう言っ僕はゼビオンの向きを変え、先ほどの公園へ向かう。取

り敢えずは公園で今日は何をするか決めよう。そう考えながら僕はスロットルを回し、ゼビオンを走らせるのだった。

9月12日

8時55分 一般道

神田 孝高

孤山と偶然出会ってから数十分。グールらしき影すら見えないと思っていたら、ついにはナビから出現情報すら消えてしまった。いったい何が起こったのか。

『神田君、聞こえる？どうやらグールを倒したようね…』

「いえ、それが…急にこっちのナビから出現情報が消えて…」

広木さんから通信が入る。どうやら本部の方の観測機からも反応が消えたようだ。

『っ！？倒した訳じゃないの？』

「はい、急にサーチャーから反応が消えて…」

『…まあいいわ、取り敢えず本部に戻って来てくれる！？ユグドラシルのことで話しが有るの！…』

「…えっでも…と、取り敢えず了解しました！…」

本当はグールの事について気になったし、三沢と言う男についてもまだ調べたかったが、召集がかかったとなれば仕方がない。自分はそのままバイクを走らせ本部への道へ走っていった。

それから遡ること数十分

9月12日

8時30分 自宅近くの道端

三沢 颯太

『遠くの方でもグールの反応がしていたが…何者かによって消されたようだな…それよりもこの辺に潜んでいる奴の方が厄介だな…』

ハスターに連れられて近くの道端に来た。最早ここまで来たら戦うしかないのだろうか。

『戦う戦わないは今回で決めてくれれば良い…そう言う約束だったからな…』

「案外律儀な奴なんだな…お前…」

『そんなことはどうでも良い…それよりもこの辺に潜んでいる奴は本当に面倒だな…グールとしての反応を殆ど消してやがる…上位のグールでも感知するのは不可能に近い…』

「じゃあ…何でお前には解るんだ…？」

『それは単純に『殺気』みたいなを感じるからな…そう言う雑念み
たいのまでは消せないみたいだな…』

「それでも殺気だけで相手を探すのは難しいってことか…」

『まあ、そう言う事だな…』

そんな奴を相手にしなければならぬのかと思うと帰りたくなる。

「どうやって探せば…」キヤアアアア！…！！？」

『随分と早いお出ましだな…』

俺達の目の前に『何か』が伸びてくる。それは俺達へでは無く、前
を歩いていた見ず知らずの女性の首へと絡み付いた。

『ターゲットを間違えたか…低能なグールに間違いない…』

「結局狙いは俺なのか…？」

『まあ、死体に成ればターゲットで無くとも、少なからず親玉に貢
献することに成るんだろうがな…ハアア！！』

ハスターは白いローブの男に変身し、その『何か』に掴みかかる。

『ぐっ…目的はお前…だが、襲われてるのは見ず知らずの人…お前
は見てるだけで良いのか…？』

ハスターが女性の首に巻き付いた『何か』を引っ張り、何とか気道
を確保しようとしている。死なれたらグールにされてしまうからか、
それともアイツも本能的に人を護りたいと考えるのか。

それなのに、俺は見てるだけで良いのか、俺は何をしているのか。そんなことを考えてる内にあの女の人の顔はどんどん青ざめていく。

俺の巻き添えで彼女が死ぬ。見ず知らずの人だとしても原因は俺。俺のせい。

そんなのは嫌に決まってる。何かしないと、俺がすべきことはいったい…

「おらああ!!」

すべきことなんて考える前決まっていたはずだ。俺もその『何か』を掴み思い切り引つ張る。すると木の上から『何か』の付け根が落ちてくる。よくみると付け根の辺りから人のような影が現れ、トカゲのような顔…いや、トカゲと言うよりも

「カメレオン…グール…?」

カメレオンのような顔をしたグールが現れた。ソイツはよくみると緑色のマントを羽織っている。雑魚のクセにカッコつけやがって…

『多分あのマントがグールの反応を消すための道具だ…もともとから有るカメレオンの能力との相性は抜群と言うわけだ…』

「姿を見つけたからにはもう関係ねえ話だな…そのマントと舌引きちぎって…あの人助けねえと!ハスター、ちよつと力貸してくれ!」

伸びていた何かは奴の舌。よく考えたら素手で触ってしまった。汚い。ばつちい。

しかし、引きずり落とした衝撃で、舌への力が弱まり、女性に巻き付いていた舌も若干緩みはじめた。

今あの人を助けなければ確実に俺は後悔する。人1人の命を背負って生きていけるほど俺は強い人間じゃない。

『それは、先程の質問の答えでもあるのかな…』

「そうだよ…早く行くぞ、『ビートルフォーム』だ!」

『…はあ?』

「昨日のあの姿の事だ!名前があった方が良いんだろ!」

『ふっ…微妙な名前だな…解った行くぞ!』

その言葉と共にハスターがカブトムシの形に変形し、俺の手元に収まる。

「重甲変身!」

昨日と同じ一連の動作。目の前に掲げてから腹部の中心にセットし、アーマーを形成させる。

「スティングァーブレード!!」

カブトムシ型のブレードを出現させ、思い切り舌を切り裂く。

「グキヤアアアア!」

「早く逃げて!!」

グールが痛さに苦しんでいる間に、女性に絡み付いた舌をほどく。その顔は恐怖に怯えていた。

もう二度とそんな顔は見たくない。だからこれからも戦う。自分のことも他人のことも守って後で後悔しないために。

「ハアア!!」

「グキユウウ!？」

接近して、グールの着けているマントを掴み、思い切り引き剥がす。

「これでやつと見慣れた姿になったな…」

「グキョオオ!」

少し気を抜いていたならグールの舌がまた迫ってきた。避けきれずに、素手に絡まれてしまった。

「うつ…がつ…」

逆にもう一度引きずり倒そうかと思いつ張ったが、全くびくともしていない。先程のように上手くはいかないようだ。

『やはり先程のように切るしかないのだな…』

「そう…みたいだ…なっ!」

舌を引っ張りながらも片方のスティンガーブレードで舌を切ろう

とする。しかし、

「グゴオオ!!」

「くっそ、切れねえ…うわぁ!？」

先程のように斬ろうとするが、引つ張られてバランスが取れず、ス
ティンガーブレードが上手く扱えない。それどころか、逆に引つ張
られてバランスを崩され、成す術もない。

『なんとかならないか!？』

「くっそ!!こっちの台詞だ!!」

そんなこと言ってる間にも引きずられている。引きずり回されてい
る上、両手もふさがっている為、腰のクロック・アップのスイッチ
も押せない。

『!?!いま、別の戦士のイメージともリンクした…』

「何!?!…わかった、俺の頭ン中にもだいたい使い方は伝わってき
た…」

俺の頭の中に昨日とはまた別な戦士のイメージが流れ込んできた。
胸には『S』と大きく描かれた赤いアーマー。その戦士が得意とす
る電気の攻撃。

俺はグールの舌が絡んだ手を、強く握り返す。そして、

「エレクトロ…ファイアー!!」

「ゲキイイイ!?」

俺の腕から高圧電流が舌を伝ってグールへと流れ込む。

そして、グールが痺れて動けなくなっている隙に立ち上がり、ステインガーブレードで舌を斬り離す。

「グキヤア!!」

「まだまだあ!!」

今しかチャンスはないと言わんばかりに、連続で斬撃を仕掛ける。

「グキヤアアア!!」

「うらあ!」

斬られ続けた反動で激しくグールがよろける。そのすき突き腹部を蹴り、追い討ちをかける。

『元からセンスは有ったが、更に戦いなれしてきたな...』

「出来れば慣れなくなかったけどな... 良いから決めるぞ!」

その言葉と共に走りだし、思い切りステインガーブレードをグールに向かって振り下ろす。そして、ステインガーブレードから高圧電流を流し、思い切り振り抜く。

「グキヤアアアアア!!」

抵抗出来る訳もなく、グールは斬り倒され、爆発する。

『低能なグールだったけど意外にも苦戦したな…』

「まあな…ずっとあんなのばかりなら良いけどな…」

変身を解きながらハスターに答える。

『貴様もだらしなく倒れたりしなくなっただな…』

「本当に慣れてきたな俺…まあ、その方が良いのかも知れないけどよ…」

確かにぶっ倒れなくなっただが、体への疲労感は尋常じゃない。今も軽くふらついている。

と、そんなことを言っていた時だった。一台の黒いビックスクーターが俺の隣で停止した。ボディには厳つい髑髏のエンブレムが付いている。

「（えっ…ヤンキー？ただのチンピラ？）」

外見からそう思ったが、

「あの…この辺で怪しい人見ませんでしたか…？」

「い、いや、見なかったな…」

思わず『お前だ。』と言いそうになってしまった。ソイツはフルスエイスをとって話しかけてきた。ビックスでフルスエイスかよ、とか思いながらその青年をみる。

よく見てみると…昨日グールの話をしていた青年（リア充の方）だ。怪しい人って…まさかグールのことか？

「そうですか…すみませんでした…」

青年も『見たことある人だな』と言いたげな顔でこちらに謝ってきた。かと思うと、またヘルメットを被り直す。

「……あ…おそ……みたい……ゼビオ……」

そして、確認をとるようにぶつぶつと何かを呟き、何事も無かったように直ぐに走って行ってしまった。

「何だっただ……いったい…」

『…今、微弱にだがアイツからグールの反応がした…』

「!？」

驚いて言葉にならなかった。ただの野次馬君かなんかかと思っただから尚更だ。

『それが何を意味するかは解らないが…いずれまた会うことになるかもしれないな…』

「なんなんだよ…その直感みたいな…」

正直まだ動揺しているが、そうしていったって仕方ない。溜まった疲労によりふらつきながらも帰路につく。

『お前が戦い続けるのなら何時かはぶつかり合う事になるかもしれないな…昨日の組織とやらとも…』

「そんな事まだわかんねえな…それでも戦ってやるけどな。」

一度決めてしまったことだ。もうそれを曲げるわけにはいかない。たとえ何があっても戦ってやるさ。それでみんなが守れるならそれでいい…

俺は無駄にそんな責任を感じながらとぼとぼ歩いていくのだった。

六話 決心（後書き）

…何て言うか、グダグダな展開に成ってしまいました…

取り敢えず、ハスターはこんな力も在るんだぞと言わんばかりの『エレクトロファイアー』。カブトムシ的要素の少ないストロンガーですが、腕に何か巻き付いてきたら使いたく成りません？エレクトロファイアー？
↑

と、冗談はこのくらいで、次回予告。

次回七話からは特別編と成ります。『…七話で特別編で…早くない？まだライダー同士で顔合わせあんまりしてないし…』と言う心の声は無視して、特別編です。

実はもう書き終わってはいますが、いつも通りその次の話を書いてから投稿する予定なので、悪しからず。

介入

「この部屋…大分明るくなってきた感じがしないかい…？」

黒い部屋に座る白服の青年。

「不本意だが、認るしかないな…」

黒服の青年は白服の青年と対峙するように座っていた。その二人の間には机の上に置かれたチェスの盤。

更にその上には数枚のトランプのカードが散らばっている。

「私の手札は一枚…正確にはもう一枚予備があるがな…」

そう言つて黒服の青年はスペードのスイートのQを盤の上に置いた。

「私は…きつかり3枚です…」

白服の青年はクラブのスイートのJと、ハートのスイートのJを盤の上に置く。

「もう一枚は…ジョーカーか？」

「いいえ…」

黒服の青年がそう訪ねると、白服の青年は最後の一枚を盤の上に乗せる。

しかし、そのカードには何も描かれてはおらず、真っ白なカードがそこにあつた。

「何もない…一番弱いと言っことか？」

「いえ…時には…何にでもなれると言っことです…」

白服の青年はそこにスペードのスイートとKの字を描く。それは黒服の青年が持っている予備のカードと同じ絵柄だった。

「全てのカードは時に強く…時に弱い…ジョーカーもまた然り…しかし、これは何時でも強い…使い方次第では…」

白服の青年は笑いながらカードを見せびらかす。

「ガキの考えそつな事だな…」

黒服の青年は呆れながらそう答える。

「私も混ぜてくれるかな…？」

突然声が聴こえる。それと共に部屋はピンク色に変わり、盤の上には、ピンク色に、黒くバーコードが描かれたようなカードが飛んでくる。

「お前は…」

黒服の青年は部屋の隅を見据える。すると、遠くからピンクと黒のライダージャケットを着た男が現れる。

「何故戦いの邪魔をするんです…？」

「邪魔ではない…楽しませてやるだけだ…」

白服の青年の答えに、男はそう答える。

「せいぜい楽しみに待っていてくれ…」

その言葉と共に3人は音もなく姿を消す。

机の上に置かれた幾つもの紙切れは寂しそくに放置されたままであった。

七話 使命（特別編）（前書き）

特別編ですが、通常本編でもあります。

それではスタート

七話 使命（特別編）

9月13日

午前10時00分

???

「ここは…なんの世界だ…？」

私の体を灰色のオーロラが通過する。このオーロラは異世界を渡るための世界と世界の橋。そのオーロラを通過してきた私は、先程とは別の世界に来た訳だ。

私は今まで何度もオーロラをくぐって異世界を渡り、『ある戦士』との接触を図った。

しかし、どの世界に渡っても『ある戦士』との接触ができない。

それが私の任務であるからには、それを遂行しなければならない。私はそのために造られた。

白の複眼、灰色の仮面には、まるでプレートが縦につきたてられたかのように縦の線が浮き出ており、見ようによつてはバーコードの様にも見える。そして胸には『？』とも『+』ともみてとれる交差した二本のライン。色こそ違うが、この姿は『ある戦士』、そのものである。

しかし、私は『ある戦士』のように変身前と変身後という概念はない。『ある戦士』そっくりの『ヒューマノイド』だからだ。

《ATTACK RIDE…INVISIBLE!!》

私は人間に怪しまれないようインビブルのアタックライドカードをベルト中央の『デイドライバー』に読み込ませ、体を透明にする。

「この世界こそ…『戦士…カドヤ ツカサ』の居る世界だろうか…」

そう呟いたが、その可能性は薄い。何故ならカドヤツカサの反応を全く関知しないからだ。つまりここはカドヤツカサさえも渡ったことの無い世界と思われる。

その場合私にはもう一つの仕事がある。

「…全てを破壊し…全てを繋げ…」

《Instruction content alteration
n》

今度はベルトではなく、私の体から作戦変更を知らせる音声が鳴り響く。

私のもう一つの仕事、それはこの世界の戦士と出会い、戦い、カードをライドブッカーに記録させることだ。

《Please begin the campaign》

「作戦行動を開始する…」

そう呟いて、私は歩いて行く。あては無いがこの世界の戦士を探すために…

9月13日

??時??分　グールの巣窟第六層中央

リーダービーグール

私は上位グールに混じってグール同士の会談に混じっている。
この場に居るのは

「虫種族グールよりビーグール、部下たちを含めてレギオンと名乗
っております。」

「鳥類グールより、イーグルグールのグリフォンです！」

「獣のグールよりゴートグール、ベルフェゴールです……」

「水中生物グールからシャークグール、レヴィアタンだ……」

「植物系グールのアイドル……ローズグールのハデス……」

「爬虫類属最強のワイバングール！我が名はバハムート……！」

と言う顔ぶれ。自称、他称も含めて改めて自己紹介をしたのは、こ
こにいる客人のためだ。私の『レギオン』と言う名はこの場でしか
名乗ったことはない。

「さて、異界の客人とやら……今日はどのような用事があって来られた
のだ……？」

意外と礼儀正しいバハムート殿から質問が上がった

「目的は一つ…『ディロイド』の完成…」

「その為に我らの力を借りたいとでも…？」

「はい。貴方達には囹用のグールを出して頂きたい。」

「なに…？」

「『ディロイド』の完成のためには『ハスター』…この世界の仮面ライダーを倒す必要があります。その為に邪魔な2人の赤と黒のライダーを別の場所に誘き出しておいて欲しいのです…」

「ハスター…？名前は知りませんでした、赤と黒意外の戦士と言うとあの白い奴の事でしょうか…？」

「まあ、良いんじゃないですか？目的は違っても、白い奴倒してくれるってことでしょ？」

ベルフェゴール殿とグリフォン殿は乗り気で話を進める。他の方々も『プライドか許さない』と言いたげな顔だったが、厄介者を倒してくれると言うことで、承認しているようだ。

「それでは囹のグールを手配いたそう…幸いその赤と黒の2体はグールの反応に敏感であるようだから…」

この前の技術屋の実験で解ったことらしいが、ベルゼブと赤の騎士はグールの気を発生させる装置の微弱な気にも反応したようだ。

「ありがとうございます…後はこちらで進めさせて頂きます…それでは…」

そう言い残して『リユード』と名乗った客人は灰色のオーロラの中へ消えていった。正直怪しすぎて何とも言えないが、こちらは圀のグール数体で済むのなら騙されたとしても損は少なく済むだろう。

「最初から…期待はしていませんがね…」

ハデス殿がそう呟きながら退室する。それにつられるように皆退室していく。

「…どうなることやら…」

私もらしくないことを呟きながら退室する。この後は下級グールどもに死体でも集めさせるか…

9月13日

午前10時00分 喫茶店『THE FOOL』

三沢 颯太

今日は月曜日。今日もバイト。ここまではいつもと変わらない日常。しかし、一つだけ決定的に違うことがある。

『これが貴様の言う喫茶店というやつか…』

ハスターがピアスに変形して俺の耳たぶに付いているのだ。

「黙ってろって言っただろ…」

『じゃあ人間体に戻って良いか？』

「もっとダメだ！」

いつゲールが出るか解らないから近くに居たいと言うのは解る。
だからと言って、あのローブ着たまうろつかれるのが嫌だから装飾品に変わってもらったのに…うるさいのには変わり無いようだ。

「三沢くん、何そのイカツイピアス!？」

「あつ…やっぱり変ですかねえ…?」

一番に気づいたのはマスターだ。イカツイとは言っても、黒い太めのリングが耳たぶに直接付いているだけだ。改めて言われると確かにイカツイのかもしれない。

「い…いや、結構カツコいいわよ!？猫に小判ってかんじ!」

「全然誉めてないじゃないですか!？」

「じょ…冗談よ、冗談!!」

いつもはキツイマスターだが、何故か今日は優しい。と言うより何かぎこちない、顔赤いし。風邪だろうか？

「ま、まあ良いわ、とりあえずこれ運んで!カプチーノ2つ、5番

のテーブルよ！」

「あ、はい。解りました！」

そう言われてカプチーノの乗ったトレイを運ぶ。

『ヒュ〜ヒュ〜。ほめられてるう〜』

「うるせえ黒玉。黙ってろって言ったる。」

回りに怪しまれないよう小声で答える。コイツの声は回りにも聞こえてしまうから耳元に付けたのだが、俺への被害が尋常じゃない。

『誰のお陰で誉められてると思っただよ〜』

「てゆうか、何でそんなに喋り方軽くなってんだよ？」

『お前に触れたことで感化されたようだな…気を付けないと性格までお前そつくりになるかもな…』

「それはマジで勘弁な…」

指摘されたせいとか、今は前の喋り方に戻っていた。だが、本当に性格まで一緒に成ったとしたら末恐ろしい。

「お待たせいたしました。エスプレッソになります。」

「ありがとね〜颯ちゃん。」

平日のこんな時間に居るのはだいたい常連の女性客くらいだ。

「あれ！？何そのピアス！？」

このお客は確かマスターの級友『岬 奏』。彼女も真っ先にこのピアスに食い付いた…そんなに目立つのか？

「ああ…貰い物です…」

「えっ！？彼女！？颯ちゃんやるっ…」

「違っ！いたっ！？ちよつと！？」

別に彼女とか居ないし。ハスター引つ張るの止めて欲しい。

『キャー。拐われる〜。』

「何をイチヤイチヤしとるか貴様等…」

その時ハスターの小ネタを遮るように鬼…いや、マスターの声が聞こえる。

「や、いやね、未智…冗談に決まってるじゃない…ね、颯ちゃん？」

「は…はい…」

運が悪ければ俺達に未来はない…グールより恐ろしい障害に出くわした…

「まあ良いわ…今回だけは許してあげる…」

た…助かった…岬さんも安堵の表情を浮かべている

「ふひひ…未智ってば嫉妬してる…」

「何か言った!？」

「い、いえ!」

岬さんが小声で呟くのをマスターは聞き漏らさなかった。てゆーか、何の嫉妬？

『…グールとはまた別のオーラ…何者だ…』

「それは流石に失礼だよ…」

『違う、彼女ではない。外に何かが…!!』

「キャア!!」

と言い終わるより早く、少し遠くで爆発音が聞こえた。驚いたマスターが悲鳴をあげる。

『早く行くぞ!!』

「いてて!!耳引つ張んな!!」

ハスターが耳たぶごと俺を引っ張ろうとする。とても奇妙な光景だが皆爆発音に気をとられているため、見られずにはすんだ。

「俺、ちょっと見てきます!!」

「え！？危ないわよ、三沢君！？」

マスターの制止を振り切って外へ駆け出す。
すると、そこには3体の異形が立っていた。

「俺はインパクターロギア…インパクター星人の誇りにかけて…貴様を始末する…」

「アバレキラーだ…せいぜいときめかせてくれよ…？」

「ぐっ…」

名乗りをあげた2体は余裕な態度で、もう1体の灰色の異形を見据える。

『あの三体から…異世界の揺らぎが見える…』

「異世界の揺らぎ？」

『詳しい説明は後だ…とにかく、あの2体から邪気を感じる…行くぞ！…』

そう言っただけでマスターが耳たぶから腰へ移動する。

「あれもグールの一種なのか？全く雰囲気違うけど？」

『確かに、明らかにグールでは無い…しかし、この状況を放置する訳には行かないだろう…？』

「仕方ねえか…変身!!」

その掛け声と共に俺の姿が白い戦士へと変わる。

「貴様…この世界の仮面ライダーってやつか…?」

白い方が俺の存在に気づき、俺へと話しかける。アイツらの口から仮面ライダーと言う言葉が出たのは意外だった。

「よく解らないけど…」そう、俺は仮面ライダーハスターだ」っておい!!」

『（今はそう名乗っておけ…その方が良さそうだ…）』

どう返したら良いかと戸惑っていたら、ハスターが勝手に『仮面ライダーハスター』と名乗ってしまった。そう名乗ることがどう良いかは解らないが、取り敢えず今はハスターに従う。

「…君が…この世界の仮面ライダー…ハスター…」

すると次は灰色の戦士がコチラへ話しかけてくる。『この世界』とか、ハスターの言う『異世界』とかはよく解らないが、コイツが2人の悪党と戦っていることは大体解った。

「なんか…そう言うことらしいな…」

「…私はディロイド…今はコイツらを追い返すのを手伝って欲しい…」

「解ってる…最初からそのつもりだ!!」

取り敢えず、変身した以上戦わなければなるまい…このまま逃げるのも気が引けるし。

「ここが旅の終わりだ！デイドロイド！！」

「…こっちの方がときめかせてくれそうだ…はああ！！」

「！？…速っ…ぐあっ！？」

そう言つて、黒い方はデイドロイド目掛けて、銃撃を放つ。デイドロイドもファイルのような形の銃で応戦する。

何処と無く古代の鳥…恐竜を彷彿とさせる白い方は、俺目掛けて短剣のようなものを片手に襲い掛かってくる。俺は咄嗟に避けようとするが、速すぎて動きを見切ることが出来ない。

「ぬあっ！！」

「温いぜ…うらあ！」

「があっ！？」

反撃すべく装甲の薄い腹目掛けてボディブローを放つ。しかし、それでも全く効いている様子はなく、逆に殴り返されてしまう。

「どうしたデイドロイド、尊程ではないな…」

一方のデイドロイドも追い込まれ始め、防御一戦のように見える。

「ぐっつ…」

《K A M E N R I D E… K A B U T O…!》

黒い方が喋っている隙に、デイドロイドは何やらカードの様なものをベルトに装填する。

すると、そこにはデイドロイドではなく、そこには初めてビートルフォームに成ったときに、俺の頭に流れ込んできた赤いカブトムシの戦士の姿へと姿を変える。

「ハスター！あれ…」

『ああ…俺たちと似た能力…』

「よそ見るなよ？」

デイドロイドだけに気をとられていた。隙をつかれ、目の前の白い奴がブレードを構え急接近してくる。更なる攻撃を許してしまった。

「ぬあああ…!」

「ダメだ…全然ときめかないねえ…」

白い方はそんな事を言いながらブレードをペンのように持ち変える。

「何をする気か知らないが…早いとこビートルフォームに…」

『無理だ…あの力…クロックアップしてライダーブレイクを使っても恐らく止めには…』

確かに、結構本気で放った筈のボディブローでもビクともしなか

った…

「独りで喋ってないで楽しませろよ？」

そう言っただけに『↓』という形の矢印を幾つも描いていく。すると、その全てが俺とディロイド目掛けて飛んでくる。

「ぬぁぁ！？」

「うおっ！？」

予測できない攻撃に戸惑いながら俺達は膝を付く。

「俺の獲物までとるな…」

「俺の獲物がつまらないんだ…それともお前が楽しませてくれるのか…？」

白い方と黒い方が喧嘩を始めそうな勢いになる。

「ハスター…今の内に他世界とか何とかの戦士と…」

『解っている、今『龍』のイメージとリンクした…』

そう言いながらハスターが、龍のエンブレムの付いた黒いカードケースのようなものに変形し、俺の手元に入ってくる。

その瞬間に、前と同じく他世界で戦っていると言う戦士のイメージが流れ込んでくる。

一つは黒い炎と黒い龍を纏いながら戦う龍騎士、もう一つは武器を

斧や弓のように変化させながら巧みに戦う黒の闘士だった。

龍騎士はカードデッキを眼前に突き出して、変身していた。それと同じような動作を真似てみると、腰に龍騎士と同じようなベルトが出現する。

そして、闘士は腰のホルダーにある鍵を取りだしこう叫んで変身していた…

「リュウジンキー…発動！」

《チェンジ・ザンリュウジン》

「斬龍…変身！！」

俺はその掛け声と共にカードデッキの龍のエンブレムに鍵を差し込み、ベルトにそのカードデッキを差し込む。すると、鏡から3つの鏡像のが回転しながら俺の身体に重なり、龍騎士の身体を基調に、闘士の装甲が形成される。

「ほう…今度こそは…ときめかせてくれるのか…！？」

仲間割れをして、黒い奴を睨んでいた白い方だったが、またこちらに興味を持ち始めたらしい。

「『恐竜』対『龍』…つてのも結構シユールだなあ…！！」

《SWORD VENT》

シユールの使い方間違えた気がするが、どうでも良いか。腕に着いた龍の顔のガントレットの上部をスライドさせ、ベルトから引き抜いたカードを差し込む。すると、ガントレットの側面から二本の長い斧が垂直に伸びてくる。

『ソードかどうか微妙な所だが…これならいけそうだな…』

「あれ！？そつちが喋るの！？」

俺はそのままガントレットを外し、一本の剣のように構える。

すると、カードデッキに変化した筈のハスターの声がガントレットの龍の顔から聞こえて少し驚く。

俺の変身を見たデイロイドも流石に驚いていたが、直ぐ我に帰り、カードを取り出す。

《ATTACK RIDE…CLOCK UP!》

その音声と共にデイロイドの姿が見えなくなり、代わりに黒い奴の身体が無数の攻撃で弾き飛ばされた。

『俺たちも行くぞ！』

「ああ！」

そう言い放って、白い奴との間合いを詰め、剣のように構えたガントレットから伸びた斧を降り下ろす。

「ぬああ！？」

白い奴はブレードで受け止めるが、直ぐに押し負け、後退する。

「すげえ…この力…」

『あの白い方もそうだが…単純な攻撃力だけではないな…』

そして、もう一度構え直し、白い方へ斬りかかる。

「最初からそうやって楽しませてくれよ!!」

白い方の声は、まるで戦いを楽しむかのようなうだった。ブレードをペンのように持ち変え、空中に鎖を書き、斧をとめる。

「ぬう…ぐあああ!」

力押ししようとするが、白い方からみれば俺の脇はがら空き。隙を突かれブレードで斬られ、今度は逆に跳ね返される。

「なんだ…姿が変わっても結局その程度か？」

「くっそ…なっ!？」

白い奴に挑発され、もう一度斬りかかるうとする。しかし、もう一度鎖を書かれ、空中で止められてしまう。

「同じ手で来たら同じ手で負けるだろ？ふっつ。」

「くっそ!!」

『落ち着け、別のカードだ!』

そう言われて、カードをデッキから引き出し、鎖で止められたガンレットに読み込ませる。

《ADVENT》

すると、ガントレットから音声がり、近くにあったガラスの鏡面から鴉の様な黒い翼の生えた龍、名付けるなら『ドラグシャドウ』が白い奴目掛けて飛んでいった。

「ぐう！？」

「あれは…ドラグブラッカー…いや、違う…」

白い奴は避けきれずに吹き飛ぶ。それと同時に鎖も消え、自由を取り戻す。

クロックアップ空間から戻ってきて、黒い奴と戦っていたデイドロイドも、その光景を見て驚く。

「よそ見をするな！！」

「ぬう…もたもたしてられないな…」

《FINAL ATTACK RIDE…DE・DE・DE・DE
ROID！！》

よそ見をしている間に銃撃を食らい、元の姿に戻るディガルドだったが、ベルトにカードを読み込ませ、黒い奴とデイドロイドの間を10枚のカードのシルエットが繋ぐ。しかし、色が付いているのは7枚だけで、残りの3枚は消えてしまった。

「フツ…こんなことなら…トップゲイラーも用意しておけばよかったな…ハハハッ…」

白い方はまた戦いを楽しむかのように笑う。もう不気味と言うより恐怖に近い感情さえ生まれそうになる。

『俺たちも決めるぞ…ホルダーの最後の鍵だ!!』

「解ってる…ファイナルキー、発動!!」

《ファイナルクラッシュ》

俺は取り出した鍵をエンブレムではなく、ガントレットの龍の顔に差し込み、最後の技を発動させる。

「こんな台詞言うのは滅茶苦茶ハズいけどな…」

『良いから早くしろ!!』

「くっ…魔弾龍！^{ハスター}獣王！^{ミラーモンスター}闘士（仮面ライダー）！3つの力が今一つとなる!!」

その台詞を言うと共に、龍騎士が必殺技の前にとっていた独特の構えをとる。すると、マスクの奥の複眼とガントレット（ハスター）とドラグシャドウの目が紅く光り、俺は空中に飛び上がる。

「三位一体！ドラゴンライダー乱舞!!」

「ハアアアア!!」

後ろにいるドラグシャドウが俺の背中にくっつき、俺は斧を構える。それと同時にデイドロイドも飛び上がり、キックの構えをとり、俺たちは各々の敵に向かって必殺技を放つ。

「ぐああああ!!」

2つの絶叫が聞こえた。爆風でその姿は見えない。完全に撃破してしまったのだろうか。

そんなことを考えていたら、一枚の大きな灰色をした透明なプレートが爆風の中を横切った。

「な…何なんだよ!？」

『先程言った異世界の揺らぎ…異世界を渡る扉だ…どうやら逃げられたらしい…』

「異世界…扉？」

『取り敢えず…追い返せただけ良しとするか…』

そう言いながらハスターは変身を解き、俺の耳へピアスとして戻っていった。

デイロイドは何事も無かったかのようにその場にたち尽くしている…こいつは…本当に何者なんだ…？

七話 使命（特別編）（後書き）

さて、今回のハスターの新フォーム。

その名はコクリュウフォーム！！

…まんまでしたね…リュウガは解りやすかった筈ですが、魔弾戦記リュウケンドーから、リュウジンオーは解って頂けましたかね…？
実はリュウジンオーはドクロとかのコンセプトらしいですけど、アバレキラーと対立させるんで、滅茶苦茶強いヤツにしようと思って使いました（笑）

まあ、新年一発目からお祭り騒ぎしすぎましたね、書いてたの先々月なんですけど（笑）

取り敢えず、この話がディケイド的世界観で進んでいること、アバレキラーとロギアは色んな世界があると云う証明にもなれば良かったです。

次回、ディロイド編後半に御期待下さい。

八話 旅路（特別編）（前書き）

めちやくちや過ぎる特別編…後編始まります。

八話 旅路（特別編）

9月13日

午前10時30分 廃墟

神田 孝高、孤山 雅飛

彼らは今…これまで見たことの無い『グールの群れ』と出くわしている。そして、

「また会ったね…赤い戦士の…」

「デインだ…お前は…」

「ベルゼビオ…」

彼等が以前出会った時のように、共にグールを相手にしている。しかし、前回のように敵は一体ではない。『群れ』だ。

『神田…今回もその黒いのは人間に手え出そうとするまでほっとけ…ソイツに人間の心があると信じとけ…』

神田が晴崎から忠告を受ける。もとよりベルゼビオと戦う気はないようだが。

「しかし数が多い…」

「でも…あいつら下級のその下。死体拾い専用だね…」

「それなら…さっさと片付けるぞ!…」

彼等は知らない。そのグール達が足止め用の罠であることを…

そして、隣にるのがかつての親友で有ることを…

彼等は知る由もなかった…

9月13日

午前10時30分 道端

三沢 颯太

「…デイロイド…だったな。お前は…つか、お前等はいったい…」
何と話せば良いか解らなかったが取り敢えず一番聞きたいことから聞いた。

「私は…『デイケイド・カドヤツカサ』を探すため、そして、沢山のカメンライドカードを探すため世界を渡っている…通りすがりの仮面ライダーだ…」

「…変な異名までついてんのか…」

『今のはそれを邪魔する刺客と言った所か…』

「でも…何のためにその邪魔を？そもそも何のために…カドヤツカサって人を探してるんだ？」

「解らない…何故私にそう命令されているかすらも。だが、私はそう命令されているんだ。」

声色一つ変えずにディロイドはそう答える。

「私は君と共に戦い…君のカメンライドカードを手にする。それが私の『この世界』での仕事。それだけだ。」

「意味解んねえ奴だな…それに、これからもあんな強い奴とも戦わなきゃ成んないのか…？」

「すまない…君には君のすべき事があるのに…」

「全くだ…つか、お前いつまでそのカッコで居る気だよ？」

何時までも灰色の鎧を纏っているディロイドに疑問を投げ掛ける。

「私は…産まれた時からこの姿だ…」

「…そうかよ…」

話がブツ飛びすぎて何とも言えなかった。特撮的に言えばロボットか何かの類いなのか？

『しかし、ふに落ちんな…その命令をしたのはいったい誰だ…？』

「それは私の製作者…今は何処に居るのか「ご機嫌よう、私がディロイドの制作者のリユードだ。」…リユード様!？」

「久しぶりだな…ディロイドよ…」

いきなり灰色のオーロラが現れたかと思うと、そこから灰色のコートの男が現れ、急に話しに割って入ってきた。

製作者と言われているのを聞く限り、やはりデイドロイドはロボットやマシンの類いなのだろうか。

「普通に出て来てんじゃねえか!？」

「いや…私はこの命を受けたとき以来会ったことは一度も…」

『リユードと言ったか…貴様は何故デイドロイドに世界を渡らせる…?』

ハスターさんは俺等を無視して『リユード』と名乗る男に問いかける。

「それは簡単、デイドロイドを完成させるためだ。」

「私の…完成…?」

「それと『カドヤツカサ』とは何の関係があんだよ?」

「ふっ…それは企業秘密ってやつさ。」

「…っっ…」

どうもコイツとは馬が合わなそうだ。喋ってて腹がたつ。

「しかしリユード様…貴方が直々に私に会いに来るとは…いったい何のご用ですか…?」

「それは簡単、君のカードの集まり具合を見に来たのさ。」

そう言つて、ディロイドの腰に付いたファイルのようなものを奪い取る。

「ふん…ディケイドやディエンドと繋がっていないわりには結構な早さで集まっているな…」

ファイルに入ったカードを確認しながらリユードは呟く。

『貴様は…ディロイドを完成させてどうするつもりなのだ…?』

「それは少し難しい質問だ…それは、もう一つ別の命令をディロイドに頼みたいからだ…」

「別の…命令?」

思わず間の抜けた声で聞き返してしまった。

「そう、別の命令。それはちょっとだけ厄介だね…」

…この世界にいるハスターっていう『仮面ライダー』を倒してもらいたいんだ…」

…急に寒気がした。リユードの顔がさっきとうって変わって恐ろしく…何かを秘めた表情になる。

『私を倒すだと…? いったい何故?』

「それは…また企業秘密さ…!」

《Instruction content alteration》
n》

「うっ…があ!？」

突然デイドロイドの体から電子音声が鳴り響いたかと思うと、デイドロイドの動きが一旦完全に停止する。

「標的変更…仮面ライダーハスター…」
《Please begin the campaign》

「じゃ、私はその辺から見守らせていただきますよ」

「…任務…了解…」

リユードはデイドロイドにファイルを手渡し、その場から離れる。デイドロイドはそのファイルを剣のように変形させる。

『不味い…颯太、行けるか…?』

「正直、さっき変身したばかりで無理くせえけど…やるしかないだろ…!!」

そう答えると、ピアスに変形していたハスターがベルトの形に変形する。

「変身!!」

その掛け声で俺の体は白い戦士へと変身する。

「標的を確認…破壊する…!!」

そう言い放つと、構えた剣をこちらに向かって降り下ろしてくる。

「のわぁ!?!」

『どうやら本気のような…』

「はぁぁ!」

身を屈めながら何とかかわす。しかし、相変わらずディロイドは斬撃を止めようとしない。

「ふんっ!?!」

「ぬりやぁぁ!?!」

2 撃目も転がりながらかわし、そのまま後ろからパンチを食らわす。

「うおお!?!」

「…ロボットでもやられるとき声出すんだな…はぁ!?!」

よろけながらも迫ってくるディロイドに、冗談混じりで蹴りを食らわす。

「がぁ!?!」

「まだまだぁ!」

よろけるディロイドに、そのままもう一度土手っ腹に蹴りを食らわ

す。

「ぐうっ…」

デイドロイドは避けきれずにモロに食らっている。

しかし、おかしい。ロボットとは言え、向こうの方が数々の異世界とやらで戦闘経験を積んでいる筈なのに、ド素人の俺がこれ程攻め込めるもんなのか？

「あちゃー、これじゃ完成しても結局デイドロイドじゃあハスターに敵うレベルにはならないな…」

「どういう事だ…？」

「それはそのままの意味さ。デイドロイドが弱いんじゃない、君が強すぎるんだ…僕でも君には敵わないさ…」

『なら…一度戦ってみるか？何時まで見物客でいるつもりだ？…まあ、もともと世界の放浪者と戦う義理はないがな…』

「そんなこと言わないでよ…僕だって直属の『駒』なんだからさ…」

『なっ…！？』

「ハスター！気い抜くな！」

「はああ！」

デイドロイドがもう一度斬撃を仕掛けてくる。

しかし、先ほどと同じ太刀筋、簡単に避けられ…

「ふっ…ああ!？」

「あーあ、それはハスターが気を抜くから悪いと思うな。」

少し体の…ハスターの反応が遅れ、太刀がかすった。
つか、ハスターが動揺した『駒』っていたい…

「それでも掠り傷くらいで済むんだから、やっぱりハスターには敵わないな…」

『貴様が…『駒』だと…一体誰の…?』

「それはやっぱり企業秘密かな…まあ、取り敢えずディロイドは敵わないって解ったから作戦変更。ディロイド、もう下がって。」

《Strategy discontinuance》

「がっ………」

電子音声と共にディロイドの動きが止まる。

「ハスター…何なんだよ『駒』っていつたい…」

『それは…まだ教えられん…それより奴は…!』

その言葉を聞くと共に、リユードの方を見る。

「僕じゃディロイドには敵わない…しかし…これならどうか…なっ
!…」

すると、リユードはそう言ってデイドロイドの腹にあるベルトをもぎ取った。

「あ…が…」

「な…何なんだよ…ありゃ…」

ベルトが取られると同時に、デイドロイドの体の装甲が取れいく。

すると、そこから見たのは白いコート…茶色い頭髮…そして薄橙の肌…

「ただの…人間…？」

「…そう。人間としての姿は邪魔だから、デイドロイドには産まれた時からあの姿なんて教えてたけど

…本当はちょこつと機械的に改造して造った人間…それがデイドロイド…」

「てめえ…それじゃデイドロイドもグールも大差無いじゃねえかつ！？」

「気付いちゃった…？でも、あんな粗悪な量産品と一緒にしないでよ…」

そう呟きながらリユードは奪い取ったベルトを腰に巻き付ける。そして、何処から取り出したかも解らないカードを装填し

「変…身…」

《KAMEN RIDE…D・RUDE!!》

緑の顔に紫のラインの不気味なデイルイド…いや、気色悪い怪人に変身する。

「僕のデイルイド…いや、『デイルイド』はこんなに出来が良いんだからね…!!」

「はや…ぐあ!？」

リユードはそう言い終わるが早いか、素早い動きで接近し、俺の首に掴み掛かる。

「ハスターも黙ってないで何か言ったら？」

「貴様…本当に何が目的だ…？」

「良いよ…企業秘密のつもりだったけど…それは教えてあげる…」

「ぐはあ…!!」

その言葉とともに、俺の体は投げ捨てられ、あっさりとハスターの変身が解ける。

「君たちを倒せばグル共の好感を得られるだろ？」

…後は仲間に成った『ふり』でもしてれば『マザー・バアル』に近付くのは容易いさ…マザー・バアルは倒してあげる…安心してくれて良いよ…」

『ゲームに勝利するのが目的と言うことか…』

「訳解んねえこと…ごちゃごちゃ言ってるじゃねえ…」

俺はなんとか立ち上がり、リユード…いや、『ディリユード』を睨む。

「何でそんな力があんのに…ディロイドなんて作りやがったんだ…！？」

「うーん、それは違う。この力を得るためにディロイドを作ったのさ…世界を回らせて沢山の力を貯めさせるため…まあ、結局ディロイドは完成しなかったけど、この力なら…十分に君達を破壊できるのさ…」

「じゃあ…何なんだよ…『カドヤツカサ』ってのは…」

「それは簡単。ディロイドの旅の目的を創ってあげただけさ。世界を旅する『ディケイド・カドヤツカサ』に出会うように命令しておけば、ディロイドもそれを探して世界を旅する。

…まあ、実際には出会わないように行き先をちよつとづつ細工して、いろんな戦士を呼び出して訓練させたりしてたけどね…

…目的が無いと旅をしないなんて…力を集めるだけの器の癖に生意気だよな…」

「…てめえ…！！」

無意識のうちに殴り掛かっていた。今までにこんなに腹がたったことは有ったろうか。無気力の俺が誰かの為に戦うことなんて有っただろうか。

「はい、残念。」

「ぐあああ!!」

しかし、拳は弾かれ俺の体も殴り飛ばされる。ヤバい…あばら何本かやられたかも…

「しかし生意気だな…君も…ハスターの前に君から殺そうか…」

不味い。抵抗出来ない。死ぬ。死ぬ。死ぬ。頭ん中それしか浮かんでこねえ…

「ハ…スター…」

俺はそう呟こうとした。しかし、聞こえたのは俺の声ではなかった。じゃあ…いったい誰が…

「ハ…スター…私が戦う…!!」

『デイドロイド!?お前…』

それは起き上がったデイドロイドの声だった。

「このまま…寝てるわけにはいかないのだ…」

『しかし…』

「早く…しろ!!」

『…了解した!!…その代わり、半分しか貸せんぞ!?!』

「十分だ…!!」

そう言つてハスターは、少しずつデイドロイドの腹に巻き付き、デイドロイドのベルトの形に変形する。

「ベルト…2人分も作れんのか…?」

『初めて試した…デイドロイドの方はお前のように他世界とはリンク出来ないようだしな…』

「デイドロイド…それは僕への反逆かな…?」

デイドロイドが俺から離れ、デイドロイドを睨み付ける。

「この体に戻つて少しだけ思い出した…何故かは知らないが…私はデイドロイド…貴様を恨んでいた…」

そう言い放つて、デイドロイドは何処からかカード取り出し目の前に翳す。

「…恨むつて言うのは…感情がある証…人間である証だろ…?何故かなんて聞くまでもないだろ…!!」

俺も自然と声を上げていた。デイドロイドに感化されていたのかもしれない。

「そうだな…俺は人間で…」

…通りすがりの仮面ライダーだ…!!」

「うるさい…生意気だ…まとめて叩き潰してやる!!」

デイルリウドが怒鳴り散らしながらこちらへ向かってくる。
奴の本性が見えて来ている。野心丸出しだ。

「「変身!!」」

《K A M E N R I D E… D E R O I D!!》

デイルロイドはカードを装填し、7つの影がその体に重なる。

俺も何時ものようにポーズを取り、白の戦士に変身する。

「デイメンションキックの時もそうだったが…やはりお前は不完全…『10』の力を出すことが出来ない!!」

デイルリウドはそのまま俺たちに殴りかかる。

「ぐっ…だったらどうした!?俺たち2人なら…『10』以上の力に出来るんだよ!!」

「ああ…そうだな!!」

しかし、俺たちは殴りかかるデイルリウドの拳を、2人の拳で相殺…いや、弾き返した。

「むああ!?!」

『凄まじい…これこそが人間の真の強さと言うことが…』

「そう言うこつた!!…ぐああ!?!」

カッコつけてみたが、先ほどのあばらや身体中の痛みがじわじわ襲ってくる。

「くっ…死に損ない共のくせに…デイドロイド！作戦中止だと言ったろうー！」

「があ…！？」

デリリユードがデイドロイドに作戦中止を叫ぶ。
するとデイドロイドは苦しそうに頭を抱えて苦しみだした。命令に必死に抗おうとしている。

「この期に及んで…デイドロイドに…俺たちにやられるのが怖いだけじゃねえのか…！？」

「なんだと…！？」

「デイドロイド！お前もいつまで迷ってたんだ！？
あんな奴の命令聞かなくて良いんだよ！！」

「むああ…！！」

デイドロイドは徐々に体勢を建て直しはじめる

「俺もお前と会ったばかりだから、お前のこと詳しく知ってる訳じゃない…だけど、これだけは解る。

お前にはお前の歩む道、お前のその体みたいに灰色に塗られたつまらない道じゃなくて、『虹色』のお前が歩む道がある筈なんだよ！！」

「いい加減に黙れええ!!」

俺の言葉を遮るように、ディリユードが腰のファイルを変形させた銃で俺たちに攻撃してくる。
しかし、

「うおおおお!!」

ディロイドが腰のファイルを剣に変形させ、攻撃を跳ね返す。その動きは俺と戦ったときよりも素早く、鮮やかだった。

「私にも詳しくは解らない…しかし、私の歩む道…それはハスターを倒すことなんかじゃない…お前の野望を止めることからだ!!」

ディロイドが剣先をディリユードに向け、そう宣言する。その姿は今までテレビで見してきた『仮面ライダー』そのものだった。

『颯太、いま『虹』のイメージとリンクした…これをディロイドに…!!』

「!?!?…解った、受けとれ!ディロイド!!」

そう言つて、ハスターがベルトから弾き出した虹色に光る何かを、ディロイドに向かって投げ渡す。その何かの使い方が解ったのか、ディロイドはベルトを取り外し、その何かをベルトの代わりに取り付け、もとのベルトを右腰に付ける。すると、

《FINAL KAMEN RIDER…DEROIDD!!》

眩い七色の光がベルトから輝きだし、胸の装甲が拡張され、そこには七枚のカードが貼られている。ベルトの光が収まって、身体は灰色ではなく、ランダムに七色の光を放っている。

「レインボー…フォーム…？」

「なんだそれは…僕も知らないぞ！？」

『人間様の奇跡と言うものらしい…その力、とくと味わうがいい！』

「らああ…！」

そのままデロイドは駆け出し、ディリユードに向かって思い切り殴りかかる。

「ぬああ…！」

「すげえ…」

「まだまだだ…！」

ディリユードは避けきれずに、拳をモロに食らう。俺が感心している内に、デロイドはディリユードに更に殴りかかる。

「ぬ…ぐああ…！」

『お前も感心している場合ではない…！とどめに入る準備だ…！』

「とどめって…いつたい…」

《FINAL FORM RIDE…HA・HA・HA・HAST
ER!!》

デイドロイドが何かのカードをセットした。

「ちよつとくすぐったいそうだが…我慢してくれ…」

「ふがああ!？」

デイドロイドがいつの間にか俺の背後に回り、俺の背中に手を突っ込んだ。

なんとも言えない感覚と共に、俺の身体は白い大きな杖に変形してしまった。

『ハ…ハスター…? な…なんだこれえ!？』

『これが…デイドロイドの力…『ハスターワンド』!!』

驚く俺たちを他所に、デリリユードも何かのカードをベルトに装填する。

「もう…いい加減に壊してやる…!!」

《ATTACK RIDE…SLASH!!》

ファイルを剣に変形させ、こちらに向かって思い切り降り下ろしてくる。

「効かん!!」

『うおお！？』

デイドロイドは俺を振り回して、その剣を止める。向こうとしてはかなり本気だったのだろうが、デイドロイドは至って余裕。捕まれてる俺がそう思っただからきつとそれは確かだ。

「こんのおー！」

《ATTACK RIDE…BLAST!!》

今度は、ファイルを銃に変形させ、何発もの銃撃を放ってくる。

「効かないと言っているー!!」

しかし、何発撃とうと、デイドロイドは華麗なロッド…俺捌きで銃撃をことごとく弾き返す。

「なぜ…何処にそんな力がある!?!」

『お前には無い…愛とか友情とか…人間らしい心に有るのかもなあ
!?!』

「黙れええ!!」

『自分から聞いておいて…相当焦っているな…
デイドロイド、次で決めるぞ!!』

「ああ…もう終わりにしよう…マスターリユード!!」
《FINAL ATTACK RIDE…HA・HA・HA・HA
STER!!》

デイルロイドが最後のカードをベルトにセットする。そして、電子音が鳴り響くと、俺の身体は必殺技を放つ時のように、緑色に光り始める。

「今更マスターなどと…虫酸が走るんだよ!」

《FINAL ATTACK RIDE…DE・DE・DE・DE
- RUDE!-!》

デイルリユードも最後のカードをベルトにセットし、俺達とデイルリユードを幾つものカードシルエットが繋ぐ。

「うおおおお!」

「はああああ!」

デイルリユードは跳躍し、幾つものカードシルエットを潜ってキックを放ってくる。デイルロイドは杖になった俺を思い切り降り抜く。

「デイルロイド・リンカー
「DRDDL!」」

その刹那、俺達は同じように技の名前を叫んでいた。何故かその名前が頭の中に浮かんできたのだ。

「うううう!?!…ぐあああああ!?!」

俺達はデイルリユードのキックを弾き返す。デイルリユードは吹き飛びながら断末魔の声をあげながら、爆発した。

「うおっと…終わったのか…?」

俺はデイドロイドの手から離れ、もとの姿に戻りながら着地し…変身を解く。

「ああ…やつとな…」

《Functus officio》

デイドロイドの体から電子音声が鳴り響く。

「任務完了だそうだ…」

デイドロイドも変身をしたしながら音声の意味を俺に伝える。デイドロイドを変身させたハスターの分身ももとのハスターの基へ戻っていく。

「これから…お前は何をするんだ…？」

「君が言ったんだろう？私には私の歩む道がある…」

デイドロイドが嬉しそうで、どこか寂しそうな顔で答える。

「レインボーフォーム…あの姿はディケイドが力を借りている10人の戦士とは別の、7人の戦士の力を借りていた…だから、そういった等に出会ったために旅を続ける…」

「そうか…」

ディロイドはディリユードが爆発した跡からベルトを拾い上げる。

『しかし…私の力なしではレインボーフォームには…』

「君がリンクしたってことは、異世界の何処かに存在するんだろう…?」

『確かにそうだが…』

「それを探すのを含めて、私は旅を続ける…力を借してくれた戦士と会ってどうするかは…それから決める。」

ディロイドは何かを決意したような顔をしている。彼の歩む道はもう決まったようだ。

「そうか…じゃあ、ここでお別れだな、ディロ…そいえば、お前の本当の名前って…」

「わからない…これからは『ロイド』とでも名乗って行くさ…」

そういうと、ロイドの目の前に灰色のオーロラが現れる。

「じゃあな…ロイド…」

そのオーロラは一瞬でロイドを異世界に連れて行ってしまった。

「ハスター…」

『…『駒』のことは「今話せないなら別に良いぜ。」…』

「もう今日は疲れた…勢いだけで色んなこと喋ったし…あばらは少しいてえし…」

『取り敢えず…これからもグール以外の敵が出てきたときは…』

「解ってるよ…さて、今日は帰って寝るか！」

そう言っただけはいつもの帰り道にたどり着く…しかし…何か忘れてるような…

「マスターリユード…か…マスター…」

マスター…一瞬、俺の体の動きが止まる。

『ピーピロピロリロリ…』

…この着歌は…確か昨日辺り佐久間に登録したはず…恐らく安全…
『ピッ』

『もしもし…？三沢くん？何処まで君は野次馬に行っちゃったのかな…？』

「！？…あ…あの…」

佐久間…じゃない…このプレッシャーは…

『取り敢えずちゃんと電話出たってことは…何かの事件とかには巻き込まれてないのね…』

「は…はい…」

『三沢くんは…今からどう…したいのかな…？』

「い、今すぐ店に戻りたいです、はい！！」

『ふん、解ったわ。それじゃ…3分以内に戻ってきなさい…』

「そ、それはさすがに無理で…『ガチャッ！！…ツーツー…』」

電話は切られた。マスター葉山は切れた。賽は投げられた。携帯には佐久間から『ゴメン止められなかった』と書かれたメールが送られてきた。

「ハスターさん…チャリかバイクに変形出来ませんかね…？」

『無理だな…』

その言葉を聞くと、俺は走り出した。

『スケートボードくらいになら変わってやるぞ…』

もう無視して走った。今から店まで走ればちょうど3〜4分。やってやろうじゃないか。こうなったら意地だ。

「うあああああ！！」

『大声を出すな、みつともない。』

構わず走った。取り敢えず全力を出して走ってみたかった。

俺は清々しい気分と共に、マスターのプレッシャーで緊張が止まら

ない。それでも走りきってやるさ。
これが、きっと俺の歩む道だから。

八話 旅路（特別編）（後書き）

いかがでしたでしょうか、ディロイド編。『仮面ライダーハスター』内では終了しましたが、これからもディロイドの旅は続いて行きます。

…はい、つまりは何時の日かディロイドで続編を書く予定でいます。ハスターとの同時進行は無理かもしれませんが、何時の日か必ず書きたいと思います。

さて、そして今回『駒』と『ゲーム』と言う単語が出てきました。勘の良い方は、そろそろ3話おきくらいに出てくる青年たちの言葉の意味もわかってきたのではないかなあと思います。

…え？最初からバレバレ？…それはすいませんでした（笑）

ともかく、次回はやっと3人の仮面ライダーが合流して、強敵と戦って行きます！

次回も2〜3話構成のつもりです。それではこの辺で（）ノシ

切り札

ピンクに染まっていた部屋がまた薄暗い黒に戻る。

「少しは楽しんでいただけたかな…？」

ピンクと黒のジャケットを着た男は白衣服の青年に問う。

「僕は結構楽しめたよ…」

「俺は楽しめな「君には聞いていないよ」…」

白衣服の青年はそう答えるが、黒衣服の青年が答えようとすると、ジャケットの男は黒い青年を睨み付け、言葉を遮る。

「…私はやはり嫌われているようだな…」

「君は世界の嫌われ物さ…このまま僕の駒で仕留めてあげようか…？」

ジャケットの男は睨みながらそう呟く。

「…でも結局、君の駒は僕の駒としか戦っていなかったよね…他の世界の駒まで呼んで…」

白衣服の青年はそう答える。

「いやいや…アレは借り物の駒さ…直属の駒だなんて勘違いして自慢してたけどね…」

ジャケットの男はポケットに入っていた黒ずんだカードを床に捨てる。

「成る程…『アイツ』からの借り物か…」

「君の駒は嫌いだ…仕留めてやろうか何て聞いたけど…本当は戦いたくもない…だからちようどいい敵役の駒を借りてきたのさ…」

ジャケットの男は黒い服の青年にそう答える。

「僕の本当の駒は机においたこれだけ…」

すると、机に置かれたピンクと黒のカードが虹色に輝き出す。

「借り物の駒は最後まで自分が作ったと勘違いしていましたかね…」

ジャケットの男は哀れんだ目で黒ずんだカードを見つめる。

「まあ…この駒が『十年』と『終焉』みたいに旅を続けてくれればもうそれで良い…」

「そうですね…」

ジャケットの男はそう呟き、カードをどこかへ放り投げた。
白い服の青年は優しい顔でそれに答える。

「力を付けたら…いつか君の駒を助けてくれるかもしれない…」

ジャケットの男はそう呟くと共に消えてしまった。

「ここからは…また2人のゲームか…」

「そう言うことだ…」

2人の青年は自分の持つトランプを眺めながら呟く。

しかし、そのトランプをテーブルに置いたとたんに2人も姿を消した。

投げられた虹色のカードは、何時までもテーブルの遠くで、ぐるぐる円を書きながら飛び続けていた。

九話 相違（前書き）

通常編に戻りますた。

つまんないとか言っちゃいやん（笑）

と、おふぎはここまで
↑

第九話、始まります。

九話 相違

9月28日

??時??分　グールの巣窟第6階層

ビーグール（リーダー）

リユードと名乗った男が現れてから早2週間。それ以来特に変わった様子もなく、私たちは死体集めを続けている。純粹に同胞を増やし続けるために。

「しかし、こんなに増やしてどうする気かね？この世界を乗っ取るつもりででもいるのかな？」

今、私と話しているのはイーグルグールのグリフォン。本当は彼も私と同じ第5階層のグール。

しかし、鳥のグールも我々虫のグールと同じく、長となる第6階層のグールが不在のため、今は彼が鳥のグールをしきっている。

「我々には解らない…総てはマザー・バアルの意思だ…」

「ツマンナイ奴…何かしてみたい事ってないの？」

「…強いて言うなら…裏切者のベルゼブと赤い戦士を殺すことか…」

実際に、その程度しか私には思い付かなかった。グールとして再生してから特別、欲望など持たなくなってしまった。元の性格もあつての事かも知れんが、昔（生前）の事など思い出す気にもならない。

「そかそか…それはそれで面白そうじゃないか!」

…しかし、想像以上にグリフォンが話しに食いついてきた。しかし、グリフォンは楽しいことを探すのが好きなようだ。

「それなら…僕が出ていってあげるよ!」

「…なに?」

「僕が出ていって、2人を思い切り引き離してあげるよ…あの2人は何かと一緒に戦うことが多いみたいだからね…」

確かにそれも悪くはないな。利用したいと言うわけでもないが、折角の機会だ。

「…その話、乗った。」

「さっすがレギオンさん!大好き、食べちゃいたい!」

「…洒落にならん…」

実力差はそれほど無いが、虫の本能か鳥類が恐い。

「それは君の新手の冗談かい!」

「そう思ってくれても良い…」

そんな話をしながらグリフォンは歩き始める。

「…すっかりどっちか倒しちゃったらゴメンね」

「つまらん冗談だ…」

そう私が良い放つが早いのか、グリフォンは外へと飛び出していった。

「…すっかりどっちか倒されちゃってたら…お前を殺すか…」

私は一人でそう呟く。勿論冗談だが。

9月28日

午前10時00分 WISE本部

神田 孝高

グールが群れで現れてから2週間近く経った。その時はベルゼビオとか言うグールのお陰で少し…いや、かなり助かった。それからと言うものの、グールのは大人しくなっているが、何時またあんなことが起こるか解らない。

「神田、例の装備出来たみたいだぞ。」

すっかり性格の丸くなった晴崎さんから呼び出しを食らう。

「ああ…あの不思議な光の…」

グールの群が来る前日だったか…『ユグドラシル』の発光事件の事を思い出した。

『ハスター』と言う言葉に反応したと思われる『ユグドラシル』。今も原因は不明だが、その時に発せられた光により、元タイエローとールとブルーキューレの武器であった装備に異変が起きたそうだ。

「デインの波長…風の波長ねえ…」

晴崎さんに連れられ、廊下を歩いていると晴崎さんがそう小さく呟く。

そう言えば、その事件の有った後に量子物理学的な話や、自分の知らない分野のを広木さんに話されたが、ほとんど理解できなかった。

「またあの話聞かされるんすか…？」

「うーん…俺も量子論なんて、かじった程度にしか勉強してないから…」

自分はかじったどころか名前しか知らない。

「光は波であり粒である…みたいな話でしたっけ…？」

「まあ、それは量子力学ってか、光の大前提みたいなところ。

でも、ユグドラシルの光は不思議なんだよな…光と言うよりか、『光を纏った粒子』を放ってるみたいなの…まあ、別に知らなくたって良いさ。」

そんな話をしていると、研究室に着く。扉を開けるとそこには疲れきった顔で椅子に座る広木さんがいた。ここ数日研究に没頭しすぎてろくに休んでいないのだろう。

「遂に…完成したんですね…」

「ええ… キューレバレットとトールハンマー… その二つをディンのメテオフォンで召喚できるように通信電波の波長を完璧に合わせました。」

以前話された話で、自分の理解できた範囲は、あの光に当たってから適合率40%前後だったのが急激に80%に上昇。そして、メテオフォンで呼び出せるように今の今まで改良したって話だ。

「簡単に説明すると、保管されているユグドラシル鉱石から放たれる『ユグドラシルの光』… 正確には粒子のようなもので、武器を構成する原料として含有されるユグドラシルの粒子化性能が変わってくれたお陰なの。その後はメテオフォンで呼び出すときの粒子化状態と、適合率と…」

ヤバイ。ここからは殆ど解らん。

「しかし… 不思議な石だよな… ホントに石なのかどうかも危ういし…」

晴崎さんがそう呟きながら新装備の二つを眺める。

「疑っちゃ駄目ですよ。貴方のエクスカリバーとテイルのフォンだけはもしものために残してあるんですから… 石に嫌われたら召喚できなくなるかもですよ?」

「… んなアホな…」

2人の夫婦漫才を聞きながら俺含め周囲の研究員も笑っている。ただ… 晴崎さんは怪我した腕を気にしながら苦笑いを浮かべる。

「さて、もう実装試験は終わったから、これから取り扱いの練習を受けて貰います…神田君は地下の訓練室に来て下さい。晴崎さんはその管理をお願いします。」

「り、了解しました。」

少し不安はあるが、俺はそのことば通りに訓練室へと向かうことにした。

9月28日

午前10時10分 WISE本部

晴崎 潤

「り、了解しました…」

俺はそう言って神田を見送る。

しかし、俺はここに神田を呼ぶ以外に別の用事が有る。

「…エクスカリバー残してあるつつつても、折れたままなんだろ…？」

「…はい…」

広木さんが申し訳無さそうに答える。

「ユグドラシルの光を利用すれば直すことも不可能では…」

「良いんだ、直らなくて。ディンの活躍のお陰で武装兵も元の職業に戻ったし、今は取って置いてても、そのうちティールも解体するんだろ…？」

「…はい、ゆくゆくは…」

研究室一帯がしんと静まり返る。広木さん含めて、他の研究員も本心では取っておきたいんだろう。

「その方が良さ…どの道…この腕ではもう前線に復帰無理そうだし…」

先程さすっていた手を見つめる。今は大丈夫だけど、激しい運動は無理だし、もう一度折れたら治る保証はないって言われたし…

「それでも…できる限りは残しておく方針でいます…」

悲しそうな声でそう答える広木さん。これ以上悲しい話をしたくはなかったが、要件はもう一つある。

「あとさ…あの2人と一緒に奪われたメテオスーツってメテオフォンの中に粒子化して入るだろ…？」

「はい…ですから、拐われた2人のメテオスーツはエネルギーが切れるまで、共に奪われた2つのフォンによって、召喚、収納されます…つまり…」

「敵はあのメテオスーツをも手に入れたわけだ…」

実際セイントスカイの武装兵隊が元の職業に戻されたり、勢力が一気に減ったのもこのせいだ。

エネルギーに限りがあるとはいえ、そのユグドラシルに変わるエネルギー源を使われてしまえばそれまでだし。

「悪いな…広木さん…それに皆も…」

「いえ、私達こそ力不足で…」

…久しぶりにしんみりしてしまった。未だに俺はこの感覚に慣れない。

あの2人…仁と春香と過ごした時間はわずかだが、3人の絆は強かった。最近は明るく振る舞うのも抵抗が無くなってきたが、やっぱり悲しみは消えない。

「邪魔したな…」

この辛気くさい空気には耐えられない。そう思って、俺は部屋から出て、訓練室の管理室へ歩いていく。もとより、辛気くさい空気を作ったのも俺だったのだが。

「…情けねえよなあ…」

自分の情けなさを1人でばやく。ばやいてても始まんねえし、さっさと用意して神田の訓練でも見てやるか…

9月28日

午前10時30分 WISE本部 訓練室

神田 孝高

『それじゃ、訓練始めんぞ。』

晴崎さんからアナウンスが入る。彼は訓練室で行われる模擬戦やトレーニングのデータを取る管理室から俺を見ている。

『トルハンマーは多分大丈夫だろうから…キューレバレットの使い方から行くぞ。』

「はい…聖空変身!!」

《SUMMON METEO ENERGY》

返事と共に変身の動作をとり、変身を完了する。

『じゃあ…新しく登録した番号で、武器のアイコン押して、『371』がバレットだ。槍は自動でフォンに収納されるそうだ。』

「はい…キューレバレット!!」

晴崎さんの言った通りに、タッチパネルとボタンを押していく。

すると、変身と共に召喚されていたグングニルが粒子化して消え、手元にキューレバレットが召喚される。

『出来たな…じゃあ、今からターゲット出すから先ずは全部撃ち落とせ。先ずはタイムは計ないから、その代わりど真ん中狙えよ…』

「はい、いきます!!」

返事と共にターゲット用の人形が五体ほど出現し、訓練を開始する。

9月28日

午前10時00分 村井モータース

孤山 雅飛

「よし…マサ、エンジンかけてみてくれ。」

今僕に話しかけたのは、僕がハーレーに乗っていた頃の恩師。『村井モータース』の主人『村井 良平』さんだ。

下級グールの群れが襲ってきてから約2週間…その間に僕の周りでは色んな事があった。

今僕がエンジンをかけようとしているのは、理恵ちゃんが乗っている通学用のスクーター。普段はあまり乗らないらしく（グールに襲われた日も）、丁度1週間程前にバイクの調子が悪いと相談されたのだ。

その際に僕が思い出したように村井さんに連絡して、バイク修理を頼んだわけだ。

「すみません…何から何まで…」

理恵ちゃんが改めて僕にお礼を言うてくる。

しかし、整備と言ってもプラグの交換と、エンジンオイルとブレーキオイルの交換程度だ。しかも、殆どは村井さんがやってくれたことだ。

ドルル…ドルル…ドッドドッドツ…バウン！…バウンバウン！

いきなりセルモーターは使えそうもなかったので、キックスターターでエンジンをかけ、軽くスロットルをひねる。すると、スターター特有の軽いエンジン音が鳴り響く。

「…うん、これなら大丈夫だろう、良かったなお嬢ちゃん、マサ。」

「はい、ありがとうございます！-」

理恵ちゃんは笑顔で村井さんに返事をする。

「これで二人仲良くツーリング出来るって訳だな。」

「そつ…それは…／／／」

村井さんが笑いながら理恵ちゃんに話しかける。理恵ちゃんは顔を赤くして照れている。

…前にも思ってたが理恵ちゃんは相当つぶな子のようだ。

「ははははっ！しっかしな、まさか硬派なマサが彼女連れてビツクス乗ってるとはな」

「いや、そんなんじゃ無いですって-」

僕も笑いながら村井さんに返す。確かにハーレーに乗ってた頃からは考えられないだろう。

…まあ、好きでそうなった訳ではないけど。

「じゃ…じゃあ、あの修理代…」

照れてた理恵ちゃんが話を反らすためお勘定の話しに持っていく。
ナイスだ、理恵ちゃん。

「ああ、それならマサが払ってくれるからダイジョブだろ!？」

「えっ!?! 僕すか!?!」

前言撤回。村井さんには僕が働きながらバイク乗ってるイメージし
が無いのだろうが、実際、もうそろそろ浮浪者生活に限界がきてい
るのだ。

「良いんですか…? そこまでしてもらって…?」

「う…うん、大丈夫だよ!」

ここで『理恵ちゃん、払って下さい』なんて言ったら絶対嫌われる
し…本当は嫌われるべきだったのに…何だこの感じ…

「ありがとうございます、雅飛さん!!」

「良いって良いって!」

もうどうにでもなれと言う奴だな。最悪は働いて返すか…

「僕はもう少し村井さんと話していくけど…理恵ちゃんはどうする…って、あれ？理恵ちゃん学校は！？」

「気づくの遅いですよ？今日は1日文化祭の準備なんですけど…サボってきちゃいました…」

やはり僕はどこか鈍いようだ…って、そうじゃなかった。理恵ちゃんも大人しそうに見えて普通に学校サボってきちゃうものなのか？

「学校には、途中で転んでバイク屋さんで修理してもらってるって連絡しておきました。」

「ハッハッ！！大したお嬢ちゃんだな！！学校から連絡あったらそう答えとくよ！」

「な、なんかスイマセンね…」

何故か僕が謝っていた。この2人のノリに付いて行けなく成りそうだ。

「じゃあ、みんな待たせてるんで…私はこれで失礼します…雅飛さん、ありがとうございます。」

そう言っただけで理恵ちゃんはヘルメットを被り、修理したばかりのスクーターで帰ってしまった。

「…マサがあんなにふにやふにやにされるとはな…」

村井さんが理恵ちゃんの後ろ姿を見ながら呟く。

「あの…僕、今浮浪者やって…お金…」

「知ってるよ、お前が公園で野宿してるってのは。」

「えっ!？」

「まさか知られていたとは…ここ最近公園で野宿ばかりしていたから昔のバイク仲間にも見付かってしまったのだろうか。」

「じゃあ…何で…」

「ここで働いて貰おうと思ってな…金困ってんだろ？」

「そ…それは…」

「住み込みにしてやろうとも思ったんだが、俺には俺の家庭があるからな…」

「そこまでお世話になるつもりは…」

村井さんもだいたい45〜6歳、彼には自分の家庭がある。最初から居候までさせて貰うつもりはない。

「とりあえず、何が有ったかは知らないが…あんな意味わかんねえバイクといい…ただ事じゃ無いんだろ…」

村井さんには全て見抜かれていたようだ。
本当の事を話したく無かったが、いつの間にかゼビオンを調べられていたようだし…

『主…この話、乗るべきでは無いかと…』

「（…お金無いから…そうはいかない…）」

黙っていたゼビオンからテレパシーが聞こえる。確かに、このまま浮浪者で居たくないのも事実…

実際、バイクの整備や、カスタマイズは大好きだ。今は金とゼビオンやゲールの問題で気持ちを押し込めている部分もある…

「…じゃあ、しばらくここで働かせて下さい!!」

「よし!!」

『し、しかし主よ…』

「（…お金以前に、村井さんの誠意を裏切るわけにもいかないし…）」

大きな理由はそこにもある。『人間』の誠意を、気持ちを裏切りたく無かったからだ。

「この前バイトが辞めちまったから、ちょっと雑用に困ってたんだよな…」

「えっ!？」

「冗談だよ、冗談!!ハッハッハッ!」

笑いながら村井さんが冗談を言ってくる。しかし、この人の場合冗

談に聞こえない。それが村井さんの特徴でもあるのだが。

『主よ…期待を裏切るべきでないと言う考えはよく理解出来るが…私たちのせいで、あの男までグールとの戦いに巻き込んでしまったら…』

「（そうだけど…それなら…大丈夫だっていうのを思い出したんだ…）」

『？』

そう言つて僕は拳を握り締め、唐突に村井さんに向かって思い切り殴りかかる。

「でああああ！！！」

『あ、主！？』

「ふんぬっ！！！」

ゼビオンは信じられないとでも言いたそうな顔で呼び掛ける。しかし、村井さんは咄嗟のことにも関わらず、僕の拳を掴み、勢いのままに投げ飛ばした。

「ぐあっ！」

「まだまだ…踏み込みが甘いんだよ…」

村井さんはわけもなさそうに涼しい顔で答える。

これは僕たちの恒例行事のようなもので、村井さん自身の訓練も兼ねて、唐突に組み手と言うか乱闘を始めるのだ。

「（村井さんは近くの道場で柔道を教えたりもしてるんだ…他にも不良たち数十人を１人で倒したり…）」

『…』

ゼビオンは哑然として何も答えない。まあ、初めてあれを見たら、当然とも言えるだろう。

「（とにかく、村井さんはグールに襲われたくらいで恐れはしないさ…襲われたって絶対に死なない…ぼくたちの『おやっさん』なんだ…）」

『…了解した…』

ゼビオンは納得したように返事をする。

「よし、じゃあ今日の午後から仕事頼んで良いか？」

「はい！じゃあそれじゃ午後まで…なっ！？」

…のほほんとした話をしていたら、急に寒気がした。

『…主よ…早速の客人だ…』

「（わかってる…）」

「どうした、マサ？」

「いや…午後までに済ませなきゃなんない用事が有って…」

ちよつと怪しまれたが、なんとか誤魔化す。僕が気づくほどの気配だ…結構な上級グールだろう…

『近くだ、急ごう!』

その言葉通り、急いでヘルメットをかぶり、ゼビオンに跨がる。

「昼頃までには戻ってきます!」

「…お、おう!」

村井さんはポカーンとしながら僕を見送る。しかし、気にしている暇はない。怪しまれないように、ゼビオンの意思でなく、自分でセルモーターのスイッチを押し、エンジンをかけ、スロットルをひねって発車する。

9月28日

午前10時50分 WISE本部 訓練室

神田 孝高

『うゝん…精度を求めると時間掛かりすぎるし…速度を求めるとほぼあたんねえし…』

晴崎さんがアナウンスで自分に指摘してくる。武装兵隊の頃、少し

射撃訓練をしていたが、全く感覚が違う。彼の言う通り、まだまだ特訓が必要みたいだ。

『結構クセが強いから仕方ないけどなあ…春菜は直ぐにコツを覚えちゃったみたいなんだけど…』

「化け物っすかあの人…」

『あいつはその射撃の腕を見込まれて、キューレのフォンを託されたんだ…化け物どころかそれを刈り取るハンターだな。』

呆れた口調で晴崎さんが答える。

『素早く狙いを定める練習だな…狙いが決まれば綺麗に当たるみてえだか『ビーツ！ビーツ！』…ってなに！？』

グールサーチャーが反応し、サイレンが鳴り響く。

『一旦訓練は中止！！急いで現場に向かえ！！』

晴崎さんが怒鳴りながらアナウンスをいれる。しかし、言われるまでもなく訓練室から飛び出す。変身を解いていないが、なりふり構っては居られない。

「まだ実戦でバレットは使うなよー！！」

管理室から出てきた晴崎さんが後ろの方で、大声で自分の背中に呼び掛ける。

自分は解っていると言わんばかりに、振り向きながらサムズアップをし、ガレージに向かって走り出した。

9月28日

午前11時00分 河川敷

孤山 雅飛

ゼビオンの運転のもと、グールが出たと思われる場所へ到着する。
しかし、そこは不思議なほどにシンとしていて、グールが暴れた様子等ない。

「ゼビオン…本当にここは…」

『また…罔のような玩具でも置いていかれたか…？』

いや、僕が気づくほどだから相当な気…殺気のような物を持ったグールが居る筈だが…

「あつ、やっと見つけた！！」

何処からか青年の声が聞こえた。振り替えると、そこには髪が赤く、小麦色の肌の青年が立っていた。彼は派手な柄のプリントがされた青いジーンズ生地オーバーオールを着て、またもや真っ赤なＴシャツを着ている。いわゆるギャル男と言う奴だろうか。

「…何か用？」

冷たい態度で用件を聞く。すると、

「ちよつとからかいに来たよ、『ベルゼブ』さん」

「…なつ!？」

そのギャル男はそう言った途端に姿を、赤い鷲の姿に変化させた。

「イーグルグールのグリフォンだよ」覚えてるかな？」

「知らないな…変身!!」

ヘルメットは取っていたが、ゼビオンに股がついていたため、ヘルメットへ直ぐにゼビオンの力を移せ、スムーズに変身が完了した。

「嘘だ」。上位グールの会合の時に何度か合っているだろう?」

「知らないものは…知らない!!」

右腕をガトリングに変化させ、グリフォンに向かって構える。

「そうか…もしかしたらバイクと身を分けた時に少し記憶が飛んじやっただ…」

「なんだと…!？」

僕には不完全なグールとして蘇り、グールの巣窟から脱け出した所しかグールの巣窟での記憶はない。

しかし、言われてみれば変だ。もともと一つのグールだったのなら一つのグールだった時の記憶も有る筈だし、ゼビオンのことだって知っていた筈だ。

「ベルゼブという名と高い地位を得たフライグール…本当に覚えていない様だね…」

「ゼビオン…僕は…」

『私にも…このバイクに魂を得てからしか記憶がない…』

グリフォンは…いや、上位グールたちは昔の僕を知っている…

「技術屋に頼んで身を分ける前は、全然違うグールみたいだったのにな…」

「僕はいつたい…何者なんだ…」

「答は簡単…孤高でプライドの高い…残酷なハ工野郎さ…」

「このっ…!!」

気付いたら僕は怒りに任せ、グリフォンに飛び掛かり、アイツの首もとを掴みんでいた。

「クウ…エエ…（いい顔に…成ってきたね…）」

グリフォンが人間の言葉でなく、グールの鳴き声で苦しがる。しかし、まだ虚勢を張っている。無様でしかない。

『あ、主よ!!』

「クアア…（ならこれはどうだ…）」

グリフォンは首を掴まれたまま先ほどのギャル男に姿を変える。

「姿を変えたところで…惑わされるか…!!」

僕は首を掴む手を緩めない。

「グウ…クエアア…（くっ…ここまで上手く行くとは…）」

「いったい何の事だ…!？」

握る手をさらに強くし、その体を持ち上げる。このまま…コイツを…殺し…

「貴様は…ベルゼビオ…!!」

また後ろから声が聞こえた。振り替えるとそこには赤い戦士…ディンが立っていた。

「人の笑顔を護るのではなかったのか!？」

「違う…コイツは…」

「うらあ!!」

ディンは槍を構え、グリフォンに当たaraぬように僕を突いて来る。グリフォンの顔にはは絞め殺される苦しさではなく、相手を騙して喜びを表す『笑顔』。コイツの目的は…

『仲間撃ちか…クソッ!!』

9月28日

午前11時00分 喫茶店『THE FOOL』

三沢 颯太

『颯太…今、デカイ2つの何かがぶつかってる…』

「なにっ…!？」

「ちょっと颯ちゃん、気を付けて!？」

ピアスに変形しているハスターが耳元で語りかける。
驚いて、お客さんのテーブルに運ぼうとしていたコーヒーが零れそうになってしまい、佐久間に怒られる。

『片方はグールで、もう片方は解らん…しかし、どっちもグールよ、私達に近い力を持っている…』

「どういう事だよ…しかも、今まで大人しかったグールがなんでまた…」

『まだ何も解らん…』

「とりあえず…どうにかして一旦バイト抜け出すか…」

そんなことを呟きながら、またお客さんの席へコーヒーを持っていく。

「お待たせいたしました。カプチーノとハニーワッフルのセットでございます。」

「…公私を分けて居るのかいないのか…」

「うるせえ……マスター、ちょっと外の掃除してきます!!」

「はい、手え抜かないでね」

そう言つて、急いで外に飛び出す。

「颯太よ…あそこにある自転車を使え…」

「おま…チャリ移動かよ!?!」

「違う…」

ピアスのハスターがアメーバ状になり、立て掛けてあつたボロい自転車に結集し、スポーツバイクの形を形成する。

「…何でもありだな…てか、この前は無理で何で今はできんだよ。」

「乗り物を形成するには『大本』が必要でな…自転車を大本に装甲とエンジンを造つただけだ…」

「でも、俺無免許でギア車乗れないんだけど…」

俺がそう言つと、ハスターはバイクから少しずつアメーバを伸ばしていき、ベルトに変わる。

『変身すれば個人は特定されまい…それに、運転が楽なようにエンジンにはオートマチック式だ。』

実際にオートマチック式のスポーツバイクは現存するらしいからな…』

いや、それらしい理由付けてるけど、お前ホントに何でもアリだろ…

「仕方ねえか…変身!!」

そう叫んで変身を完了するが、身体が驚くほど軽い。

『元が大型バイクなら…お前の装甲をもう少し厚く出来たのだが…我慢してくれ…』

「大体予想はしてたさ…」

そう言つて、バイクに股がり、セルスターターのスイッチを押し、エンジンをかける。

「結構本格的だな…中身はオートマだけだ。」

『無駄口を叩くな…』

「解ってるよ…」

そう言つてスロットルを捻り、バイクを発進する。原付しか乗った事は無いが…なんとかなるだろ…

九話 相違（後書き）

・ハスター（バイクモード）
ベース車 DN-01（HONDA）

ハスターが自転車の中核に、装甲とエンジンを形成したバイク。大型のオートマチックエンジンのバイク（ビックスクーター等）を中核とすると、装甲を形成するだけですむ。

しかし、スポーツタイプ等のマニュアル車を中核とすると、颯太がマニュアル車（ギア車）に乗れないため、多分無意味。

原付バイク等を中核とすると、形成した装甲とバイクの出力が釣り合わないし、何より不恰好なため使用されない。

説明はこんな所ですかね。

結果、自転車を基にするのが一番安定すると言っわけです。

さて、今回はディンとベルゼビオが対立してます。ありきたりな、このエピソードですが、一番書きたかった所でもあります（笑）

そしてバイク、『DN-01』というバイクはスポーツタイプなのに、ギアチェンジの操作が要らないと言う新しいのバイクです。うん、乗りたい（爆）

これを連載当初（Wが終わりそうな頃）に偶然知って『新しい！ハスターで使ってみよう！！』と考えて現在に至りました。

…でも弥太は知ってしまったのです。先月この話の下書を書き終えた頃…

『ディケイドのバイクのベース車『DN-01』に乗ってます！』

と言うモ　ゲーのサークルの書き込みを見てしまったのです…

だから何だってか（笑）

つまりは、『能力的にもそう言う所もディケイドっばいね、ハスタ
ーってm9（´、`）』

と、改めて思った訳です…

あつ、

ディケイドで思い出しましたが、予想より早くディロイド外伝書き
終わりそうです（笑）

と、言う訳で今回はこの辺でさようなら^^ノシ

次に会うのはハスターの次話が早いかな…ディロイドの外伝が先かな…

十話 三巴（前書き）

遅くなりました

今回は3人がようやく集まりますが、ハスターはちょっと活躍少なめです

十話 三巴

9月28日

午前11時10分 河川敷

神田 孝高

「人の笑顔を護るのではなかったのか!？」

「違う…コイツは…」

「うらあ!！」

ベルゼビオに掴まれた被害者を傷付けぬよう突きで攻撃する。

『人間を盾にされても困るわ…あんまり刺激しないように…』

広木さんの通信が入る。言われなくともそれくらいは判断がついた。

「所詮は…お前もグールだと言うことか…」

「ぼ…僕は…」

「被害者を放せ!！」

槍を向け、忠告する。すると、ベルゼビオは被害者の青年を離し、ガトリングを構える。

「う、うわあ…」

ふぬけた声を出して青年は屍餅をつく。

「こ、この黒いのが…い、いきなり掴みかかってきて…」

「お前…僕を何処まで愚弄す…!!」

「う、うわぁ!?!」

怯える青年に向かって怒鳴り散らすベルゼビオに、グングニルを振り下ろす。青年は、それをみて一目散に逃げ出す。

「…人の笑顔を守ると言うのは嘘だったのか…?」

振り下ろしながら、ベルゼビオに問う。結局は人を殺めて仲間を殖やすだけが目的なのか。

「違う!!…僕はアイツに騙されて…!!」

ガトリングの銃身でグングニルを受け止める。自分は一度間合いを取り、グングニルの槍を飛ばす。

「騙されたから…感情一つで…人を殺すのか!!」

「ぐう…」

少しよろけたが、効いている様子はない。グングニルでは敵わない…

「君こそ…感情一つでグールを殺すのか!?!」

「それが仕事だ!!」

自分はそう良い放ち、もう一度身構える。

「だからって…黙ってやられる訳には…!!」

「ぬあああ!？」

ベルゼビオがガトリングから無数の銃撃を放ってくる。最初こそはなんとか避けられたが、その連続した銃撃は止むこと無く、自分を追い詰めてくる。

「がはっ…」

「くっ…弾切れか…」

ガトリングの弾が切れ、ベルゼビオはガトリングを下ろす。半分以上は自分に命中したのだろうか、結構なダメージが体に残る…

…あの時、仁さんと春菜さんがやられた時の蜂のゲールを思い出した。

…圧倒的に強く…恐ろしい…今、まさにその感覚が甦った。

「はぁ…はぁ…うおおお!!」

「こいつ…まだ!？」

気合いを入れ直し、メテオフォンの『3・7・2』とタッチパネルの武器のマークを押す。マスクの中のサテライトディスプレイには『トルハンマー』と表示されている。これについては使用するなとも何も言われていない…使わなければ勝てる気はしない…

『おい！いきなり実戦で使っじゃねえよ！！』

晴崎さんがそう言っている間に手にはツールハンマーが形成され、ベルゼビオに当たったグングニルが消えていく。

「僕の話をしけ！！」

「もう聞く必要などない！！」

ハンマーを構え、思い切り振り下ろす。持っているだけで精一杯だが…やるしかない…！！

「ぐ…」

「まだまだ！！」

ベルゼビオはなんとかかわしたが、もう一度横薙ぎにハンマーを振り回す。

「ぬあああ！？」

『神田、無茶すんな！！相手は本気じゃない、被害者連れて逃げろ！！』

ベルゼビオは避けきれずに吹き飛ぶ。強い、これならいける！！

「もう…一発！！」

『聞こえてんのか！？神田！！』

ブウウウン!!

…ツーストロークエンジンのように甲高い豪快な音…しかし、それは五月蠅すぎず、ビクスクーターのマフラーが出てくるような重低音にも似た音…ただのスポーツバイクではない…

『神田君！聴いてる！？』

広木さんの声で我に帰る。先程からずっと呼び掛け続けていたのだから…焦りと怒りで全く耳に入らなかった。

「…なにやってんだよ…お前等…」

9月28日

午前11時15分 河川敷

孤山 雅飛

「僕の話をしけー!!」

「もう聞く必要などない!!」

『落ち着くのだ！主よ！！』

僕は戦う気なんて無かったし…ただ聴いて欲しいだけだ。

そんなことをしているうちにも、グリフォンは遠くでニヤニヤしながらこちらを見ている…デインは怒りでその事に気づかない。

…僕の方こそ怒っていると言っのに…

「ぐ…」

「まだまだ！！」

一撃目のハンマーはなんとかかわしたが、デインはもう一度横薙ぎにハンマーを振り回す。

「ぬあああ！？」

ヤバイ…一撃一撃が重すぎる…

「もう…一発！！」

『主よ！！次は耐えきれんぞ！？』

ブウウウン！！

スポーツバイクのチャンバーから出るような躍動感の有る音だが、エンジンの回転音はオートマチックのエンジンの様な音にも聞こえる。不思議なスポーツバイクだ…

『主よ、アイツの動きが止まっているうちに…』

ゼビオンの声で再び正面に意識が戻る。

「なにやってんだよ…お前等…」

9月28日

午前11時15分 河川敷

三沢 颯太 神田 孝高 孤山 雅飛

「なにやってんだよ…お前等…」

バイクを止め、バイクからハスターを装甲に戻す。すると、バイクは自転車に戻り、その場に転げる。

2人の間に割って入り、とりあえず事情を聞く。勿論、戦闘する体勢はとっている。

『おい…コイツらは多分私たちの仲間だ…』

「なっ…？」

当事者よりさきにハスターから返事が帰ってくる。

「じゃあ…何でこの二人は争っているんだ…？」

「それはコイツがグールで…自分がW I S Eの仮面ライダーだからだ…」

赤い方がそう答える。仮面ライダー…そう名乗る輩が他にも…？

「僕は…仮面ライダーみたいに人の陰で人を護りたかった…でも、人はそれを望んでいないようだね…」

黒い方も続けて答える。コイツも仮面ライダーを名乗ってるのか…？

『とりあえず、争ってる場合じゃ無い…お前等2人も変身を解け。今の私に敵意はない…』

「お前に無くとも自分にはある！！そのグールを始末する！！」

「そっちがその気なら…黙ってやられる訳には…！！」

まだいがみ合いは止まる気配がない。それぞれがガトリングと、ハンマーを構え、もう一度戦闘体勢に入る。

「食らえ…はああ！！」

「まだまだ！！」

赤い方はまたハンマーを降り下ろす。黒い方もやられまいと必死に

避けていく。

「おい、ハスター！？早くなんとか…」

『解っている…赤い方から止めるぞ！』

その言葉と共に俺は赤い方に近づく。

『アイツは振りが大きすぎる…ハンマーを振った直後だ！』

赤い方はこちらを気にせず、黒い方に向かって、ハンマーを思い切り振りが下ろす。

「うらああ！」

ハスターの言う通り、振った直後は隙が大きい。その隙をつき、思い切り延髄蹴りを食らわす。

「ぬっ…ああ！？」

赤い方はハンマーを取り落として、よろける。

「結局は君も戦うつもりか！？」

それを見て黒い方がガトリングを構え、コチラに向けてくる。

「ヤバッ…ハスター、盾のイメージとかとリンク出来ねえのか！？」

『その必要はない…』

そう言うと、ハスターが装甲から少しずつ手元に黒い球体を造りだす。その間に、黒い方はガトリングを発砲してくる。しかし、ハスターは焦る様子もなく、手に集まった球体を盾へ変化させる。

「何でもありにも程があるだろ!？」

『その代わり装甲は大分薄くなった、盾ですべて防がなければお前の身がもたなくなる…』

「く…おおお!!」

そう言いながらハスターは全ての弾を弾いていく。無駄と解った黒い方はガトリングをしまい、直接殴り掛かってくる。

「らああああ!!」

それと同時に、赤い方も俺に向かって殴り掛かってくる。

「ハスター、装甲に戻って!!」

『ああ!!』

すると、盾が体へ吸収されて行き、元の状態に戻る。しかし、二方向からの攻撃に対処するには…

『赤の方が速い、赤い方から先にかわして、勢いのまま黒い方にぶつけてやれ!』

「また無茶な注文を!!」

と、文句を垂れながらも、赤い方の拳をかわす。怒りに任せた拳だから俺にだって起動は見える。

「なっ…!？」

「ぐあっ!？」

そのまま赤い方の後ろに回り、背中を蹴ってやると、本当に勢いのまま黒い方を殴る形となった。

『本当に上手くいくとはな…』

「上手くいく自信なかったならやらせんなよ!？」

ハスターの呟きに突っ込みながら二人を見る。

「攻撃、防御、身のこなし…」

「全て僕らを上回っている…」

2人は立ち上がりながらこちらを見る。

「君はいつたい…?」

『私は…仮面ライダーハスターだ…』

「仮面ライダー…ハスター…」

「あの時の黒い球体か!？」

その言葉と共に、ハスターがベルトから黒い球体に変わり、俺の変身を解除する。

反応をみるかぎり、赤い方は俺のことを知っているようだった。

組織絡みで…いや、先ずハスターを知っている奴なんて大分前に会った青年しか思い当たらない…

『貴様等は己の使命を見誤っている…貴様等のすべきことは見境無くグールを倒すことではなく、怒りに任せて仲間同士で喧嘩をする事でもない!!』

「くっ…」

「……」

ハスターの言葉が通じたのか、赤い方はブレスの形をした装備から携帯電話のような機械を取り外す。黒い方はフルフェイスのヘルメットのような形をしたマスクを取り外す。

「…2人とも…うちの客じゃねえか…」

赤い方はだいたい予想はついていたが、黒い方は意外だった。

彼はよくうちの店にコーヒーを飲みに来るからだ。

「なっ!?!…お前は…」

「…君は…そんな…」

2人も同時に驚く。しかし、それは俺を見てではなく、お互いを見てだ。

「何で…神田くんが…」

「孤山が…グール…？」

…そう、彼等は何時だったか、うちの店で共にグールの話をしていた。

「それに、コーヒーショップの店員さんまで!？」

「いや、今さら驚かなくても大丈夫だから。」

黒い方は、ちょっと前にバイクですれ違った時に少し話をしたが、やはり良く解らない奴だ…

「孤山が…グール…」

「騙すつもりは無かったんだ…それでも…」

『あとはコイツら本人同士の問題だな…』

お互いにまだショックを受けている状態だった。昔の友達みたいだし無理もない。

「…僕は…バイク屋の仕事があるから…」

「逃げるのか!？」

そう言つて、黒い方はバイクのエンジンをかけようとする。赤い方も必死で止めようとする。

「おい、お前ら!!」

自然と、俺は怒鳴っていた。その後続く言葉など考えていなかったが。

「…俺は『三沢 颯太』、お前らの名前は!？」

急に自己紹介を始めてしまった。焦りすぎてこんなことしか言えなかった自分が情けない。

「…『神田 孝高』だ。」

「『孤山 雅飛』…」

しかし、ちゃんと2人とも名を名乗ってくれた。

『結果オーライと言うやつか…』

そうして、雅飛はヘルメットを被り、バイクを発車させる。

「あつ!？くそ…まあいい、自分も本部に戻るか…」

逃げられた事に腹をたてる孝高だが、彼もバイクを出す準備を始める。

「ハスターと言ったな…」

「んう？」

コイツも俺を無視して行くのかと思いきや、突然話しかけられ、少し焦った。

「いつぞや、自分達『W I S E』の事を目障りと言ったな…」

『ああ…』

「撤回させてやるぞ…」

『…楽しみにしていよう…』

そう呟くと、孝高はバイクを発車させて帰っていった。

「…何だっただ……いたい…」

『こんなに早く3つの『駒』が揃うとはな…』

「…この前は聞かなかったけど、今回はハッキリと聞くぞ…『駒』っていったい何なんだ…」

『…ディンとベルゼビオだったか…あの2つの力の源と私…この3つの力が『駒』…それ以上には言えないな…』

「たったそれだけの事…隠す必要なかったろ…」

『そう思ってくれば良い…全てを知った時、少しショックを受けるかもしれない…』

「…そうかよ…」

そんな話をしながら、倒れた自転車を起こす。

『所で颯太…早く店に戻らなくて「行くぞハスター、変身だー!!」…解った。』

そう言つて、来たときと同じく、バイクと装甲にハスターが変形する。

『私も貴様の『戦士』のイメージを使うのに慣れてきたな…』

「良いことじゃないか、さあ早く行こうかハスター様、風より速く…!」

その言葉通りに、バイクを発車させる。オートマならではの素早い加速、それでいてスポーツタイプのような走行性能…まあ、俺はあんまりバイク詳しく無いけど。

そんな事を考えるよりも、俺のしなければならないことはただひとつ…マスターにバレないように店に戻ることだ…

9月28日

午前12時00分 WISE本部

神田 孝高

「神田…アレはどういう事かな…」

先ほどの戦いの事を言っているのだろう。
怒られるのも無理はない。俺は勝つてな行動に出すぎた。

「…敵を憎み…恐れるあまりに…勝手な事をしてしまいました…」

「いや、別に俺達の言ってた事も命令って訳じゃないし、逆らうのはお前の自由なんだけどな…」

晴崎さんはあくまで優しくった。なのに、おれはこの人の言葉を無視していたんだ…

「だけど、逆らうならお前の意思を明確にしてからにしろ…意思も無い無謀な作戦はお前の命を落とす…」

「はい…」

「それはそうと、何で今回あのベルゼビオを名乗るグールが人間を裏切ったのかしら…」

ベルゼビオ…孤山…未だに2つの影が俺の中で一致しない。それに…

「一番ビックリなのはハスターよね…あつ、もうユグドラシルは反応しないから大丈夫よ。」

何度かハスターと言う言葉をかけたが、ユグドラシルはあの時以来、不思議な光を放つことはなかった。

「ハスターは…自分とベルゼビオを仲間と言っていました…それとあの強さ…」

「そうだな…アイツは俺等の知らないことをたぶん知ってる…」

そうだ…変身を解いた後の事だから2人は知らないが、あの『三沢颯太』という男…あいつが何かを…

「そう、あの変身を解いたとき少し見えたけど、あの青年が鍵になつて…」

「いや、それは違うかと…」

「「えっ？」」

「少しアイツと話して解りました…確かに鍵になってるのは『ハスター』ですが、あの男は…そういう奴じゃない…」

でも、前に会ったときはまだ戦う決意を持っていなかった。俺も戦いに巻き込まれる事を止めた。

「ふん…」

「ですが…強い意志は感じました…」

それでも自分で戦う事を選んだのだから、きっと強い意志が有るんだろう…

「そう…それなら良いじゃない…」

そうだ…彼は問題ない。

一番の問題になるのは…孤山…いや、ベルゼビオだ…

9月28日

午前12時00分 村井モータース

孤山 雅飛

「しかし早かったなあ、普通は今から飯だぞ？」

「あ、僕ももう少しかかるかなあと思ってたんですけどね……」

僕は店のガレージの中にある小さな椅子に座らせてもらう。村井さんは、表面が破けていて客に出すには失礼だが、自分で座るには丁度いいくらいのソファ―に腰かけ、作業台の上で錆び付いたマフラーの錆び落としをしていた。

「そのチャンバー……酷い錆ですね……」

「ああ……ちょっと前に下取りしたバイクのマフラーだよ……性能には問題無かったらしいが、見た目がこれじゃあな……まあ、あの娘のバイクメンテナンスも終わって暇だからやってたダケさ……」

そう言いながら鋼材用の紙ヤスリと、錆び落としや切削用の機械油で磨いていく。

「飯は食ったのか？」

「あ、はい……」

実際は食わなくても平気だから、食べたことにしておく。

「じゃあ…俺は食いに行ってくるから…早速だけど錆び落としやつといてくれよ。たいした仕事じゃ無いけどな…」

「は、はい！」

それでも初めての仕事だ…まあ、素人でも出来そうな事だが。

「さーて…ガキどもが待つてるから早くしねえと…」

村井さんはそう呟きながらそそくさと自宅へ歩いていく。あの人も息子さんにご飯を食べるのか…想像がつかない…

……

「ハアアア！！！」

「ふんぬっ！！！」

いつもの通りに思い切り殴りかかっていく。しかし、

「ぐえっ！？」

振り替えることもせず、村井さんは拳を避け、僕は勢いのままに地面に転げる。

「いつものみたいな勢いがねえぞ…」

そう言つて村井さんはすたすたと歩いていつてしまった。

「っ…いつてて…」

『…主、』

「（…なんだい、ゼビオン…）」

立ち上がつて、作業に取り掛かろうとするとゼビオンの声が聴こえてくる。

錆び落としのスプレーを吹き付けながら僕は返事を返す。

『あのハスターとか言う輩は…いつたい…』

「（君に解らないなら僕でも解らないさ…ただ、未だ何か隠し事してそうなのだけは解る…）」

ヤスリでスプレーを吹き掛けた部分を磨いていく。ハスター…何か懐かしい響きがしなくてもないんだよな…

『では、主よ…貴方は…人間を未だ信じられるか…？』

「（…どうだろう…少なくとも、神田君が僕に恐怖を抱いていたのは解る…向こうはもう僕を信じていない…）」

僕の動きが止まる。せつかく吹き付けたスプレーも磨かれる事無く、気化していく。

村井さんも気化するのが面倒だから切削油で磨いていたんだろうな。

『私は主の分身…主が人間を信じるのなら…私はそれに力を貸すのみ…』

今度は動きを止める事無く、気化しないように切削油で磨いていく。

「（次に…グリフォンが出たとき…その時までを考える…）」

そうは言いながらも、村井さんを信用してこのバイク屋で働いているのだから、なんとも言えない。油に磨き落とされた錆が溶け出して、薄汚くドロドロに油は変わっていく。僕の薄汚い心境を現しているようだ。

『もし…人間をみかぎる事になったら…主は…』

「…さあ、どうなるだろうね…」

思わず口に出して呟いていた。グールの巣窟に戻る事も無いだろうし、人間を襲うこともないだろうし…

だが…一番の問題は…

「（そうになったら…神田くんは、僕を殺しに来るのかな…）」

9月28日

??時??分 グールの巣窟6階層

ビーグル（リーダー）

「はっは、赤と黒の分断には成功したよ」

グリフォンが小躍りしながらこちらへやって来る。人間の姿をとっている。

「どちらか始末してきたのか？」

「うんにゃ、白いのが邪魔だからさっさと逃げてきた。」

どうやら引つ掻き回すだけ引つ掻き回して来たようだ。

「これからは顔を合わす度に喧嘩を始めるんだろうなあ」あゝ楽しみ」

陽気な鳥頭はイーグルゲールの姿に戻って踊り始める。

「止めんか、気色の悪い……」

「ふっふふん、明日が楽しみだなあ」

「明日止めを刺しに行くのか……」

「今日は疲れた、ベルゼブに危うく絞め殺されるかと……」

それでも、グリフォンは陽気。いい加減にウザったく成ってきた。

「私は5階に戻る……明日は私も行く……」

「いいよ…♪」

グリフォンはニヤリとしながらこちらを見て返事をする。

それを見て私は5階層へ戻っていく…明日が…楽しみだ…

9月28日

??時??分 グールの巣窟第6階層
グリフォン

「私は5階に戻る…明日は私も行く…」

よし、乗ってきた…と、言っても実は嘘。こんな楽しいこと明日まで待てるわけ無いじゃん。

「いいよ…♪」

とりあえず、『一緒に行こうぜ』って言う雰囲気醸し出しておくま、明日にはどっちか…いや、残りは白いのだけになってるかも知れないけどね。

好都合にもレギオンは上に帰っていった。これで自由に遊びに行ける…

…でも、明日になって何があったか何て聞かれたらどうしようかな…
…適当にあしらっておけば良いかな♪

「バイバイ…蜜蜂ハッチさん…」

十話 三巴（後書き）

ハスターが基本能力として装甲の自在化を覚えました（笑）

ハスターも颯太の思い描く『戦士』のイメージの使い方には慣れていません。颯太と出会うまでは白いローブ姿で戦っていましたから… あっ、因みに白いローブの姿は何かのイメージではありません（あまり多くは語れませんが）

駒の意味については… まだコメントは無しで（照）

十一話 結束（前書き）

既に3月には出来ていましたが…
なかなか文面が気に入らなくて…
こんな駄文しか私には…

十一話 結束

9月28日

18時00分 河川敷

グリフォン

「
」

結局やって来ちゃいました。数時間前と殆どおなじ所。でも、さつきと違うのは人通りの多さ。

…マザー・バアルの意思なんて知った事じゃ無いけど、とりあえず…

「屍は…置いてってね…」

「う、うわああ!？」

「きゃああああ!！」

僕は人間の姿からイーグルゲール…グリフォンの姿戻る。そして、無数の羽を飛ばし、人間共を貫いていく。

…楽しいな…人の喚く声も…

「…赤、黒、白…どれが最初に…助けに来てくれるかな…？」

9月28日

18時10分 河川敷

神田 孝高

俺はもう一度この場所へ来た。数時間前と同じく、ここにグールの反応を関知したからだ。

「何だ…これは…」

しかし、昼間に見た景色とは似ても似つかない…

『酷いわね…こんなに沢山の人が…』

道一面に人が倒れている…恐らくもう皆手遅れだろう…俺は既に変身しているため、この光景は広木さんたちにも見えているのだ…

「この傷痕は…」

倒れている内の1人を抱き上げる。その胸には何かで撃ち抜かれたような小さな傷痕…

「ああ…昼間の人…!？」

「君は…?」

後ろから声が聞こえた。振り返ると赤い髪と独特な服装の…昼間、ベルゼビオに襲われていた青年が居た。

「…いったい何が有ったんだ…？」

「あ、あの黒いのが…ガトリング持って…また暴れはじめて…」

「なに…！？」

ベルゼビオ…孤山が…！？さっきの傷痕はベルゼビオのガトリングの…

『…早速アイツと戦うのか…』

「…覚悟なら…できています…」

それは…数時間前…

「問題は…ベルゼビオの方です…」

「神田…お前は…もうアイツと戦えない…」

晴崎さんは優しい表情から、少し厳しい表情に成っていく。

「いえ、次こそは冷静に…」

「本当にできるか？お前はあのグールと戦ったときに、アイツに対する恐怖を覚えた…」

険しい表情のまま彼はそう続けた。

「そ、それは確かに…ですが、アイツは絶対に自分の手で…」

「しかし、その恐れより厄介なのが、今の憎しみだ…」

「うつ…」

返す言葉がなかった。自分でも憎しみと恐怖には気づいているつもりだった。

それが簡単に表に出てしまうほど自分は思い詰めていたのだろうか…

「俺もそうだったが…あのレベルのグールは憎しみだけで簡単に倒せるような奴じゃない…もっと強力な『覚悟』みたいなのが必要だろ…」

俺を見つめて晴崎さんはそう諭す。

「お前にはアイツを倒す強い意思…覚悟はあるのか…？」

険しかった晴崎さんの顔は、どこかもの悲しそうにみえた。

「覚悟…」

「その黒い奴は何処へ行つた…？」

怯えきつた赤髪の青年に問いかける。

「む、向こうの方に…歩いてつた…」

青年は自分の後ろの方向を指差した。

「解りました…ご協力ありがとうございます。」

民間の方に協力をあおいだと言うことで、丁寧に礼をする。そして、自分は指差された方へと歩いていく。

『…中途半端な覚悟じゃ…かえつてお前が倒されるだけだぞ…』

晴崎さんから通信が聴こえる。

「自分の覚悟は…」

またもや晴崎さんに諭される。

「…自分はこれだけの被害を出したグルを許すわけにはいきません…でも…」

…覚悟がまだ中途半端だった事まで悟られていた。

自分は『ベルゼビオ』が憎い。しかし、それがかつての友達『孤山雅飛』と知った今、自分は止めをさせるだろうか…

『何が心に引つ掛かつてるかはわかんねえ…だが、そんなんでアイクッククッ！所詮はバカばかりだね！！ベルゼブも真っ赤な

君も！！…ッなに！？』

晴崎さんの通信の途中だった。突然、自分の背後から笑い声が聴こえる。

声は先程の青年のもの…しかし後ろを振り替えると、

「クッハハハッハ！！バーカ！！」

尖った何かがドリルのように回転しながら突進してくる。これは…

「がはあ！？」

「フッハッハッ！！いい気味だね！！」

避けることもできず、その突進してくる何かが自分の腹部に直撃。その何かは回転を止め、三つ爪の足について地面に降り立ち、背中に生える翼を拡げた。

「ぐっ…どういう…事だ…！？」

「見て解んないの！？やっぱりバカなんだねえ…お前。」

鳥の姿をしたそいつ…グールはコチラを見て笑い出す。考えられる答えは一つ…

「ぐっ…全部芝居だったのか！？」

「ククク…最初は他のグールに頼まれて、ベルゼブと喧嘩させて引き離すだけだったんだけどね…それだけじゃあ物足りない…ここで君等をズタズタにしたいなあって思ったんだあ。」

『神田、その鳥もたぶん…上位レベルだぞ!』

グールが喋っている…と言うか、あの青年に化けていた事を考えると、知能と特殊な能力を持っているのは想像がついた。

「さっきの自分達は…お前のシナリオ通り動いていたとでも言うのか…?」

ランスを構え直し、グールに向き直る。

「まあ、そんなとこだね…しかし、君らの話聴いてたらさ…何か知り合いみたいだったじゃない?

だから話し合いとか始まる前に…片方だけでも潰そうかと思って…」

グールは翼をバタつかせながらそう良い放つ。

『神田…さっきみたいに熱くなるな…』

「さて…ボーツとするなよ…!?!?」

グールはバタつかせていた翼をコチラへ向けたかと思えば、翼から無数の羽がコチラへと飛んできた。

「ぬっ…はああ…!」

反射的に真横に飛び退き、転がりながら距離をおく。ベルセビオのガトリングとは違い、続けて羽を飛ばすことは出来ないようだ。しかし

「羽ダケじゃあ無いんだよお!!」

「ぐあああ!!」

先程と同じく、嘴を体ごと回転させて突進してくる。

こちらは体勢が不安定で、避けられる筈もない。受け身も取れずに自分は吹き飛ばされる。

「僕の鳥頭に負けるんだから…君、相当なバカだね…?」

『神田君っ!?!大丈夫!?!』

「くっ…があっ…」

広木さんが叫んでいる。自分は立ち上がるべく、地面に手を着く…すると、先程飛ばされたの羽が目止まる。

「この羽で…あの人は…」

「いちいち言わなくてももう解ってるでしょ?バカなの? 強いて言えば、ベルゼブのせいにするために羽を片付けるのが大変だったかな…?」

「ちっ…いちいち癪にさわる…!!」

何時ものようにグングニルを構え、思い切り投げつける。

「よっ♪どこなげてんのお?」

「くっ!!」

『落ち着けよ神田!!』

しかし、グールは難なくかわしていく。晴崎さんに諭されながらも、左手をかざしグングニルをもう一度召喚し構える。

あまり間を開けると避けられてしまったため、間髪入れずにもう一度グングニルを投てきする。

「はああ!!」

「よっ…」

グールはわけもなさげに避けてみせる。しかし、体勢が先程より安定していないのは確かだ。

「まだまだ!!」

「ふうう…!!」

もう一度グングニルを召喚し、投てき。グールはかわしはするが、相当ぐらついて来ている。

さっきアイツにやられた事と原理は同じ。だが、いざ自分がやられる事には慣れていないようだ。

「はああああ!!」

そして、自分はぐらついているグールに急接近し蹴り掛かる。しかし、

『……っ! 神田、迂闊に接近すんな!!』

「…なっ」

晴崎さんが何かに気がついたかのように咄嗟に声をあげる。しかし、既に自分の蹴りはグールの腹部を確実にとらえ、グールを蹴り飛ばしている…

…筈だった…

「おおっと！？…残念♪惜しかったね…」

鳥のグールは翼を羽ばたかせながら答える。確かに手応えは有った。…しかし、グールは蹴りを受け止め、翼を力強く羽ばたかせてその場に踏みとどまる。

「勢いを…止めた…！？」

「僕の翼は飛んだり浮かぶためだけじゃなくて…こんなこともるんだよ…」

『上位レベルのグールにそんな中途半端な攻撃は効かねえ…』

晴崎さんは何となく『勘』でわかっていたのかもしれない。自分も一度冷静に考えるべきだった。

いや、冷静に考えても蹴りの勢いを翼で止めるなんて予測できたか解らないが。

「っ…バランス崩したのも芝居か…」

「ふふ…安心して。こんなことが出来るグールなんて僕ぐらいだか

ら…」

「くっ…あっ…」

思い切り脚を振り回して振りほどこうとするが、逆に向こうが羽ばたく度にバランスが崩れそうになる。

「…まずは、君を空の世界へ連れて行ってあげよう…!!」

そう言つてグールは俺の脚を掴んだまま飛び上がった。

「ぬあああ!?!」

「どうだい? 空を飛ぶのは気持ちが良いだろう?」

気持ち悪い。どんな絶叫マシン好きでもこれはきつと嫌がるだろう。地面がとても遠くに見える…辺りの景色は空しか見えない。

「ぐっ…ぬうう!!」

「嫌そうな声だねえ…そんなに地面が恋しいなら…」

「なっ!?! ガアアア!!」

グールは自分を掴んだまま、体を反らせて上昇下降を円滑に繰り返している…縦に円を描くように飛行をしているのだ。

「なあああああ!?!」

物凄い遠心力で吹き飛ばされそうになる。それ以前に意識が吹き飛

びそうだ。

「地面と感動の再会だよ！！うらあああ！！」

そして回転の勢いを利用して、自分を地面へと思い切り投げ付けた。

「うがああああ！！？」

『その勢いだとメテオスーツ着てもヤバいぞ！！』

晴崎さんも焦り始める。ヤバい事くらい自分でも良く解っている。

「あああああ！！」

『グングニルを突き刺し……いや、緩衝には成らない……それならハンマーかバレットを……そんな余裕は無い……それなら……』

晴崎さんが呟きながら方法を模索する。あの戦い以来、こんなに焦っている晴崎さんは見たことがない。

「おおああああ！！」

……確実に地面は近づいている。手足をばたかせても何も起こらない……

自分は……このまま……孤山と……誤解が……解けぬまま……

……

―太陽はいつか沈む―

…声が…

―でも、君は太陽ではない―

…聞こえて…

―きみみたいな風はいつでも勝手にいい―

…誰の声だ？…

―今は沈むときでも止まるときでもない―

「…だ…れだ…」

―私と言う大樹が有る限り―

「誰…なんだ!…」

―私が貴方を育て…貴方が私を育てる―

「君は…」

声が遠ざかっていく…

— …生きて…—

…眩しい…光が…風が…体を…

9月28日

18時20分 河川敷

孤山 雅飛

『間違いない…グリフォンだ…』

ゼビオンが反応を感知して、僕はグリフォンの元へと急ぐ。仕事の
錆び落としても一段落したので簡単に抜け出せた。

「もう一つの気配は…」

『…ディンだな…』

僕にもディンの気配は読めるようになってきた。

『…主、ディンと戦うことに成ったら…』

「……」

黙り込んでしまった。ディンの正体が神田君じゃ無かったら、もしかしたら全力で相手をすると言っていたかもしれない…人間を遠ざけたかもしれない…

…神田君を相手に…僕は…

『…!! 主、アレは』

「…ん…なっ!?!」

ゼビオンには眼球が無いため、アレと言われても、ゼビオンが見ているところを瞬時に見つけることはできない。

それに…まさか上空だとは…思いもしなかった…

『主、取り敢えずは…』

「うん、変身!!」

ゼビオンが止まり、被っているヘルメットに力が乗り移る。僕もグールの姿へと戻り、ベルゼビオへ変身を完了する。

『あれは…』

「…ジェット機みたいだ…」

グリフォンと思われるグールが急速に縦方向に円を描くように飛行している。

その手にはディンが掴まれている…あんなに激しい遠心力を受けたら…

『…助けるのか…？』

「…グリフォンを倒すんだ…」

ディンと戦うか助けるのかの質問を、少し言葉を濁しながらそう答える。

「ガトリングは届かないし…ってうわぁ!？」

グリフォンが飛行する際の勢いを利用してディンを地面に放り投げた。

『あの高さからでは!…!』

「…!」

僕はどうすべきか解らずに立ち止まってしまっ

「僕は…」

人間は…神田君は、僕を信じてはくれなかった。僕が人間を殺していると思っっている。

だからと言って…僕は…

『ここで彼を見捨てたら…主も…バアルの下にいるグール共と何一つも変わらないのではないか…?』

…そうか…何を迷う必要があつたんだろうか…

「彼が…人間がそれを望まなかったとしても…一度『人の笑顔を護る』と決めたんだ…」

そう呟くと、僕は走り始めていた。

「組織もグールも関係ない！！僕は人間だ！！」

例え、それが皆に伝わらなかつたとしても

「僕が、護る！！」

『主の御心のままに…』

そして、ディンの落下地点に先回りして受け止めの体勢をとる。

『だが…この衝撃…受けきれるか…?』

問題はそれだが、いったいどうすれば…

と、そう考えていた瞬間だった。ディンの体が眩い光を放ち、その周囲を激しい竜巻が囲む。

「ふっ…ぐう…」

僕も立っているのがやっとなくらいに風が強い。しかし、その竜巻のお陰でデインの落下速度が急減していく。

「ゼビオン…これは…？」

『私にも解らん…だが…』

「これなら助か…ぐあっ！！」

デインがゆっくりと落下してくる。これなら容易に受け止められると思ったが、強風のせいで上手く受け止めの体勢をとることが出来ない。

「ぬうっ…」

『主、左腕のガントレットだ！！』

言われた通り左腕を翳す。しかし、何時もは右腕のガントレットからガトリングを出現させている。左腕にそんな装備が付いているかは自分でも良く解らない。いや、有ったとしても、ガトリングでどうやって助けるのか…

『ストレンジチェーン！！』

そうゼビオンがいい放つと、左腕のガントレットから一本の鎖が飛び出す。それと同時に、その鎖を巻き取り、射出するためのローターが出現する。

『額のエンブレムをチェーンに重ねてくれ…』

「こ…これか…」

吹き飛ばされそうに成りながら、ゼビオンの力の証…ヘルメットに何時も付いているドクロのエンブレムを掴む。それをチェーンの先に重ねる。

…つか、外せたのか…このエンブレム…

『バインドモード!!』

「うおお!？」

その声と共にエンブレムがチェーンの先端に取り付き、ゼビオンの意思で動き始める。

そしてデインの体を縛り、引き寄せる。

「いつの間にこんな芸当を…」

『ガトリングの時もそうだが…私にも使うべき時にしか使い方が解らないのだ…』

それも『ベルゼブ』から僕達が2つになった時に忘れてしまったのか…

そう考えながら、デインの体を地面へと下ろす。それと共に光と風も収まった。

「じ…自分は…って、うわぁ!？」

「ゴメン！今ほどく！！」

デインは起き上がり、状況を確認しようとするが、チェーンで身動きがとれない。

「…なにかなあ？今の竜巻に目眩まし…って、あれ？ベルゼブも出てきたのか…」

グリフォンが面白くなさそうな顔をしながら下降してくる。

「俺が知るか…ベルゼビオの力が…いや、あの声はいつたい…？」

「ぼ、僕はチェーンで掴んで降ろしただけだよ！？」

デインが…神田くんがコチラを睨みながらそう答える。僕は慌て否定するが、あれが神田くんの力でないとするといった誰が…？

「ちっ…赤いのを倒してベルゼブを怒らせようかなんて考えてたけど…そう上手くはいかないもんだね…」

グリフォンは明らかに苛立ちを見せながら呟く。

「孤山…」

「…僕が…憎いかい？」

コチラもデインを睨み返し、悪役のような声で問う。

「先ほどは済まなかった…」

「えっ」

なんだ、誤解は解けてたのか。

『せっかくカッコつけたのに…』

「（うるさい…）いや、僕も気が立ってたもんだから…」

チェーンの先っぽにいるゼビオンを睨み、僕も神田くんに謝る。
チェーンの先っぽのエンブレムが笑ってるような気がしてちよっと悔しい。

「…完全に骨折り損じゃないか…まあ、君ら2人相手くらいならなんとかなりそうだけどね…」

グリフォンが翼を広げもう一度飛び立ち、空中から無数の羽を飛ばしてくる。

「ふぬっ…」

「くっそ…」

僕らは転がりながら羽をかわしていく。

「はああああ…！」

グリフォンは更に高く飛び立とうとする。

「くっ…槍投げても届かねえぞ…」

『サイズモード!!』

神田くんが悔しそうに呟いていると、ゼビオンがそう叫ぶ。すると、ドクロのエンブレムが鎌の形に变じ、グリフォンの方にチェーンを伸ばしていく。

『主よ、私が補正をする。主な動作は任せた!!』

「お、おう!」

主な動作というのは降り下ろしや横薙ぎの攻撃のことだな、と理解し、思い切りチェーンを振り上げる。

「ぐああ!？」

すると、鎌の歯がその勢いでグリフォンに接近し、ゼビオンが自分の意思で軌道を修正し、グリフォンを切りつける。

「…つかえるな…」

「調子にノンなあ!!」

チェーンの性能に感心していたが、怒ったグリフォンが急降下しながら身体ごと嘴を回転させ、こちらへ迫って来る。

「むああ!？」

「うわああ!!」

嘴の直撃は避けたが、回転と迫って来る時の風圧に吹き飛ばされる。

「こんの…!!」

僕は体勢を建て直し、チェーンを袈裟懸けに降り下ろし、横に薙ぎ連続で切りつけていく。

「がああ!!」

効いてはいるようだが、グリフォンはそれらを食らいながらも、まだ翔び続ける。

『決定打にはならんか…』

「ベルゼビオ…いや、孤山。アイツの動きを止められるか…?」

ゼビオンの声が聞こえたか聞こえないかは解らないが、神田くんは何か決定打を持っているようだ。

「…うん、やってみる…」

『しかし…』

「（…今度は、神田君を信じてみよう。）」

…僕は、もう一度人間を信じる…!!

9月28日

18時35分 河川敷

神田 孝高

「…うん、やってみる…」

ベルゼビオ…いや、孤山がそう返事をする。

『神田…何するつもりだ？』

ベルゼビオの鎖鎌では止めはさせない…ガトリングは敵の動きを止めてからでないと恐らく当たらない…だからと言ってチェーンを使って動きを止めても、もう片方の手でガトリングを構えるのは難しい…出来たとしてもやはり当たるかどうかは解らない…

「キューレバレットを使います…」

自分の考えはこうなった。前回のようは無鉄砲にハンマーを召喚するのではない。

『バレットの扱いに馴れてりゃあその考えも正しいんだが…』「…」

「はああー!!」

そう会話している間に、ベルゼビオが鎖鎌を自分を掴んでくれた時のように捕獲用の錘の着いたチェーンに変型させて、投てきする。

『前にも言ったが…俺の言葉は命令じゃねえ…ここは現場の判断に任せる…』

「…はい！」

直接的に許可を出してはくれなかったが、自分に判断を委ねると言ってくれた。

「鬱陶しいな、くそっ!!」

「捕らえた!!」

チェーンがグールの脚に巻き付き、チェーンの先のドクロが巻き付いたチェーンに噛み付く。
成る程、あれで外れないようロックしているのか。

『…でも、仕留めらんなかったら…お前らが死ぬんだぞ…?』

「…今度こそ…覚悟は出来ています!! キューレバレット!!」
《SUMMON BARRRET》

メテオフォンの『371』ボタンとタッチパネルの武器のアイコンをタッチし、バレットを召喚する。

…今度は、ためらわない!!

「ああ!! うざったいんだよ!!」

「ぬっ… なっ!?!」

ベルゼビオはチェーンを引きながら、飛び回るグールを抑えていたが、グールが進路を変え、コチラに突進してくる
マズイ、接近してくるのに対しては、チェーンでは無力だ…

《CHARGE VORTEX》

タッチパネルの風のマークをタッチし、エネルギーを貯める。元のブルーキューレの時は水の力を放っていたが、自分は風の力を一気に放出する。

当然だが…チャンスは一度きり…

「ラアアアアア!!」

「あたれええええ!!」

接近してくる鳥頭に向かって引き金を引く。反動で体が仰け反る。急いで上体を起こすと、目の前には吹き飛ぶグール、舞う羽、破裂していく羽、そして最期には、大きな爆発が見えた。

「やった…!?!」

ベルゼビオが呟く。爆風が治まると、そこには人影どころか羽の一つもない…

「た…おした…!?!」

銃を下ろし、暫くポカンとしてから現状を把握する。

『ベルゼビオ以外のグールの反応は消えたわ…撤収よ』

疲れては居るが、どこか明るく、安堵したような声で広木さんが通信を入れてきた。

「いま…帰還します…」

そう返事をして、その場に座り込み、変身を解いた。

「ふう…」

ベルゼビオもヘルメットを外して、変身を解く。

「……」

「ありがとう」

孤山から感謝の言葉を告げられる。

「こっちの台詞だろ…」

「いや、もう一度僕を信じてくれて…」

「いや、それならまずお前を疑った自分のせいだ…」

俺が孤山の話ちゃんと聞かなかったからだ。

「まあ…結果オーライって事で！」

「ははっ…そうさせてもらうか。」

本当はそうはいかないものだが、いがみ合ってたって仕方ない。

「じゃ、自分はいったん本部に戻るから。」

「僕は…宿探しだな…」

「えっ…お前自宅は…」

「…ホームレス正義の戦士やってます…」

ずいぶんなシュール系のギャグ…って、違う。

「そ、そうなのか…」

「でも、仕事は有るから安心して。」

いや、そういう問題じゃ無いだろ。とか思いながら、ヘルメットを被る。孤山もヘルメットを被り、バイクに跨がる…そういえば、ベルゼビオと乗ってるバイクが同じって何で気づけなかったんだろう…

「じゃあね…」

「ああ、またな…」

そう告げて孤山は帰って行った…いや、帰る場所を見つけるのか。自分の帰る場所は…暫くWISEなんだろうな…

9月28日

18時50分 村井モータース

村井 良平

「…しっかし、解らんヤツだなあ…」

夕飯を食べ終え、ガレージの掃除を始める。

孤山も解らんヤツだ。一応5時にバイトを終わしてやったのに、結局6時頃まで働いてくれた。かと思ったら、急に『用事を思い出したんで帰ります！』とか言っつて、そそくさと帰ってしまった。いや、一向に構わないのだが、何があつたんだかなあ…

と、アイツの磨いてたマフラーを見してみる。

「ピツカピカだな…」

そこには先ほどまでの錆ついたマフラーではなく、新品の様とまではいえないが、銀に輝くマフラーがあつた。

仕事と呼べるほどの事では無いかもしれんが、何かが綺麗になると嬉しいもんだな。

マサの心も、なんか吹っ切れて綺麗に成ってたら良いよなあ…

9月28日

18時50分 WISE本部

神田 孝高

「…結果的には倒したけどよお…」

「今回は腑に落ちない点が幾つもあるわ…」

晴崎さんと広木さんが神妙な顔をしながらお茶を啜る。

「あるとき…地面に到達する直前に起きた竜巻だな…」

晴崎さんが煎餅をほうばりながら話す。

ジジ臭い。そして、出勤が終わると、真面目に話している筈なのに、何故こんなに緩い空気になるのか。

「ベルゼビオは関係無いと言っていました…誰かの声が聞こえました…」

「声？何て言ってたの？」

広木さんが自分の分のお茶と煎餅を出してくれた。
老夫婦か、貴方たちは。

「えっ、えーと…太陽と風がどうか…」

「はあ？」

「とりあえず、最後に『生きて』って聞こえました…」

「生きて…か…」

2人は不思議そうな顔をしながら話を聞いてくる。

「他のグールの力…もしくは、ユグドラシルの力ってどこるか？」

「グールの可能性も高いけど…まあ、ユグドラシルはもまだまだ不可解な点が多いから可能性は捨てきれないわ…」

何にしてもあれほどの竜巻を起こすくらいだ、よほど強力な力を持った何かには違いない。

ベルゼビオもあの風の中でよく立っていたものだ…

「まあ、それはそうとして、最後のバレットなんだが…何処を狙ったんだ？」

「えっ…顔面っつか、頭狙ったつもりですけど…」

晴崎さんが急に質問を変えてきた。自分は真っ正面からバレットを放った。

「やっぱり…右肩狙って撃つなんておかしいと思ったのよ…」

「？」

「…何か弾道が変だと思って、お前が帰ってくる間に最後の映像を解析したんだ…見事に右肩にヒットして爆発してた…」

頭から狙いを外した…かなりの至近距離だったはずだが…

「いや、結果的にはチャージしたバレットの威力で倒したけど…お

前にはもう少しバレットの訓練を受けてもらう必要が有るな。やっぱり。」

「は…はい…」

ちよつと…自身がなくなつて来たな、これは…

「それと、最後に一つ…聞いて良いかしら？」

次々に突き立てられる鋭い質問。老夫婦つつーか、鬼姑か…

「…神田君、貴方ベルゼビオについて何か隠してない…？」

「…え…」

「そいえば、アイツの事を『コヤマ』って呼んでたけど…何のことだ…？」

「…それは…」

最大にして答え方が一番難しい質問だな…

「拳をまじているうちに不思議と通じ会った仲で…」

「「嘘つけ」」

流石に無理があつた。しかし、知り合いだなんて迂闊に言ったら孤山に迷惑がかかる…もしかすると捕らえられて何かヤバイ事とかさ

れるかもしれないし…

「…まあ良いわ。そんなに話したくないなら…」

「でも、何時までも隠し通させるわけにはいかないからな…いつかきちつと話して貰うぞ…」

「は、はい!」

不味いな…

今回はなんとかあったが…ちゃんと孤山の事説明出来るようにしないと…

9月28日

19時00分 橋の下

???

「ガハッ!ガハッ!」

痛てえ…右肩が焼けるように痛い…撃たれた瞬間は強い風に吹き飛ばされるような感覚だったが…

「クアア…グアアア!!(ベルゼブ…赤いのお…!!)」

それでも右腕だけだったのが幸いか…撃たれた瞬間、最期の力で爆

風と砂ぼこりに紛れながら逃げてきたが…

「グウ…グウ…！！（力が…力が…！！）」

グールは力を使って人間の姿に化ける癖に、力無くなると人間みたいな姿に戻るんだな…

「いいカツコだな、グリフォン…」

ビジネススーツに黒斑のメガネ…どうみても人間の姿をしてはいるが…

「クツ…アア…ガアア！？（レギ…オン…何故！？）」

「貴様の考えなど大体解る…楽しみを2人で分けるなんてこと、お前は先ずしない…どうせ独り占めするための嘘だったんだろ…？」

「グアア…（やめろ…）」

レギオンが蜂の姿に変わり、両手の針を擦り合わせながら近づいてくる。

「『赤と黒…どっちか倒しちゃったらお前を殺す』と言ったが…お前が倒された場合はどうする約束だったかな…？」

「クウウ…グアアア…（しらない…近寄るな…）」

「どのみち、お前は嘘をついた…こんな約束意味がなくなってしまったな…今度は私が好き勝手する番だな…」

早く…逃げなきゃ…

「話しは終わっていない…」

片腕を針から通常の腕に戻し、俺の頭を掴んで、持ち上げた

「私は『明日が楽しみだ』と確かに言った…お前の見れない明日を生きることが出来るからな…」

「グア…グアアア…（嫌だ…やめろお…）」

「安心しろ…お前の部下はバハムート殿か技術屋にでも預けといてやる…最期くらい…楽しんだらどうだ？」

ザクリ

「グア」 アアアアアア！！

「貴様の精一杯などたかが知れているな…鳥頭のアホウドリが…」

3 対1（前書き）

二話いつぺんに投稿しますた

十一話を読んでからお読みください

3 対 1

「…一つ減ったね…」

真つ暗な部屋の中、白い服を着た青年が、机に置かれた黒いチェスの駒のうちの1つを取り上げる。

「私のコレは『駒』ではないと言っただろう…『駒』の使役する木偶人形の1つだ…」

黒い服の青年はそう呟きその様子を見届ける。

「強大な1つの駒…でも、その駒も木偶人形という『代償』無しには戦えない…不便な事だ…」

白い青年は、ポケットに入っていた白、赤、黒の小さな3つのカラーコーンのような置物を机に置く。

「まあ、その木偶人形の1つは僕にとってとても役に立っているけどね…」

白い青年が3つのうち1つを転がしながら呟く。

「貴様の3つの駒は『代償』が少ない代わりに力も弱い…だから無数の木偶人形のうちのたかが一体倒しただけでいい気になる…」

黒い青年は黒いBB弾のような玉をいくつも取りだし、転がす。

「私の駒にとってはとても良い勉強になったようなのでね…」

…君には解らないでしょう…人を信じることなど…」

「解らんな…」

その言葉と共に2人の影は消える。

三つの駒は団結するように固まり、無数の黒い玉は、黒のクイーンに吸い寄せられるように固まってテーブルの上に置かれていた。

3 対 1（後書き）

はい、十一話の分も合わせて後書きです。

ベルゼビオで一番やりたかった鎖鎌です

デインも何かしらガン系使いたかったんでね

あの謎の声は…次回までひみつっす（笑）

ハスターはこれ以上バイトサボると命に関わるので休ませました（笑）

そしてビーグルにもちよつと活躍させました

あのビーグルは敵側主人公とも思っていてください

さて、この話からハスターは少々お休みして、いよいよディロイドの更新に移りたいと思います！

え…同時更新？なにそれ、美味しいの？↑えっ

いや、出来ることなら同時更新で行く気ですよ（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6944/>

仮面ライダーハスター

2011年10月5日17時45分発行